

Horizon Console の管理

変更日：2018 年 5 月 29 日

VMware Horizon 7 7.5



vmware®

最新の技術ドキュメントは VMware の Web サイト (<https://docs.vmware.com/jp/>) にあります
このドキュメントに関するご意見および感想がある場合は、docfeedback@vmware.com までお送りください。

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴィエムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

Copyright © 2018 VMware, Inc. 無断転載を禁ず。著作権および商標情報。

目次

1	VMware Horizon Console の管理	5
2	VMware Horizon Console の使用	6
	サポートされている Horizon 7 機能	6
	Horizon Console を使用する利点	7
	Horizon Console のインストールと構成	8
	Horizon Console へのログイン	8
3	ユーザーとグループの認証	10
	ネットワーク外部のリモート デスクトップ アクセスの制限	10
	非認証アクセスの構成	11
	Horizon Console でのアクセス グループを使用したプールおよびファーム管理の委任	14
4	Horizon Console での仮想デスクトップ プールの作成	17
	インスタントクローン デスクトップ プールの作成	17
	フル仮想マシンを含む自動デスクトップ プールの作成	25
	デスクトップ プールの構成	30
	Horizon Console でのデスクトップ プールと仮想デスクトップの管理	35
	マシンとデスクトップ プールのトラブルシューティング	40
5	Horizon Console での公開デスクトップとアプリケーションの作成	44
	Horizon Console でのファームの作成	44
	Horizon Console での公開デスクトップ プールの作成	53
	Horizon Console でのアプリケーション プールの作成	55
	Horizon Console でのファームの管理	59
	Horizon Console でのアプリケーション プールの管理	63
	Horizon Console での RDS ホストの管理	63
	Horizon Console での公開デスクトップ セッションとアプリケーション セッションの管理	67
6	Horizon Console でユーザーとグループに資格を付与する	69
	Horizon Console でのデスクトップまたはアプリケーション プールへの資格の追加	69
	Horizon Console でのデスクトップまたはアプリケーション プールからの資格の削除	70
	デスクトップまたはアプリケーション プールの資格の確認	70
7	JMP Integrated Workflow スタート ガイド	71
	JMP Integrated Workflow のバージョン情報	71
	JMP 統合ワークフローの開始	71

8 JMP 設定の管理 73

JMP の初期構成 73

JMP 設定の管理 76

9 JMP 割り当ての管理 83

JMP 割り当ての作成 83

JMP 割り当ての編集 85

JMP 割り当ての複製 86

JMP 割り当ての削除 87

10 Horizon Console での Horizon Help Desk Tool の使用 88

Horizon Console で Horizon Help Desk Tool を開始します。 89

Horizon Help Desk Tool でのユーザーのトラブルシューティング 89

Horizon Help Desk Tool のセッションの詳細 92

Horizon Help Desk Tool のセッション プロセス 97

Horizon Help Desk Tool のアプリケーション ステータス 97

Horizon Help Desk Tool でのデスクトップまたはアプリケーション セッションのトラブルシューティング 98

VMware Horizon Console の管理

『VMware Horizon Console の管理』では、Horizon Console で VMware Horizon[®] 7 の構成と管理、管理者の作成、ユーザー認証の設定、ポリシーの構成、管理タスクを行う方法を説明します。また、Horizon 7 コンポーネントを保守およびトラブルシューティングする方法についても説明します。

対象読者

本書に記載されている情報は、VMware Horizon 7 を構成および管理するすべての方を対象としています。本書に記載されている情報は、仮想マシンのテクノロジーとデータセンターの操作に精通した、経験豊富な Windows または Linux システム管理者向けに書かれています。

VMware Horizon Console の使用

VMware Horizon Console は、Web インターフェイスの最新バージョンで、仮想デスクトップや公開デスクトップとアプリケーションを作成したり、管理することができます。また、Horizon Console には、VMware Horizon Just-in-Time Management Platform (JMP) 統合ワークフロー機能が統合され、ワークスペースの管理を行うことができます。

Horizon Console は、Horizon 接続サーバをインストールして構成した後に使用できます。

接続サーバの構成については、『Horizon 7 の管理』ガイドを参照してください。

JMP 統合ワークフロー機能の詳細については、[第 7 章「JMP Integrated Workflow スタート ガイド」](#)を参照してください。

この章では次のトピックについて説明します。

- [サポートされている Horizon 7 機能](#)
- [Horizon Console を使用する利点](#)
- [Horizon Console のインストールと構成](#)
- [Horizon Console へのログイン](#)

サポートされている Horizon 7 機能

Horizon Console には、Horizon 7 機能の一部が実装されています。従来の Web インターフェイスである Horizon Administrator を使用すると、Horizon Console でまだ使用できない機能にもアクセスできます。

Horizon Administrator でサポートされている Horizon 7 の詳細については、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。

次の機能がサポートされています。

- 資格
 - ユーザーとグループに対する資格
 - デスクトップに対する資格
 - アプリケーションに対する資格
- 認証
 - リモート アクセス認証

- 公開アプリケーションでの非認証アクセス
- 仮想デスクトップ
 - フル仮想マシンの自動専用割り当てプール
 - 自動、インスタント クローン専用割り当て、フローティング割り当てプール
- 公開デスクトップ
 - 手動ファーム
 - 自動インスタント クローン ファーム
 - RDS デスクトップ プール
- 公開アプリケーション
 - 手動アプリケーション プール
 - 既存のアプリケーションのアプリケーション プール
- 仮想マシン
 - vCenter Server で使用可能な仮想マシン
 - vCenter Server で使用できない登録済みのマシン

次の機能はサポートされていません。

- フル仮想マシンの自動フローティング割り当てプール
- 自動化されたリンク クローン デスクトップ プール
- 自動リンク クローン ファーム
- 自動デスクトップ プールのクローン作成
- クラウド ポッド アーキテクチャ
- 手動デスクトップ プール
- ThinApp アプリケーション

Horizon Console を使用する利点

Horizon Console を使用すると、デスクトップやアプリケーションのデプロイが簡単になり、ジャストイン タイムのデスクトップ配信が可能になります。セキュリティ リスクを回避するため、より安全な Web インターフェイスも利用できます。

Horizon Console Web インターフェイスを更新すると、使いやすいワークロードを使用して、デスクトップとアプリケーションのデプロイやトラブルシューティングを行うことができます。

Horizon Console には、インスタント クローン、VMware App Volumes、VMware User Environment Manager テクノロジーを統合ワークフローに組み込む JMP Integrated Workflow 機能も含まれます。この機能を使用すると、オンデマンド デスクトップをすばやくデプロイし、スケーリングできます。詳細については、[「JMP Integrated Workflow のバージョン情報」](#) を参照してください。

Horizon Console には HTML5 ベースの Web インターフェイスが用意されています。これにより、安全性を強化し、多くのセキュリティ リスクと脆弱性を排除できます。

Horizon Console のインストールと構成

Horizon 接続サーバインストーラを使用して接続サーバをインストールして構成すると、Horizon Administrator の Web インターフェイスで Horizon Console URL を使用できます。JMP Server インストーラを使用して JMP Server をインストールして構成すると、Horizon Console で JMP Integrated Workflow を使用できます。

接続サーバのインストールに関する詳細については、『Horizon 7 のインストール』ドキュメントを参照してください。

接続サーバの構成については、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。

JMP Server のインストールと設定の詳細については、『VMware Horizon JMP Server のインストールとセットアップガイド』ドキュメントを参照してください。

Horizon Console へのログイン

デスクトップまたはアプリケーションのデプロイ タスク、トラブルシューティング タスク、JMP ワークフローの管理を実行するには、Horizon Console にログインする必要があります。Horizon Administrator Web インターフェイスを介して Horizon Console にアクセスするには、セキュア接続 (TLS) を使用します。

開始する前に

- Horizon 接続サーバが専用コンピュータにインストールされていることを確認します。
- ルート アクセス グループのロールに次のロールベースのアクセスが設定されていることを確認します。
 - a 管理者。(ルート アクセス グループで管理者ロールを持つスーパー管理者として)
 - b ヘルプデスク管理者
 - c ヘルプデスク管理者 (読み取り専用)

管理者 (ルート) ロールと他のロールや権限を組み合わせても Horizon Console にログインできます。ロールベースのアクセスの設定方法については、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。

- Horizon Console でサポートされている Web ブラウザを使用していることを確認します。サポート対象 Web ブラウザの詳細については、『Horizon 7 のインストール』ドキュメントを参照してください。

手順

- 1 Horizon Administrator インターフェイスにログインします。

Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。<server> は、接続サーバ インスタンスのホスト名です。

https://<server>/admin

注 ホスト名が解決できないときに接続サーバ インスタンスにアクセスする必要がある場合は、IP アドレスを使用できます。ただし、通信するホストは、接続サーバ インスタンスに対して構成された TLS 証明書に一致しないため、アクセスがブロックされたりアクセスのセキュリティが低下したりします。

Horizon Administrator へのアクセスは、接続サーバ コンピュータで構成されている証明書のタイプによって異なります。

接続サーバ ホストで Web ブラウザを開く場合、**https://localhost** ではなく、**https://127.0.0.1** を使用して接続します。この方法で **localhost** 解決における潜在的な DNS 攻撃を回避することにより、セキュリティが向上します。

オプション	説明
接続サーバ用に CA によって署名された証明書を構成しています。	最初に接続するときに、Web ブラウザで Horizon Console が表示されます。
接続サーバによって提供されたデフォルトの自己署名証明書が構成されます。	最初に接続したときに、Web ブラウザによって、アドレスに関連付けられているセキュリティ証明書が、信頼された証明機関から発行されていないことを警告するページが表示される場合があります。 [無視] をクリックして、現在の TLS 証明書の使用を続けます。

- 2 管理者アカウントにアクセスするための認証情報を持つユーザーとしてログインします。

スタンドアローンの接続サーバ インスタンス、または複製されたグループにおける最初の接続サーバ インスタンスをインストールするときに、管理者ロールの初期割り当てを行います。デフォルトでは、接続サーバのインストールに使用するアカウントが選択されていますが、このアカウントを Administrators ローカル グループまたはドメイン グローバル グループに変更できます。

Administrators ローカル グループを選択した場合は、このグループに追加されたドメイン ユーザーを直接またはグループ メンバーシップ経由で使用できます。このグループに追加されたローカル ユーザーは使用できません。

- 3 Horizon Administrator で、[Horizon Console] をクリックします。

新しいタブで Horizon Console Web インターフェイスを開きます。シングル サインオンで Horizon Console にログインします。

ユーザーとグループの認証

Horizon Console にログインした後、ユーザーおよびグループに認証を設定し、アプリケーションやデスクトップへのアクセスを制御できます。

ネットワーク外部からデスクトップへのユーザーまたはグループのアクセスを制限するように、リモート アクセスを構成します。非認証ユーザーが Active Directory 認証情報を使用せずに Horizon Client から公開アプリケーションにアクセスできるように設定できます。

この章では次のトピックについて説明します。

- ネットワーク外部のリモート デスクトップ アクセスの制限
- 非認証アクセスの構成
- Horizon Console でのアクセス グループを使用したプールおよびファーム管理の委任

ネットワーク外部のリモート デスクトップ アクセスの制限

資格が付与されている特定のユーザーとグループについて外部ネットワークからのアクセスを許可し、資格が付与されている他のユーザーとグループについてはアクセスを制限することができます。資格が付与されたすべてのユーザーは、内部ネットワークにあるデスクトップおよびアプリケーションにアクセスできます。特定のユーザーによる外部ネットワークからのアクセスを制限しない場合、資格が付与されているすべてのユーザーが外部ネットワークからアクセスできるようになります。

セキュリティ上の理由で、管理者は外部ネットワークのユーザーとグループによるネットワーク内のリモート デスクトップおよびアプリケーションへのアクセスを制限する必要がある場合があります。制限されているユーザーが外部ネットワークからシステムにアクセスすると、ユーザーにシステムを使用する資格が付与されていないことを伝えるメッセージが表示されます。デスクトップおよびアプリケーション プールの資格を取得するには、ユーザーは内部ネットワークの中にいる必要があります。

リモート アクセスの設定

特定のユーザーとグループについてはネットワークの外部から接続サーバーインスタンスへのアクセスを許可し、その他のユーザーとグループについてはアクセスを制限できます。

開始する前に

- ユーザーに資格が付与される接続サーバインスタンスへのゲートウェイとして、Unified Access Gateway アプライアンス、セキュリティ サーバ、またはロード バランサは、ネットワークの外部にデプロイする必要があります。Unified Access Gateway アプライアンスのデプロイの詳細については、『Unified Access Gateway の導入および設定』ドキュメントを参照してください。
- リモートからアクセスするユーザーには、デスクトップやアプリケーション プールへの資格を付与する必要があります。

手順

- 1 Horizon Console で、[ユーザーとグループ] を選択します。
- 2 [リモート アクセス] タブをクリックします。
- 3 [追加] をクリックして、1 つ以上の検索基準を選択し、[検索] をクリックして検索基準に基づいてユーザーまたはグループを検索します。
- 4 非認証アクセスのユーザーまたはグループにリモート アクセスを許可するには、ユーザーまたはグループを選択して [OK] をクリックします。
- 5 特定のユーザーまたはグループからリモート アクセスを削除するには、そのユーザーまたはグループを選択して、[削除] をクリックしてから、[OK] をクリックします。

非認証アクセスの構成

管理者は、非認証ユーザーが Active Directory 認証情報を使用せずに Horizon Client から公開アプリケーションにアクセスできるように設定できます。ユーザーが自身のセキュリティ管理とユーザー管理を行うアプリケーションにシームレスにアクセスする必要がある場合には、非認証アクセスの設定を考慮してください。

ユーザーが非認証アクセスを設定した公開アプリケーションを起動すると、RDS ホストが必要に応じてローカルユーザー セッションを作成し、ユーザーにセッションを割り当てます。

この機能を実行するには、Horizon 7 バージョン 7.1 環境のセットアップと Horizon Client バージョン 4.4 が必要です。

非認証アクセス ユーザーを構成するルールとガイドラインについては、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。

非認証アクセス ユーザーの作成

管理者は、公開アプリケーションに非認証でアクセスするユーザーを作成できます。管理者が非認証アクセスのユーザーを設定すると、ユーザーは Horizon Client から非認証アクセスでのみ接続サーバインスタンスにログインできます。

開始する前に

- 管理者が作成できるユーザーは、Active Directory アカウントごとに 1 つだけです。

- 管理者は、非認証のユーザー グループを作成できません。非認証アクセス ユーザーを作成するときに、この Active Directory ユーザーに対する既存のクライアント セッションがある場合には、変更を反映するためにクライアント セッションを再起動する必要があります。
- デスクトップの使用資格を持つユーザーを選択し、ユーザーを非認証アクセス ユーザーにすると、このユーザーは資格のあるデスクトップにアクセスできなくなります。

手順

- 1 Horizon Console で、[ユーザーとグループ] を選択します。
- 2 [非認証アクセス] タブで [追加] をクリックします。
- 3 **[認証されていないユーザーの追加]** ウィザードで、1 つ以上の検索条件を選択します。[検索] をクリックして、検索条件に基づいてユーザーを検索します。
- 4 ユーザーを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 ユーザー エイリアスを入力します。

デフォルトのユーザー エイリアスは、Active Directory アカウントに設定されたユーザー名です。エンド ユーザーは、ユーザー エイリアスを使用して Horizon Client から接続サーバ インスタンスにログインできます。

- 6 (オプション) ユーザーの詳細を確認して、コメントを追加します。
- 7 [送信] をクリックします。

接続サーバが非認証アクセス ユーザーを作成し、ユーザー エイリアス、ユーザー名、氏名、ドメイン、アプリケーションの資格、セッションなどのユーザーの詳細を表示します。

次に進む前に

非認証アクセスのユーザーの作成後、接続サーバで非認証アクセスを有効にして、公開アプリケーションにユーザーがアクセスできるようにする必要があります。『Horizon 7 の管理』ドキュメントで「ユーザーの非認証アクセスを有効にする」を参照してください。

公開アプリケーションに対する非認証アクセス ユーザーへの資格付与

非認証アクセス ユーザーの作成後、公開アプリケーションにアクセスする資格をユーザーに付与する必要があります。

開始する前に

- RDS ホストのグループに基づいてファームを作成します。[「Horizon Console でのファームの作成」](#) を参照してください。
- RDS ホストのファームで実行される公開アプリケーションのアプリケーション プールを作成します。[「Horizon Console でのアプリケーション プールの作成」](#) を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[ユーザーとグループ] を選択します。
- 2 [資格] タブで、[資格] ドロップダウン メニューから [アプリケーションに対する資格を追加] を選択します。

- 3 [追加] をクリックして、1 つ以上の検索条件を選択します。[非認証ユーザー] チェックボックスをオンにして [検索] をクリックし、検索条件に基づいて非認証アクセス ユーザーを検索します。
- 4 プールのアプリケーションに対する資格を付与するユーザーを選択して、[OK] をクリックします。
- 5 プール内のアプリケーションを選択して、[送信] をクリックします。

次に進む前に

非認証アクセス ユーザーを使用して、Horizon Client にログインします。[「Horizon Client からの非認証アクセス」](#)を参照してください。

非認証アクセス ユーザーの削除

非認証アクセス ユーザーを削除する場合には、アプリケーション プールに対するユーザーの資格も削除する必要があります。

非認証アクセス ユーザーがデフォルト ユーザーの場合、このユーザーは削除できません。デフォルトのユーザーを削除すると、ユーザーが正常に削除されたことを示すメッセージと内部エラー メッセージが Horizon Console に表示されます。ただし、デフォルトのユーザーは、Horizon Console から削除されません。

注 非認証アクセス ユーザーを削除するときに、この Active Directory ユーザーに対する既存のクライアント セッションがある場合には、変更を反映するためにクライアント セッションを再起動する必要があります。

手順

- 1 Horizon Console で、[ユーザーとグループ] を選択します。
- 2 [非認証アクセス] タブでユーザーを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックします。

次に進む前に

アプリケーションに対するユーザーの資格を削除します。

Horizon Client からの非認証アクセス

非認証アクセスで Horizon Client にログインして、公開アプリケーションを起動します。

セキュリティを強化するため、非認証アクセス ユーザーには、Horizon Client へのログインに使用できるユーザーエイリアスが存在します。ユーザー エイリアスを選択する場合、ユーザーの Active Directory 認証情報または UPN を入力する必要はありません。Horizon Client にログインすると、公開アプリケーションをクリックして、アプリケーションを起動できます。Horizon Client のインストールと設定の詳細については、[VMware Horizon Client ドキュメント](#) Web ページにある Horizon Client のドキュメントを参照してください。

開始する前に

- Horizon 7 バージョン 7.1 の接続サーバで非認証アクセスが構成されていることを確認します。
- Horizon Administrator で、非認証アクセス ユーザーが作成されていることを確認します。デフォルトの非認証ユーザーが唯一の非認証アクセス ユーザーである場合、Horizon Client はデフォルトのユーザーで接続サーバインスタンスに接続します。

手順

- 1 Horizon Client を開始します。
- 2 Horizon Client で、[認証されていないアクセスを使用して匿名ログイン] を選択します。
- 3 接続サーバ インスタンスに接続します。
- 4 ドロップダウン メニューからユーザー エイリアスを選択して、[ログイン] をクリックします。
デフォルト ユーザーには "default" というサフィックスが付いています。
- 5 公開アプリケーションをダブルクリックして、アプリケーションを起動します。

Horizon Console でのアクセス グループを使用したプールおよびファーム管理の委任

デフォルトでは、自動デスクトップ プール、手動デスクトップ プールおよびファームは、Horizon Console に / または Root (/) で表示されるルート アクセス グループ内に作成されます。公開デスクトップ プールおよびアプリケーション プールでは、そのファームのアクセス グループが継承されます。ルート アクセス グループの下にアクセス グループを作成し、別の管理者に特定のプールやファームの管理を委任することができます。

注 公開デスクトップ プールまたはアプリケーション プールのアクセス グループを直接変更することはできません。公開デスクトップ プールまたはアプリケーション プールが属するファームのアクセス グループを変更する必要があります。

仮想または物理マシンでは、そのデスクトップ プールからアクセス グループが継承されます。接続された通常ディスクでは、そのマシンからアクセス グループが継承されます。ルート アクセス グループを含む最大 100 のアクセス グループを保持できます。

アクセス グループの管理者にロールを割り当てることにより、そのアクセス グループのリソースへの管理者アクセスを構成することができます。管理者は、ロールを割り当てられているアクセス グループのみに存在するリソースにアクセスできます。管理者が持つアクセス グループに対するロールによって、そのアクセス グループのリソースに対するアクセス レベルが決定されます。

ロールは、ルート アクセス グループから継承されるため、ルート アクセス グループに対するロールを持つ管理者は、すべてのアクセス グループに対してそのロールを持つことになります。ルート アクセス グループに対する管理者ロールを持つ管理者は、システムのすべてのオブジェクトに対するフル アクセス権を持つため、スーパー管理者になります。

ロールには、アクセス グループに適用する少なくとも 1 つのオブジェクト固有権限が含まれている必要があります。グローバル権限のみを含むロールはアクセス グループに適用できません。

Horizon Console を使用してアクセス グループを作成し、既存のデスクトップ プールをアクセス グループに移動することができます。自動デスクトップ プール、手動プールまたはファームを作成する場合、デフォルトのルート アクセス グループを受け入れるか、または別のアクセス グループを選択できます。

Horizon Console でアクセス グループを追加する

アクセス グループを作成することにより、特定のマシン、デスクトップ プールまたはファームの管理を委任できます。デフォルトでは、デスクトップ プール、アプリケーション プールおよびファームは、ルート アクセス プールにあります。

ルート アクセス グループを含む最大 100 のアクセス グループを保持できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[アクセス グループ] ダイアログ ボックスに移動します。

オプション	アクション
デスクトップから	<ul style="list-style-type: none"> ■ [インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。 ■ [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから、[新しいアクセス グループ] を選択します。
ファームから	<ul style="list-style-type: none"> ■ [インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。 ■ [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから [新しいアクセス グループ] を選択します。

- 2 アクセス グループの名前と説明を入力し、[OK] をクリックします。

説明はオプションです。

次に進む前に

- 1 つ以上のオブジェクトをアクセス グループに移動します。

Horizon Console での別のアクセス グループへのデスクトップ プールまたはファームの移動

アクセス グループの作成後、自動デスクトップ プール、手動プールまたはファームを新しいアクセス グループに移動できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択するか、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 プールまたはファームを選択します。
- 3 [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから [アクセス グループを変更] を選択します。
- 4 アクセス グループを選択し、[OK] をクリックします。

Horizon Console が、選択したアクセス グループにプールまたはファームを移動します。

アクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームの確認

特定のアクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームは Horizon Console で確認できます。

手順

- 1 Horizon Console で、オブジェクトのメイン ページに移動します。

オブジェクト	アクション
デスクトップ プール	[インベントリ]-[デスクトップ] の順に選択します。
アプリケーション プール	[インベントリ]-[アプリケーション] の順に選択します。
ファーム	[インベントリ]-[ファーム] の順に選択します。

デフォルトでは、すべてのアクセス グループ内のオブジェクトが表示されます。

- 2 メインウィンドウ ペインの [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから、アクセス グループを選択します。
選択したアクセス グループ内のオブジェクトが表示されます。

アクセス グループ内の vCenter 仮想マシンの確認

Horizon Console で特定のアクセス グループ内の vCenter Server 仮想マシンを表示できます。vCenter 仮想マシンは、そのプールからアクセス グループを継承します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ]-[マシン] の順に移動します。
- 2 [vCenter 仮想マシン] タブを選択します。

デフォルトでは、すべてのアクセス グループ内の vCenter 仮想マシンが表示されます。

- 3 [アクセス グループ] ドロップダウン メニューからアクセス グループを選択します。
選択したアクセス グループ内の vCenter 仮想マシンが表示されます。

Horizon Console での仮想デスクトップ プールの作成

4

Horizon 7 では、デスクトップ プールを作成する場合、含まれる仮想デスクトップは 1,000 台でもかまいません。仮想マシンと物理マシンにデスクトップを展開できます。マスター イメージとして 1 台の仮想マシンを作成すれば、Horizon 7 はそのイメージから仮想デスクトップのプールを生成できます。マスター イメージは、基本イメージまたはゴールド イメージともいいます。

基本イメージやゴールド イメージを作成する方法、クローン作成用に仮想マシンを構成する方法については、『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントを参照してください。

Horizon Console では、インスタント クローン デスクトップ プールまたはフル仮想マシンを含む自動デスクトップ プールを作成できます。

この章では次のトピックについて説明します。

- [インスタントクローン デスクトップ プールの作成](#)
- [フル仮想マシンを含む自動デスクトップ プールの作成](#)
- [デスクトップ プールの構成](#)
- [Horizon Console でのデスクトップ プールと仮想デスクトップの管理](#)
- [マシンとデスクトップ プールのトラブルシューティング](#)

インスタントクローン デスクトップ プールの作成

ユーザーがインスタントクローン デスクトップにアクセスするには、インスタントクローン デスクトップ プールを作成する必要があります。

インスタントクローン デスクトップ プールは、vCenter Server の親仮想マシン（マスター イメージ）に基づいています。インスタント クローン デスクトップの場合、親仮想マシンは、Horizon 7 が作成して維持する内部仮想マシンであり、マスター イメージに基づいて作成されます。この内部親仮想マシンは変更できません。ただし、マスター イメージは変更できます。

インスタント クローン デスクトップ プールの作成とメンテナンスの詳細については、『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントを参照してください。

Horizon Console でインスタント クローン デスクトップ プールを作成するためのワークシート

インスタント クローン デスクトップ プールを作成するときに、特定のオプションを設定できます。このワークシートを使用して、プールを作成する前に構成オプションを記録します。

インスタントクローン デスクトップ プールを作成する前に、vCenter Server で親仮想マシンのスナップショットを取得します。スナップショットを取得する前に、vCenter Server で親仮想マシンをシャットダウンする必要があります。スナップショットは、vCenter Server のクローンのマスター イメージです。

注 仮想マシン テンプレートからインスタントクローン デスクトップ プールを作成することはできません。

表 4-1. ワークシート：インスタントクローン デスクトップ プールを作成するための構成オプション

オプション	説明	値をここに記入
ユーザー割り当て	<p>[フローティング] または [専用] を選択します。</p> <p>フローティング ユーザー割り当てでは、ユーザーはプールからランダムに選択され、デスクトップに割り当てられます。</p> <p>専用ユーザー割り当てでは、各ユーザーが特定のリモート デスクトップに割り当てられ、ログインするたびに同じデスクトップがユーザーに返されます。ログインからログアウトまでの間、同じデスクトップでコンピュータ名と MAC アドレスが保持されます。ユーザーがデスクトップに行った他の変更は保持されません。</p>	
vCenter Server	[インスタントクローン] を選択し、インスタント クローン 仮想マシンを管理する vCenter Server を選択します。	
デスクトップ プール ID	<p>プールを識別する一意の名前。</p> <p>複数の接続サーバ構成が存在する場合、同じプール ID を使用する接続サーバ構成が存在していないことを確認します。接続サーバ構成は、1 台の接続サーバ、または複数の接続サーバによる構成が可能です。</p>	
表示名	クライアントからログインするときにユーザーに表示される プール名。名前を指定しない場合、プール ID が使用されます。	
アクセス グループ	<p>プールに対するアクセス グループを選択するか、プールをデフォルトのルート アクセス グループに残します。</p> <p>アクセス グループを使用する場合は、プールの管理を特定のロールを持つ管理者に委任できます。</p> <p>注 アクセス グループは、デスクトップ 仮想マシンを格納する vCenter Server フォルダとは異なります。ウィザードで vCenter Server フォルダを後で選択します。</p>	
状態	<p>[有効] に設定されている場合、プロビジョニング後にプールを使用する準備が整っています。</p> <p>[無効] に設定されている場合、ユーザーはプールを使用できません。プロビジョニング中にプールを無効にすると、プロビジョニングは停止します。</p>	
接続サーバの制限	<p>プールへのアクセスを特定の接続サーバに制限するには、[参照] をクリックして、1 台以上の接続サーバを選択します。</p> <p>VMware Identity Manager からデスクトップへのアクセスを提供することを意図して接続サーバ制限を構成すると、これらのデスクトップが実際には制限されている場合でも VMware Identity Manager アプリケーションでユーザーにデスクトップが表示されることがあります。VMware Identity Manager ユーザーはこれらのデスクトップを起動できません。</p>	
カテゴリ フォルダ	Windows クライアント デバイスのデスクトップ プール資格に、スタート メニューのショートカットを含むカテゴリ フォルダの名前を指定します。	

表 4-1. ワークシート：インスタントクローン デスクトップ プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
切断後に自動的にログオフ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [直後]：ユーザーは切断時にログアウトします。 ■ [なし]：ユーザーはログオフされません。 ■ [時間が経過した後]：ユーザーが接続を切断してからこの時間が経過すると、ログオフされます。時間は分単位で入力します。 <p>ログオフ時間は今後の切断時に適用されます。ログオフ時間を設定したときにデスクトップ セッションがすでに切断されている場合、そのユーザーのログオフ経過時間が開始するのは、ログオフ時間を設定した時点となり、セッションが最初に切断された時点ではありません。たとえば、この値を 5 分に設定した場合に、セッションが 10 分前に切断されたとすると、そのセッションは値を設定してから 5 分後に Horizon 7 でログオフされます。</p>	
ユーザーによるマシンのリセット/再起動を許可	<p>ユーザーが仮想マシンをリセットしたり、仮想デスクトップを再起動できるかどうかを指定します。</p> <p>リセット操作を行うと、仮想マシンがリセットされます。オペレーティングシステムのグレースフル再起動は実行されません。この操作は、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動プールまたは手動プールにのみ適用されます。</p> <p>再起動操作を行うと、仮想マシンが再起動されます。オペレーティングシステムのグレースフル再起動が実行されます。この操作は、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動プールまたは手動プールにのみ適用されます。</p>	
ユーザーが複数のクライアント デバイスからセッションを個別に開始できるようにする	このオプションが選択されている場合、複数のクライアント デバイスから同じデスクトップ プールに接続しているユーザーは複数のデスクトップ セッションを取得します。ユーザーは同じクライアント デバイスからのみ既存のセッションに再接続できます。この設定が選択されていない場合、使用されるクライアント デバイスに関係なく、ユーザーは常時、既存のセッションと再接続されます。	
デフォルト表示プロトコル	デフォルトの表示プロトコルを選択します。選択肢は [Microsoft RDP]、[PCoIP]、および [VMware Blast] です。	
ユーザーがプロトコルを選択できるようにする	ユーザーがデフォルト以外の表示プロトコルを選択できるかどうかを指定します。表示プロトコルの選択をユーザーに許可しません。	

表 4-1. ワークシート：インスタントクローン デスクトップ プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
3D レンダラー	<p>デスクトップに 3D グラフィックス レンダリングを選択します。</p> <p>3D レンダリングは、仮想ハードウェアバージョン 8 以降の仮想マシンを実行する Windows 7 以降のゲストでサポートされています。ハードウェアベースのレンダリングは、vSphere 5.1 環境の仮想ハードウェア バージョン 9 以降でサポートされています。ソフトウェア レンダリングは、vSphere 5.0 環境の仮想ハードウェア バージョン 8 以降でサポートされています。</p> <p>ESXi 5.0 ホストの場合、レンダリングに最大 128MB の VRAM を使用できます。ESXi 5.1 以降のホストの場合、VRAM の最大サイズは 512MB です。vSphere 6.0 のハードウェア バージョン 11 (HWv11) の仮想マシンでは、VRAM 値 (ビデオ メモリ) が変更されています。vSphere Web Client で [vSphere Client を使用して管理] オプションを選択して、これらのマシンのビデオ メモリを設定します。詳細については、『vSphere 仮想マシン管理』ガイドの「3D グラフィックスの構成」を参照してください。</p> <p>デフォルトの表示プロトコルに Microsoft RDP を選択し、ユーザーに表示プロトコルの選択を許可しない場合、3D レンダリングは無効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [NVIDIA GRID vGPU] : NVIDIA GRID vGPU の 3D レンダリングが有効になります。ESXi ホストは仮想マシンがパワーオンされる順番に従って GPU ハードウェア リソースを予約します。このオプションを選択すると、vSphere Distributed Resource Scheduler (DRS) は使用できません。 <p>インスタント クローン デスクトップ プールに、NVIDIA GRID vGPU の表示プロトコルとして PCoIP または VMware Blast を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [vSphere Client を使用して管理]。vSphere Web Client (または vSphere 5.1 以降の vSphere Client) で設定する仮想マシン用の 3D レンダラー オプションによって、使用される 3D グラフィックス レンダリングのタイプが決まります。Horizon 7 は 3D レンダリングを制御しません。vSphere Web Client で、[自動]、[ソフトウェア]、または [ハードウェア] のオプションを構成できます。これらのオプションは、Horizon Console で設定した場合と同じ効果を持ちます。vDGA および vDGA を使用する AMD Multiuser GPU を構成する場合、この設定を使用します。この設定は、vSGA のオプションでもあります。[vSphere Client を使用して管理] オプションを選択すると、[3D ゲストの VRAM を構成]、[モニターの最大数]、[特定のモニターの最大解像度] の設定が Horizon Console で非アクティブになります。vSphere Web Client でメモリ量を構成できます。 ■ [無効化] : 3D レンダリングが非アクティブです。デフォルトでは無効になっています。 	
HTML Access	<p>ユーザーに自分の Web ブラウザからリモート デスクトップに接続することを許可するには、[有効] を選択します。この機能の詳細については、『VMware Horizon HTML Access のインストールとセットアップ ガイド』を参照してください。</p> <p>VMware Identity Manager で HTML Access を使用するには、『Horizon 7 の管理 管理ガイド』の説明に従って接続サーバを SAML 認証サーバとペアにする必要があります。VMware Identity Manager をインストールして、接続サーバで使用するために構成する必要があります。</p>	
セッション共同作業を許可	<p>デスクトップ プールのユーザーに、リモート デスクトップ セッションへの他のユーザーの招待を許可するには、[有効] を選択します。セッション オーナーとセッション共同作業者は、VMware Blast プロトコルを使用する必要があります。</p>	
エラーによりプロビジョニングを停止	<p>エラーが発生した際に Horizon 7 でデスクトップ仮想マシンのプロビジョニングを停止し、そのエラーが複数の仮想マシンに影響が及ばないようにするかどうかを指定します。</p>	
名前付けパターン	<p>すべてのデスクトップ仮想マシン名のプレフィックス (その後に一意の数字が続く) として Horizon 7 で使用するパターンを指定します。</p>	
マシンの最大数	<p>プール内のデスクトップ仮想マシンの総数を指定します。</p>	

表 4-1. ワークシート：インスタントクローン デスクトップ プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
スベアの (パワーオン状態の) マシンの数	ユーザーから利用可能な状態を保つデスクトップ仮想マシンの数を指定します。	
オンデマンドでマシンをプロビジョニング マシンの最小数 全マシンを事前にプロビジョニング	<p>プールの作成時にすべてのデスクトップ仮想マシンをプロビジョニングするか、または必要に応じて仮想マシンをプロビジョニングするかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [全マシンを事前にプロビジョニング]。プールが作成されると、Horizon 7 は [マシンの最大数] で指定した数の仮想マシンをプロビジョニングします。 ■ [オンデマンドでマシンをプロビジョニング]。プールが作成されると、Horizon 7 は [マシンの最小数] の値または [スベアの (パワーオン状態の) マシンの数] の値 (いずれか大きい方) に基づく台数の仮想マシンを作成します。ユーザーがデスクトップに接続すると、この利用可能な仮想マシンの最小台数を維持するために、追加の仮想マシンが作成されます。 	
レプリカおよび OS ディスク用に別のデータストアを選択します	<p>インスタント クローンのデータストアとは異なるデータストアにレプリカおよび OS ディスクを格納するかどうかを指定します。</p> <p>このオプションを選択すると、1 つ以上のインスタントクローン データストアまたはレプリカ ディスク データストアを選択するオプションを選択できます。</p>	
vCenter の親仮想マシン	プールに vCenter Server の親仮想マシンを選択します。	
スナップショット (デフォルト イメージ)	<p>これらのパラメータを親仮想マシンで設定してスナップショットを取得し、インスタントクローン デスクトップ プールのモニター数と解像度を指定します。必要な vRAM サイズは、仕様に基づいて計算されます。プールのマスター イメージとして使用する親仮想マシンのスナップショットを選択します。スナップショットに基づいてインスタント クローン デスクトップ プールが作成され、これらのメモリ設定が継承されます。vSphere Client のビデオメモリの設定方法については、vSphere ドキュメントの [vSphere 単一ホスト管理] ガイドを参照してください。インスタントクローン デスクトップ プールの解像度を変更する方法については、VMware ナレッジベース (KB) の記事 http://kb.vmware.com/kb/2151745 を参照してください。</p> <p>スナップショットには次の詳細が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ モニター数 ■ VRAM サイズ ■ 解像度 	
仮想マシンのフォルダの場所	デスクトップ仮想マシン用の vCenter Server のフォルダを選択します。	
クラスタ	デスクトップ仮想マシン用の vCenter Server クラスタを選択します。	
リソース プール	デスクトップ仮想マシン用の vCenter Server リソース プールを選択します。	
データストア	<p>デスクトップ仮想マシン用の 1 つ以上のデータストアを選択します。</p> <p>[インスタント クローンのデータストアを選択] ウィンドウは、プールのストレージ要件を評価するためのハイレベルなガイドラインを提供します。これらのガイドラインは、クローンを格納するための十分な大きさがあるデータストアを特定するのに役立ちます。[ストレージ オーバーコミット] の値は常時 [境界なし] に設定され、構成できません。</p> <p>注 インスタントクローンと Storage vMotion には互換性があります。Storage DRS データストアにインスタントクローン デスクトップ プールを作成する場合、Storage DRS クラスタがデータストアのリストに表示されません。ただし、個々の Storage DRS のデータストアは選択できます。</p>	

表 4-1. ワークシート：インスタントクローン デスクトップ プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
レプリカ ディスク データストア	<p>インスタントクローンを格納するレプリカ ディスク データストアを 1 つ以上選択します。このオプションは、レプリカとオペレーティングシステム ディスクで別々のデータストアを選択する場合に表示されます。</p> <p>[ファームを追加] ウィザードの [レプリカディスクのデータストアを選択します] ページにある表は、ファームのストレージ要件を見積もるための大まかなガイドラインを提供します。これらのガイドラインは、インスタントクローンを格納するための十分な大きさがあるレプリカ ディスク データストアを特定するのに役立ちます。</p>	
ネットワーク	<p>インスタント クローン デスクトップ プールに使用するネットワークを選択します。複数の vLAN ネットワークを選択して、大規模なインスタントクローン デスクトップ プールを作成できます。デフォルト設定では、現在のマスター イメージのネットワークが使用されます。</p> <p>[ネットワークの選択] ウィザードの表には、使用可能なネットワーク、ポート、およびポートバインドが表示されます。複数のネットワークを使用するには、[現在の親仮想マシン イメージのネットワークを使用します] の選択を解除し、インスタントクローン ファームで使用するネットワークを選択する必要があります。</p>	
vGPU プロファイル	<p>プールの vGPU プロファイルは、選択したスナップショットの vGPU プロファイルになります。プールは、このプロファイルを継承します。プールの作成中に、このプロファイルを編集することはできません。</p> <p>プールのプロビジョニングを行った後は vGPU プロファイルを編集できません。vGPU プロファイルを変更するには、プールを削除して、必要な vGPU プロファイルを使用して新しいプールを作成してください。</p> <p>任意の数の ESXi ホストを含む 1 つの vSphere クラスタの場合、vGPU プロファイルの混在がサポートされています。</p> <p>vCenter Server バージョン 6.0 の場合、サポートされるパフォーマンス モードの vGPU プロファイルは 1 つだけです。</p> <p>vCenter Server バージョン 6.5 以降では、複数の vGPU プロファイルを使用できます。次のガイドラインに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 複数の vGPU プロファイルを使用するには、[GPU 統合] 割り当てポリシーを使用します。 ■ GPU 対応ホストと非対応ホストのクラスタを混在できます。 ■ [GPU 統合] 割り当てポリシーが設定されたホストのクラスタと [GPU パフォーマンス] 割り当てポリシーが設定されたホストの混在は推奨されません。 <p>すべての vGPU デスクトップの単一プロファイルでパフォーマンスを向上させる方法については、VMware のナレッジベースの記事 https://kb.vmware.com/s/article/55049 を参照してください。</p>	
ドメイン	Active Directory ドメインを選択します。ドロップダウン リストには、インスタントクローン ドメイン管理者を構成したときに指定したドメインが表示されます。	
AD コンテナ	<p>Active Directory コンテナの相対識別名を指定します。</p> <p>例：CN=Computers</p> <p>[デスクトップ プールを追加] ウィンドウで、コンテナの Active Directory ツリーを参照できます。コンテナで Active Directory ツリー パスのコピー、貼り付けまたは入力を行うことができます。</p>	

表 4-1. ワークシート：インスタントクローン デスクトップ プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
既存のコンピュータ アカウントの再利用を許可	<p>このオプションは、新しいインスタント クローンの仮想マシン名が既存のコンピュータ アカウント名に一致するときに、Active Directory にある既存のコンピュータ アカウントを使用する場合に選択します。</p> <p>インスタント クローンの作成時に、既存の Active Directory コンピュータ アカウント名がインスタント クローン仮想マシン名に一致すると、Horizon 7 はパスワードをリセットしてから既存のコンピュータ アカウントを使用します。一致しない場合は、新しいコンピュータ アカウントが作成されます。インスタント クローンを削除しても、Horizon 7 は対応するコンピュータ アカウントを削除しません。</p> <p>既存のコンピュータ アカウントが、Active Directory コンテナの設定で指定する Active Directory コンテナに配置されている必要があります。</p> <p>このオプションを無効にした場合、Horizon 7 がインスタント クローンを作成するときに、新しい Active Directory コンピュータ アカウントが作成されます。既存のコンピュータ アカウントが見つかった場合、Horizon 7 はパスワードをリセットしてから既存のコンピュータ アカウントを使用します。インスタント クローンを削除すると、Horizon 7 は対応するコンピュータ アカウントも削除します。このオプションは、デフォルトで無効になっています。</p>	
Power-offscript (パワーオフ スクリプト)	仮想マシンのパワーオフ前にデスクトップ仮想マシンで実行するスクリプトのパス名とスクリプト パラメータを指定します。	
同期後スクリプト	仮想マシンの作成後にデスクトップ仮想マシンで実行するスクリプトのパス名とスクリプト パラメータを指定します。	

インスタントクローン デスクトップ プールの作成

インスタントクローン デスクトップ プールは、自動デスクトップ プールです。vCenter Server は、ユーザーがプール作成時に指定した設定に基づいて、デスクトップ仮想マシンを作成します。

開始する前に

- インスタントクローン仮想マシンが接続する仮想スイッチには、予想された仮想マシン数をサポートする十分なポートがあることを確認してください。仮想マシンの各ネットワーク カードには 1 つのポートが必要です。
- マスター イメージが準備完了であることを確認します。詳細については、『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントの「仮想マシンの作成および準備」を参照してください。
- プールの構成情報を収集します。[「Horizon Console でインスタント クローン デスクトップ プールを作成するためのワークシート」](#)を参照してください。
- Horizon Administrator にインスタントクローンのドメイン管理者を追加したことを確認します。『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントの「インスタント クローンのドメイン管理者の追加」を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 [自動化されたデスクトップ プール] を選択して、[次へ] をクリックします。

- 4 [インスタント クローン] を選択して、vCenter Server インスタンスを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 プロンプトに従って、プールを作成します。

ワークシートで収集した構成情報を使用します。ナビゲーション ペインのページ名をクリックすると、ウィザード ページに直接戻ることができます。

次に進む前に

プールにアクセスするための資格をユーザーに付与します。

Horizon Console でのインスタント クローン デスクトップ プールのイメージの変更

インスタントクローン デスクトップ プールのイメージを変更して、変更を適用したり、以前のイメージに戻したりできます。新しいイメージには任意の仮想マシンから任意のスナップショットを選択できます。

プールがプロビジョニングされた後は vGPU プロファイルを編集できません。つまり、プールを編集したり、プールのイメージを変更することはできません。インスタント クローン プールに新しいイメージをプッシュする場合には、新しいイメージの vGPU プロファイルが前のイメージと一致していることを確認する必要があります。一致していないと、イメージのプッシュ操作が失敗する可能性があります。インスタント クローン プールの vGPU プロファイルを変更するには、プールを削除して、必要な vGPU プロファイルを使用して新しいプールを作成してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 プール ID をクリックします。
- 3 [サマリ] タブで、[メンテナンス] - [スケジュール] の順にクリックします。

[[イメージ プッシュをスケジュール]] ウィンドウが開きます。

- 4 プロンプトに従ってください。

タスクを今すぐ開始するようにスケジュールすることも、後で開始するようにスケジュールすることもできます。ユーザー セッションのあるクローンの場合、ユーザーを強制的にログアウトするか、待機するかを指定できます。ユーザーがログアウトすると、Horizon 7 はクローンを再作成します。

- 5 [終了] をクリックします。

この操作を開始すると、新しいイメージがすぐに公開されます。クローンの再作成は、[[イメージ プッシュをスケジュール]] ウィザードで指定した時から開始されます。

Horizon Console でのプッシュイメージ操作のモニタリング

インスタント クローン デスクトップ プールでプッシュ イメージ操作の進行をモニタリングできます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。

- 2 プール ID をクリックします。

[サマリ] タブには、現在のイメージおよび保留中イメージの情報が表示されます。

- 3 [タスク] タブをクリックします。

プッシュイメージ操作に関連するタスクのリストが表示されます。

Horizon Console でのプッシュイメージ操作の再スケジュールまたはキャンセル

インスタント クローン デスクトップ プールでプッシュイメージ操作の再スケジュールまたはキャンセルができます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 プール ID をクリックします。
[サマリ] タブには、現在のイメージおよび保留中イメージの情報が表示されます。
- 3 [メンテナンス] - [再スケジュール] の順に選択するか、[メンテナンス] - [キャンセル] の順に選択します。
- 4 プロンプトに従ってください。

クローンの作成の進行中にプッシュイメージ操作をキャンセルした場合、新しいイメージのあるクローンがプールに残ります。新しいイメージのあるクローンと古いイメージのあるクローンがプールに混在することになります。すべてのクローンが同じイメージを持っていることを確認するために、クローンをすべて削除できます。Horizon 7 は、同じイメージのクローンを再作成します。

フル仮想マシンを含む自動デスクトップ プールの作成

フル仮想マシンが含まれる自動デスクトップ プールでは、管理者が仮想マシン テンプレートを作成し、Horizon 7 がそのテンプレートを使用して各デスクトップの仮想マシンを作成します。管理者は、必要に応じて、自動プール展開を迅速に処理するためのカスタマイズ仕様も作成できます。

自動デスクトップ プールを作成するために、Horizon 7 はプールに適用された設定に基づいてマシンを動的にプロビジョニングします。Horizon 7 は仮想マシンのテンプレートをプールの基準として使用します。テンプレートから、Horizon 7 は vCenter Server に各デスクトップ用の新しい仮想マシンを作成します。

フル仮想マシンを含む自動デスクトップ プールの作成とメンテナンスに必要な構成情報については、『Horizon 7 の仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントを参照してください。

Horizon Console でフル仮想マシンを含む自動プールを作成するためのワークシート

自動デスクトップ プールを作成するときに、特定のオプションを設定できます。このワークシートを使用して、プールを作成する前に構成オプションを準備します。

表 4-2. ワークシート：フル仮想マシンを含む自動プールを作成するための構成オプション

オプション	説明	値をここに記入
ユーザー割り当て	<p>ユーザー割り当てのタイプを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 専用割り当てプールでは、各ユーザーがマシンに割り当てられます。ユーザーは、プールにログインするたびに同じマシンを受け取ります。 ■ フローティング割り当てプールでは、ユーザーは、ログインするたびに異なるマシンを受け取ります。 	
自動割り当てを有効にする	<p>専用割り当てプールでは、マシンはユーザーが最初にプールにログインするときに割り当てられます。マシンをユーザーに明示的に割り当てることもできます。</p> <p>自動割り当てを有効にしない場合は、マシンを各ユーザーに明示的に割り当てる必要があります。</p> <p>自動割り当てが有効になっている場合でも、マシンを手動で割り当てることができます。</p>	
vCenter Server	プール内の仮想マシンを管理する vCenter Server を選択します。	
デスクトップ プール ID	<p>Horizon Administrator でプールを識別する一意の名前。</p> <p>環境内で複数の vCenter Server を実行している場合は、別の vCenter Server で同じプール ID を使用していないことを確認します。</p> <p>接続サーバ構成は、スタンドアロンの接続サーバ インスタンスまたは View LDAP 構成を共有する複製されたインスタンスのポッド場合があります。</p>	
表示名	クライアント デバイスからログインするときにユーザーに表示されるプール名。表示名を指定しない場合は、プール ID がユーザーに表示されます。	
アクセス グループ	<p>プールを配置するアクセス グループを選択するか、プールをデフォルトのルート アクセス グループに残します。</p> <p>アクセス グループを使用する場合は、プールの管理を特定のロールを持つ管理者に委任できます。</p> <p>注 アクセス グループは、デスクトップ仮想マシンを格納する vCenter Server フォルダとは異なります。vCenter Server フォルダは、他の vCenter Server 設定とともにウィザード内で後で選択します。</p>	
ログオフ後にマシンを削除	<p>フローティング ユーザー割り当てを選択する場合は、ユーザーがログオフした後にマシンを削除するかどうかを選択します。</p> <p>注 このオプションは、[デスクトップ プールの設定] ページで設定します。</p>	
デスクトップ プールの設定	デスクトップの状態や、仮想マシンが使用中でないときの電源ステータス（表示プロトコルなど）を決定する設定。	
エラーによりプロビジョニングを停止	仮想マシンのプロビジョニング中にエラーが発生した後で、デスクトップ プールの仮想マシンのプロビジョニングを停止するか続行するかを Horizon 7 に指示できます。この設定を選択した状態にしておくと、複数の仮想マシンでプロビジョニング エラーが繰り返されるのを防ぐことができます。	

表 4-2. ワークシート：フル仮想マシンを含む自動プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
仮想マシンの名前付け	マシン名のリストを手動で指定してマシンをプロビジョニングするか、それとも名前付けパターンとマシンの総数を指定してマシンをプロビジョニングするかを選択します。	
名前を手動で指定	名前を手動で指定する場合は、マシン名のリストと、必要に応じて関連するユーザー名を準備します。	
名前付けパターン	この名前付け方法を使用する場合は、パターンを指定します。指定したパターンをすべてのマシン名のプレフィックスとして使用し、その後に各マシンを識別するための一意の番号を付けます。	
マシンの最大数	名前付けパターンを使用する場合は、プール内のマシンの総数を指定します。 プールを最初に作成するときに、プロビジョニングするマシンの最小数を指定することもできます。	
スベアの（パワーオン状態の）マシンの数	名前を手動で指定する場合、または名前付けパターンを使用する場合は、新しいユーザーのために可用性とパワーオン状態を維持しておくマシンの数を指定します。 名前を手動で指定する場合、このオプションの名称は [パワーオン状態の未割り当てのマシン数] です。	
マシンの最小数	名前付けパターンを使用し、必要に応じてマシンをプロビジョニングする場合は、プール内のマシンの最小数を指定します。 プールを作成するときに、マシンの最小数が作成されます。 必要に応じてマシンをプロビジョニングする場合、ユーザーがプールに初めて接続したとき、またはマシンをユーザーに割り当てたときに追加のマシンが作成されます。	
vSphere Virtual SAN を使用する	可能な場合は、Virtual SAN を使用するかどうかを指定します。Virtual SAN はソフトウェア定義のストレージ階層で、ESXi ホストのクラスタで使用可能なローカル物理ストレージディスクを仮想化します。	
テンプレート	プールを作成するために使用する仮想マシン テンプレートを選択します。	
vCenter Server folder (vCenter Server フォルダ)	デスクトップ プールが配置される vCenter Server 内のフォルダを選択します。	
ホストまたはクラスタ	仮想マシンが実行される ESXi ホストまたはクラスタを選択します。 vSphere 5.1 以降では、最大 32 台の ESXi ホストでクラスタを選択できます。	
リソース プール	デスクトップ プールが配置される vCenter Server リソース プールを選択します。	

表 4-2. ワークシート：フル仮想マシンを含む自動プールを作成するための構成オプション (続き)

オプション	説明	値をここに記入
データストア	<p>データストアの種類を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [個々のデータストア]。デスクトップ プールを格納する個々のデータストアを選択します。 ■ [Storage DRS]。共有またはローカル データストアを含む Storage Distributed Resource Scheduler (DRS) クラスタを選択します。Storage DRS は、使用可能なデータストアにストレージ ワークロードを割り当て、移動するロード バランシング ユーティリティです。 <p>デスクトップ プールを Horizon 7 バージョン 7.1 から Horizon 7 バージョン 7.2 にアップデートした後で、Storage DRS クラスタを使用するようにプールを変更する場合には、既存のデータストアの選択を解除してから Storage DRS を選択する必要があります。</p> <p>注 Virtual SAN を使用する場合、データストアを 1 つのみ選択します。</p>	
View Storage Accelerator を使用	<p>ESXi ホストで、共通の仮想マシン ディスク データをキャッシュするかどうかを指定します。View Storage Accelerator を使用することで、多数の起動とウイルス対策スキャンの I/O ストームを管理する際のパフォーマンスが向上し、追加のストレージ I/O バンド幅の必要性が少なくなります。</p> <p>この機能は vSphere 5.0 以降でサポートされています。</p> <p>この機能は、デフォルトで有効になっています。</p>	
透過的ページ共有の範囲	<p>透過的なページ共有 (TPS) を実行できるレベルを選択します。[仮想マシン] (デフォルト)、[プール]、[ポッド]、または [グローバル] から選択します。プール、ポッド、またはグローバルですべてのマシンに対して TPS をオンにすると、ESXi ホストは、マシンが同じゲストオペレーティングシステムまたはアプリケーションを使用した結果生じるメモリ ページの余分なコピーを取り除きます。</p> <p>ページ共有は ESXi ホストで発生します。たとえば、プールレベルで TPS を有効にするが、プールが複数の ESXi ホストにまたがっている場合、同じホスト上、または同じプール内の仮想マシンのみがページを共有します。グローバル レベルでは、同じ ESXi ホスト上で Horizon 7 によって管理されているすべてのマシンは、マシンが置かれているプールに関係なく、メモリ ページを共有できます。</p> <p>注 TPS はセキュリティ上のリスクを招く可能性があるため、デフォルト設定ではマシン間でのメモリ ページの共有が行われません。調査では、非常に限定された構成シナリオにおいて、TPS を悪用してデータへの不許可のアクセスを取得できる可能性があることが示されています。</p>	
Guest customization (ゲストのカスタマイズ)	<p>カスタマイズ仕様 (SYSPREP) をリストから選択して、マシン上でライセンス、ドメインへの関連付け、DHCP 設定、およびその他のプロパティを構成します。</p> <p>または、マシンの作成後に、マシンを手動でカスタマイズできます。</p>	

フル仮想マシンを含む自動プールの作成

選択した仮想マシン テンプレートに基づいて自動デスクトップ プールを作成できます。Horizon 7 は、デスクトップ プールを動的に展開して、vCenter Server に各デスクトップ用の新しい仮想マシンを作成します。

開始する前に

- Horizon 7 がマシンを作成するために使用する仮想マシンのテンプレートを準備します。Horizon 7 はテンプレートにインストールされる必要があります。Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ ドキュメントの「仮想マシンの作成および準備」を参照してください。
- カスタマイズ仕様を使う予定がある場合は、仕様が正確であることを確認します。vSphere Client で、カスタマイズ仕様を使ってテンプレートから仮想マシンを展開してカスタマイズします。結果として得られた仮想マシンを完全にテストします (DHCP や認証を含む)。
- リモート デスクトップとして使用している仮想マシンに対して使用されている ESXi 仮想スイッチに十分な数のポートがあることを確認します。大規模なデスクトップ プールを作成する場合、デフォルト値では不十分なことがあります。ESXi ホスト上の仮想スイッチ ポートの数は、仮想マシンの数に、仮想マシンあたりの仮想 NIC の数をかけた数以上である必要があります。
- プールを作成するために指定する必要がある構成情報を収集します。[「Horizon Console でフル仮想マシンを含む自動プールを作成するためのワークシート」](#)を参照してください。
- 電源設定、表示プロトコル、Adobe Flash 品質、およびその他の設定を構成する方法を決定します。『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントで「すべてデスクトップ プール タイプのデスクトップとプールの設定」を参照してください。
- VMware Identity Manager からデスクトップとアプリケーションへのアクセスを提供しようとしている場合、Horizon Administrator のルート アクセス グループで Administrators ロールを持つユーザーとしてデスクトップ プールとアプリケーション プールを作成していることを確認します。ルート アクセス グループ以外で Administrators ロールをユーザーに付与すると、VMware Identity Manager は、Horizon 7 で構成する SAML 認証システムを認識せず、VMware Identity Manager でプールを構成できません。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 [自動化されたデスクトップ プール] を選択して、[次へ] をクリックします。
- 4 [フル仮想マシン] を選択して、vCenter Server インスタンスを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 プロンプトに従って、プールを作成します。

ワークシートで収集した構成情報を使用します。ナビゲーション ペインのページ名をクリックすると、ウィザード ページに直接戻ることができます。

次に進む前に

プールにアクセスするための資格をユーザーに付与します。

Horizon Console での完全クローン デスクトップ プールの仮想マシンの再構築

仮想マシンを新しい仮想マシンで置き換え、マシン名を再利用する場合、完全クローン デスクトップ プールで仮想マシンを再構築します。エラー状態の仮想マシンを再構築し、エラーのない仮想マシンと同じ名前で置き換えることができます。仮想マシンを再構築すると、仮想マシンが削除され、同じ仮想マシン名のクローンが作成されて、Active Directory コンピュータ アカウントが再利用されます。前の仮想マシンのユーザー データと設定はすべて失われ、デスクトップ プールのテンプレートを使用して新しい仮想マシンが作成されます。

開始する前に

- 完全クローンの自動デスクトップ プールを作成します。[「フル仮想マシンを含む自動プールの作成」](#)を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 再構築する仮想マシンを含むデスクトップ プールを選択して、[インベントリ] タブをクリックします。
- 3 再構築する仮想マシンを選択して、[再構築] を選択します。

vCenter Server で、仮想マシンが削除され、同じ名前のクローンが作成されたことを確認できます。

Horizon Console で再構築された仮想マシンのステータスを確認するには、[削除中] - [プロビジョニング] - [カスタマイズ] - [使用可能] の順に移動します。

デスクトップ プールの構成

デスクトップ プールを作成するときに、プールの管理方法およびユーザーのデスクトップ操作方法を決定する構成オプションを選択します。

これらのタスクは、シングルユーザー マシン上に展開されるデスクトップ プールに適用されます。RDS デスクトップ プールには適用されません。ただし、Adobe Flash の品質とスロットル設定は、RDS を含むすべてのタイプのデスクトップ プールに適用されます。

Horizon Console でのデスクトップ プールでのユーザー割り当て

デスクトップ プールのデスクトップに、フローティングまたは専用ユーザー割り当てを選択できます。

専用割り当ての場合、各デスクトップが特定のユーザーに割り当てられます。初めてログインしたユーザーは、別のユーザーに割り当てられていないデスクトップを受け取ります。その後、このユーザーはログインすると必ずこのデスクトップを受け取り、他のユーザーがこのデスクトップを使うことはできません。ログインからログアウトまでの間、同じデスクトップでコンピュータ名と MAC アドレスが保持されます。ユーザーがデスクトップに行った他の変更は保持されません。

フローティング割り当ての場合、ユーザーはログインするたびにランダムなデスクトップを受け取ります。ユーザーがログオフすると、デスクトップはプールに戻されます。

フローティング インスタント クローンでは、ユーザーのログアウト時に必ずデスクトップが現在のイメージから削除され、再作成されます。

フローティング割り当てを使用すると、ソフトウェア ライセンス コストを削減できる場合があります。

Horizon Console でのマシン名のリストの指定

マシン名のリストを手動で指定して、自動デスクトップ プールをプロビジョニングすることができます。この命名方法では、会社の命名規則を使用してプール内のマシンを識別することができます。

マシン名を明示的に指定すると、ユーザーには、リモート デスクトップへのログイン時に会社の組織に基づくわかりやすい名前が表示されます。

マシン名を手動で指定するには、次のガイドラインに従います。

- 各マシン名は個別の行に入力します。
- マシン名には、最大 15 文字の英数字を使用できます。
- 各マシン エントリにユーザー名を追加できます。カンマを使用して、ユーザー名とマシン名を区切ります。

この例では、2 つのマシンが指定されています。2 番目のマシンはユーザーに関連付けられています。

```
Desktop-001
Desktop-002,abccorp.com\jdoe
```

注 フローティング割り当てプールでは、ユーザー名をマシン名に関連付けることはできません。マシンは、関連付けられたユーザー専用ではありません。フローティング割り当てプールでは、ログインするユーザーは、現在使用されていないすべてのマシンにアクセスできます。

開始する前に

各マシンの名前が一意であることを確認します。vCenter Server の既存の仮想マシンの名前を使用することはできません。

手順

- 1 マシン名のリストを含むテキスト ファイルを作成します。

少数のマシンを含むデスクトップ プールを作成する場合は、マシン名を直接 **[プールを追加]** ウィザードに入力できます。別のテキスト ファイルを作成する必要はありません。

- 2 Horizon Console では、**[プールを追加]** ウィザードを起動して、フル仮想マシンを含む自動デスクトップ プールの作成を開始します。
- 3 プロビジョニングの設定ページで **[名前を手動で指定]** を選択し、**[名前の入力]** をクリックします。
- 4 **[マシン名を入力]** ページにマシン名のリストをコピーし、**[次へ]** をクリックします。
- 5 **[送信]** をクリックします。
- 6 (オプション) **[メンテナンス モードでマシンを開始]** を選択します。

このオプションにより、ユーザーがログインして使用する前にマシンをカスタマイズできます。

- 7 ウィザードの指示に従って、デスクトップ プールの作成を終了します。

Horizon 7 で、リスト内の名前ごとに 1 つのマシンが作成されます。エントリにマシンとユーザー名が含まれている場合、Horizon 7 により、そのユーザーにマシンが割り当てられます。

デスクトップ プールの作成後、追加のマシン名およびユーザーを含む別のリスト ファイルをインポートしてマシンを追加できます。[「名前のリストによってプロビジョニングされる自動プールへのマシンの追加」](#)を参照してください。

名前のリストによってプロビジョニングされる自動プールへのマシンの追加

手動でマシン名を指定してプロビジョニングされる自動デスクトップ プールにマシンを追加するには、新しいマシン名の別のリストを指定します。この機能により、デスクトップ プールを拡大しても、会社の命名規則を引き続き使用できます。

マシン名を手動で追加するには、次のガイドラインに従います。

- 各マシン名は個別の行に入力します。
- マシン名には、最大 15 文字の英数字を使用できます。
- 各マシン エントリにユーザー名を追加できます。カンマを使用して、ユーザー名とマシン名を区切ります。

この例では、2 つのマシンが追加されています。2 番目のマシンはユーザーに関連付けられています。

```
Desktop-001
Desktop-002,abccorp.com/jdoe
```

注 フローティング割り当てプールでは、ユーザー名をマシン名に関連付けることはできません。マシンは、関連付けられたユーザー専用ではありません。フローティング割り当てプールでは、ログインするユーザーは、現在使用されていないすべてのマシンにアクセスできます。

開始する前に

マシン名を手動で指定して、フル仮想マシンの自動デスクトップ プールを作成していることを確認します。名前付けパターンを指定してプールを作成した場合は、新しいマシン名を指定することによってマシンを追加することはできません。

手順

- 1 追加のマシン名のリストを含むテキスト ファイルを作成します。
少数のマシンのみを追加する場合は、**「プールを追加」** ウィザードでマシン名を直接入力できます。別のテキスト ファイルを作成する必要はありません。
- 2 Horizon Console で、**「インベントリ」** - **「デスクトップ」** の順に選択します。
- 3 展開するデスクトップ プールを選択します。
- 4 **「編集」** をクリックします。
- 5 **「プロビジョニングの設定」** タブをクリックします。
- 6 **「マシンを追加」** をクリックします。
- 7 **「マシン名を入力」** ページにマシン名のリストをコピーし、**「次へ」** をクリックします。
- 8 **「送信」** をクリックします。
- 9 **「OK」** をクリックします。

vCenter Server で、新しい仮想マシンの作成を監視できます。

Horizon Console で、[インベントリ]-[デスクトップ] の順に選択すると、デスクトップ プールに追加されているマシンを確認できます。

Horizon Console で名前付けパターンに従ってプロビジョニングされる自動プールのサイズを変更する

名前付けパターンを使用して自動デスクトップ プールをプロビジョニングする場合は、マシンの最大数を変更してプールのサイズを増やしたり減らしたりすることができます。

開始する前に

- 名前付けパターンを使用してデスクトップ プールをプロビジョニングしたことを確認します。
- デスクトップ プールが自動であることを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ]-[デスクトップ] の順に選択します。
- 2 デスクトップ プール ID をクリックして、[編集] をクリックします。
- 3 [プロビジョニングの設定] タブで、[マシンの最大数] テキスト ボックスにデスクトップ プール内の新しいマシン数を入力します。

デスクトップ プール サイズを増やした場合は、新しいマシンを最大数までプールに追加できます。

フローティング割り当てプールのサイズを減らした場合は、未使用のマシンが削除されます。新しい最大数よりも多くのユーザーがプールにログインしている場合は、ユーザーがログオフした後にプール サイズが減少します。

専用割り当てプールのサイズを減らした場合は、未割り当てのマシンが削除されます。新しい最大数よりも多くのユーザーがマシンに割り当てられている場合は、ユーザーの割り当てを解除した後にプール サイズが減少します。

注 デスクトップ プールのサイズを減らした場合、[マシンの最大数] で指定した値よりも多くのユーザーがマシンにログインしているか、またはマシンに割り当てられている場合は、マシンの実際の数が [マシンの最大数] より多くなることがあります。

マシンの手動でのカスタマイズ

自動プールを作成した後、所有権を再度割り当てることなく特定のマシンをカスタマイズできます。メンテナンス モードでマシンを起動することによって、ユーザーにリリースする前にマシンを変更およびテストできます。

注 この機能は、インスタントクローン デスクトップ プールでは使用できません。

メンテナンス モードでは、ユーザーはデスクトップにアクセスできません。マシンをメンテナンス モードで起動した場合、Horizon 7 は、マシンが作成されると各マシンをメンテナンス モードにします。フル仮想マシンの専用割り当てプールでは、自分の管理者アカウントに所有権を再度割り当てなくても、メンテナンス モードを使用してマシンにログインできます。カスタマイズの終了後、マシンに関連付けられているユーザーに所有権を返す必要はありません。

自動プール内のすべてのマシンで同じカスタマイズを実行するには、テンプレートまたは親として準備する仮想マシンをカスタマイズします。Horizon 7 は、すべてのマシンにカスタマイズを展開します。

注 マシンをメンテナンス モードで起動できるのは、名前付けパターンを指定してマシンに名前を付ける場合ではなく、プールのマシン名を手動で指定する場合です。

Horizon Console のメンテナンス モードでの既存マシンのカスタマイズ

デスクトップ プールの作成後、個々のマシンをメンテナンス モードにしてカスタマイズ、変更、またはテストすることができます。マシンがメンテナンス モードの場合、ユーザーは仮想マシン デスクトップにアクセスできません。

既存のマシンを 1 度に 1 つずつメンテナンス モードにします。1 回の操作で、複数のマシンのメンテナンス モードを終了できます。

デスクトップ プールの作成時に、マシン名を手動で指定すると、プール内のすべてのマシンをメンテナンス モードで起動できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択し、プール ID をダブルクリックして、[インベントリ] タブを選択します。
- 2 マシンを選択します。
- 3 [その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [メンテナンス モードを開始] を選択します。
- 4 仮想マシン デスクトップをカスタマイズ、変更、またはテストします。
- 5 [手順 2](#) から [手順 4](#) を繰り返します。
- 6 カスタマイズされたマシンを選択し、[その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [メンテナンス モードを終了] を選択します。

変更した仮想マシン デスクトップをユーザーが使用できるようになります。

Horizon Console での個別マシンのカスタマイズ

マシンをメンテナンス モードで起動して、プールの作成後に個別マシンをカスタマイズすることができます。

手順

- 1 Horizon Console で、**[プールを追加]** ウィザードを起動して自動デスクトップ プールの作成を開始します。
- 2 プロビジョニングの設定ページで **[名前を手動で指定]** を選択します。
- 3 **[メンテナンス モードでマシンを開始]** を選択します。
- 4 **[プールを追加]** ウィザードを完了して、デスクトップ プールの作成を終了します。
- 5 vCenter Server で、個別仮想マシンにログインし、カスタマイズしてテストします。

マシンは、手動でカスタマイズすることも、Altiris、SMS、LanDesk、BMC などの標準の Windows システム管理ソフトウェアを使用してカスタマイズすることもできます。

- 6 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。

- 7 ユーザーにリリースする特定のマシンを選択します。
- 8 [その他のコマンド]-[メンテナンス モードを終了]の順にクリックします。

次に進む前に

デスクトップにログインできることをユーザーに通知します。

Horizon Console でのデスクトップ プールと仮想デスクトップの管理

Horizon Console では、デスクトップ プール、仮想マシンベースのデスクトップ、物理マシンベースのデスクトップ、デスクトップ セッションを管理できます。

デスクトップ プールの管理

デスクトップ プールに対する管理タスク（プールのプロパティの編集やプールの有効化、無効化、削除など）を実行できます。

デスクトップ プールの編集

既存のデスクトップ プールを編集して、スペア マシン数、データストア、カスタマイズ仕様などの設定を構成できます。

開始する前に

デスクトップ プールの作成後に変更可能または変更不可能なデスクトップ プール設定について理解しておきます。『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントで「既存のデスクトップ プールの設定の変更」と「既存のデスクトップ プールの固定設定」を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ]-[デスクトップ]の順に選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、[編集]をクリックします。
- 3 [編集] ダイアログ ボックス内のタブをクリックし、デスクトップ プール オプションを再構成します。
- 4 [OK]をクリックします。

インスタントクローン デスクトップ プールのイメージを変更すると、画像の公開操作が即座に開始されます。Horizon Administrator では、デスクトップ プールのサマリ ページには保留イメージの状態が **公開** と表示されます。

インスタントクローン デスクトップ プールのクラスタを変更すると、新しいレプリカおよび親仮想マシンが新しいクラスタに作成されます。同じイメージを使用してイメージ プッシュを開始し、新しいクラスタに新しいクローンを作成できます。ただし、クローン作成プロセスで使用するテンプレート仮想マシンは古いクラスタに残ります。テンプレート仮想マシンがある ESXi ホストをメンテナンス モードにすることはできますが、テンプレート仮想マシンを移行することはできません。新しいイメージを使用してイメージ プッシュを開始すると、テンプレート仮想マシンを含むすべてのインフラストラクチャ仮想マシンを古いクラスタから完全に削除できます。

デスクトップ プールの削除

デスクトップ プールを削除すると、ユーザーはプール内の新規リモート デスクトップを起動できなくなります。

デスクトップ プールのタイプに応じて、Horizon 7 で通常ディスク、vCenter Server フル仮想マシン、ユーザーのアクティブセッションを処理するためのさまざまなオプションが用意されています。

デフォルトでは、デスクトップ マシンがプールに存在している場合でも、デスクトップ プールを削除できます。詳細については、『Horizon 7 での仮想デスクトップのセットアップ』ドキュメントの「デスクトップ プールの削除設定」を参照してください。この設定を構成している場合、プールを削除するには、デスクトップ プールに含まれるすべてのマシンを削除する必要があります。

インスタント クローンの自動デスクトップ プールを使用すると、Horizon 7 は常にディスクから仮想マシンを削除します。

重要 Horizon Console でデスクトップ プールを削除する前に vCenter Server の仮想マシンを削除しないでください。このアクションによって、Horizon 7 コンポーネントが不整合な状態になる可能性があります。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 デスクトップ プールの削除方法を選択します。

プール	オプション
通常ディスクを含まないインスタント クローンの自動デスクトップ プール。	使用できるオプションはありません。Horizon 7 はディスクからすべての仮想マシンを削除します。リモート デスクトップへのユーザー セッションは終了します。
フル仮想マシンの自動デスクトップ プール。	vCenter Server の仮想マシンを維持するか削除するかを選択します。
RDS デスクトップ プール。 フル仮想マシンの自動デスクトップ プール。	リモート デスクトップに接続しているユーザーがいる場合は、ユーザーのセッションをアクティブなままにするか終了するかを選択します。接続サーバは、アクティブなセッションを追跡しません。

デスクトップ プールを削除すると、フル仮想マシンのコンピュータ アカウントは Active Directory に残ります。これらのアカウントを削除するには、Active Directory から手動で削除する必要があります。

インスタントクローン デスクトップ プールを削除する場合は、Horizon 7 が vCenter Server から内部仮想マシンを削除するのにしばらく時間がかかることがあります。内部仮想マシンがすべて削除されたことを確認するまでは、Horizon Console から vCenter Server を削除しないでください。

デスクトップ プールの無効化または有効化

デスクトップ プールを無効にすると、プールがユーザーに表示されなくなり、プールのプロビジョニングが停止します。ユーザーはプールにアクセスできません。プールを無効にした後、再度有効にすることができます。

開始する前に

デスクトップ プールを無効にすると、デスクトップの使用を準備する間に、ユーザーがリモート デスクトップにアクセスできないようにすることができます。デスクトップ プールが必要でなくなった場合は、無効化機能を使用してアクティブな使用を取り消すことができます。Horizon 7 からデスクトップ プールの定義を削除する必要はありません。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、そのプールのステータスを変更します。

オプション	アクション
プールを無効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [デスクトップ プールを無効にする] を選択します。
プールを有効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [デスクトップ プールを有効にする] を選択します。

- 3 [OK] をクリックします。

デスクトップ プールのプロビジョニングの無効化または有効化

自動デスクトップ プールのプロビジョニングを無効にすると、Horizon 7 がプールの新しい仮想マシンのプロビジョニングを停止します。プロビジョニングを無効にした後、再度有効にすることができます。

プールの構成を変更する前にプロビジョニングを無効にして、以前の構成で新しいマシンが作成されないことを確認します。さらにプロビジョニングを無効にして、プールの使用可能な領域が不足している状態のときに Horizon 7 が追加のストレージを使用しないようにすることもできます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、そのプールのステータスを変更します。

オプション	アクション
プロビジョニングを無効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [プロビジョニングを無効にする] を選択します。
プロビジョニングを有効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [プロビジョニングを有効にする] を選択します。

- 3 [OK] をクリックします。

仮想マシンベースのデスクトップの管理

仮想マシンベースのデスクトップは、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動または手動のデスクトップ プールのデスクトップです。

Horizon Console でのユーザーへのマシンの割り当て

専用割り当てプールでは、リモート デスクトップをホストする仮想マシンの所有者になるユーザーを割り当てることができます。割り当てられたユーザーのみがそのリモート デスクトップにログインして接続できます。

Horizon Console は、次の状況でマシンをユーザーに割り当てます。

- デスクトップ プールの作成時に、[自動割り当てを許可] 設定を選択した場合

注 [自動割り当てを許可] 設定を選択した場合でも、手動でマシンをユーザーに割り当てることができます。

- 自動プールの作成時に [名前を手動で指定] 設定を選択して、ユーザー名とマシン名を指定した場合

専用割り当てプールのいずれかの設定を選択しなければ、ユーザーは仮想デスクトップにアクセスできません。手動でマシンを各ユーザーに割り当てする必要があります。

また、**vdmadmin** コマンドを使用してマシンをユーザーに割り当てすることもできます。**vdmadmin** コマンドの詳細については、『Horizon 7 の管理』ガイドを参照してください。

開始する前に

- 仮想マシンが専用割り当てプールに属していることを確認します。Horizon Console で、デスクトップ プールの割り当てが [デスクトップ プール] ページの [ユーザーの割り当て] 列に表示されます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択し、プール ID をダブルクリックして、[インベントリ] タブをクリックします。
- 2 マシンを選択します。
- 3 [その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [ユーザーを割り当てる] を選択します。
- 4 ユーザーとグループのどちらを検索するかを選択して、[名前] または [説明] テキスト ボックスに検索文字列を入力します。
- 5 ユーザーまたはグループ名を選択し、[OK] をクリックします。

Horizon Console での専用マシンからのユーザーの割り当て解除

専用割り当てプールでは、ユーザーへのマシン割り当てを削除できます。

また、**vdmadmin** コマンドを使用して、ユーザーへのマシン割り当てを削除することもできます。**vdmadmin** コマンドの詳細については、『Horizon 7 の管理』ガイドを参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択し、プール ID をダブルクリックして、[インベントリ] タブをクリックします。
- 2 マシンを選択します。
- 3 [その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [ユーザーの割り当てを解除] を選択します。
- 4 [OK] をクリックします。

マシンを別のユーザーが使用できるようになり、別のユーザーに割り当てることができます。

Horizon Console での仮想マシン デスクトップの削除

仮想マシン デスクトップを削除すると、ユーザーはそのデスクトップにアクセスできなくなります。

vCenter Server の仮想マシンを維持した場合、現在アクティブなセッションのユーザーは、フル仮想マシン デスクトップを使用し続けることができます。ユーザーのログオフ後、ユーザーは削除された仮想マシン デスクトップにアクセスできなくなります。

インスタント クローンを使用すると、vCenter Server は常にディスクから仮想マシンを削除します。

注 Horizon Console で仮想マシン デスクトップを削除する前に vCenter Server で仮想マシンを削除しないでください。このアクションによって、Horizon 7 コンポーネントが不整合な状態になる可能性があります。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。
- 2 [vCenter 仮想マシン] タブを選択します。
- 3 1 つ以上のマシンを選択し、[削除] をクリックします。
- 4 仮想マシン デスクトップの削除方法を選択します。

オプション	説明
フル仮想マシン デスクトップを含むプール	vCenter Server の仮想マシンを維持するか削除するかを選択します。 ディスクから仮想マシンを削除する場合、アクティブなセッションのユーザーはデスクトップから切断されます。 vCenter Server の仮想マシンを維持する場合は、アクティブなセッションのユーザーがデスクトップに接続し続けるか、切断されるかを選択します。
通常ディスクを含まないインスタント クローン プール	vCenter Server はインスタント クローン仮想マシンをディスクから削除します。現在アクティブなセッションのユーザーはリモート デスクトップから切断されます。

Horizon Console での管理対象外のマシンと登録済みマシンの管理

Horizon Console では、管理対象外のマシンと登録済みのマシンを Horizon 7 から削除できます。

管理対象外のマシンには、vCenter Server により管理されていない物理コンピュータ、RDS ホスト、仮想マシンが含まれます。したがって、管理対象外のマシンをデスクトップ プールに追加する前に、接続サーバ インスタンスに登録する必要があります。

Horizon 7 には [RDS ホスト] と [その他] の 2 つのタイプの登録済みのマシンがあります。管理対象外のマシンはその他のカテゴリに含まれます。管理対象外のマシンを使用して、vCenter Server 仮想マシンを含まないデスクトップ プールが形成されます。

管理対象外のマシンに影響を与える設定を再構成する場合は、新しい設定が有効になるまでに 10 分程度かかることがあります。たとえば、プールの [切断後に自動的にログアウト] の設定を変更すると、Horizon 7 が影響を受ける管理対象外のマシンを再構成するまでに 10 分ほどかかる場合があります。

Horizon Console でのデスクトップ プールからの管理対象外マシンの削除

管理対象外のマシンをプールから削除することによって、デスクトップ プールのサイズを減らすことができます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。
- 2 [その他] タブを選択します。
- 3 削除する管理対象外のマシンを選択します。
- 4 [削除] をクリックします。

5 [OK] をクリックします。

管理対象外のマシンがプールから削除されます。

Horizon Console での登録済みマシンの削除

登録済みマシンを再度使用する予定がない場合は、Horizon 7 から削除できます。

削除した登録済みのマシンは、Horizon 7 で使用できなくなります。マシンを再度使用できるようにするには、Horizon Agent を再インストールする必要があります。

開始する前に

削除する登録済みマシンが、どのデスクトップ プールでも使用されていないことを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [登録済みのマシン] の順に選択します。
- 2 [RDS ホスト] タブをクリックします。
- 3 1 つ以上のマシンを選択し、[削除] をクリックします。

選択できるマシンは、デスクトップ プールで使用されていないものだけです。

- 4 [OK] をクリックして確定します。

マシンとデスクトップ プールのトラブルシューティング

マシンおよびデスクトップ プールの作成および使用中に発生する可能性のある問題を診断および解決するために、さまざまな手順を使用できます。

ユーザーが Horizon Client を使用してデスクトップおよびアプリケーションにアクセスしているときに問題が発生することがあります。トラブルシューティングの手順を使用して問題の原因を調べ、解決を試みることも、VMware のテクニカル サポートから支援を受けることもできます。

Horizon Console での問題のあるマシンの表示

動作が疑わしいとして Horizon 7 によって検出されたマシンのリストを表示できます。

Horizon Console には、次の問題があるマシンが表示されます。

- パワーオンされているが、応答していない
- 長時間プロビジョニング状態のままである
- 作動可能状態だが、接続を受け入れていないと報告している
- vCenter Server に存在しないように見える
- コンソール上のアクティブなログイン、資格のないユーザーによるログイン、または接続サーバ インスタンスを経由しないで行われたログインがある

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。

2 [vCenter Server] タブで、[マシン] ドロップダウン メニューから [問題のあるマシン] をクリックします。

次に進む前に

必要なアクションは、Horizon Console が各マシンについて報告した問題によって異なります。

- マシンがパワーオンされているが応答しない場合は、仮想マシンを再起動します。それでもマシンが応答しない場合は、使用している Horizon Agent のバージョンがマシンのオペレーティング システムでサポートされていることを確認します。**vdmadmin** コマンドと **-A** オプションを使用して、Horizon Agent バージョンを表示できます。詳細については、『View 管理』を参照してください。
- マシンが長時間プロビジョニング状態のままになる場合は、その仮想マシンを削除して、再度クローンを作成します。マシンをプロビジョニングするために十分なディスク領域があることを確認します。
- マシンが作動可能と報告しているが、接続を受け入れない場合は、ファイアウォール構成をチェックして、表示プロトコルがブロックされていないことを確認します。
- マシンが vCenter Server に存在しないように見える場合は、その仮想マシンが予期された vCenter Server 上に構成されているかどうか、別の vCenter Server に移動したかを確認します。
- マシンにアクティブなログインがあるが、それがコンソールに表示されない場合、そのセッションはリモートです。ログインしているユーザーと通信できない場合は、仮想マシンの再起動によるユーザーの強制ログアウトが必要になることがあります。

デスクトップ プールのユーザー割り当ての確認

専用ユーザー割り当ての場合、仮想マシンに割り当てられているユーザーが仮想デスクトップに接続しているユーザーかどうかを確認できます。

開始する前に

- 仮想マシンが専用割り当てプールに属していることを確認します。Horizon Console で、デスクトップ プールの割り当てが [デスクトップ プール] ページの [ユーザーの割り当て] 列に表示されます。
- ユーザーにデスクトップ プールに対する資格を付与していることを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。
- 2 [vCenter Server] タブで、割り当てられたユーザーまたは接続しているユーザーを表示します。

オプション	説明
[割り当てられたユーザー]	[割り当てられたユーザー] 列に、デスクトップ プールに割り当てられているユーザーが表示されます。 <small>注 [割り当てられたユーザー] 列に、フローティング デスクトップ プールのユーザーは表示されません。</small>
[接続しているユーザー]	[接続しているユーザー] 列には、デスクトップ プールに未割り当てで、Horizon Client または vSphere Client 経由で仮想デスクトップに接続している管理者ユーザーが表示されます。

Horizon Console でのデスクトップの再起動と仮想マシンのリセット

仮想デスクトップで再起動操作を実行すると、仮想マシンのオペレーティングシステムのグレースフル再起動が実行されます。仮想マシンでリセット操作を実行すると、オペレーティングシステムのグレースフル再起動は実行されず、仮想マシンのパワーオフとパワーオンが即時実行されます。

表 4-3. リセット機能と再起動機能

プール タイプ	リセット機能 (プール、マシン、セッション、Horizon Client)	再起動機能 (プール、マシン、セッション、Horizon Client)
完全クローン プール (専用プールとフローティング プール、[ログオフ時に削除] オプションは無効)	仮想マシンのリセット (仮想マシンのパワーオフとパワーオン)	仮想マシンの再起動 (OS のグレースフル再起動)
インスタント クローン プール (フローティング プール)	[仮想マシンのパワーオフ] - [仮想マシンの削除] - [新規仮想マシンの作成] - [パワーオン]	[OS のグレースフルシャットダウン] - [仮想マシンの削除] - [新規仮想マシンの作成] - [パワーオン]
公開されたデスクトップ プール	NA (未サポート)	NA (未サポート)

注 再起動機能は、Horizon Client 4.4 以降で使用できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。
- 2 [vCenter Server] タブで、仮想デスクトップの再起動または仮想マシンのリセットを選択します。

オプション	説明
デスクトップの再起動	仮想マシンを再起動します。オペレーティングシステムのグレースフル再起動が実行されます。この操作は、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動プールまたは手動プールにのみ適用されます。
仮想マシンをリセット	仮想マシンをリセットします。オペレーティングシステムのグレースフル再起動は実行されません。この操作は、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動プールまたは手動プールにのみ適用されます。

- 3 [OK] をクリックします。

Horizon Console でのデスクトップ ユーザーへのメッセージの送信

現在デスクトップにログインしているユーザーへのメッセージの送信が必要になることがあります。たとえば、マシンのメンテナンスを行う必要がある場合は、一時的にログアウトするようにユーザーに依頼したり、今後のサービス停止をユーザーに警告したりすることができます。1 つのメッセージを複数のユーザーに送信することができます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順にクリックします。
- 2 プール ID をクリックし、[セッション] タブをクリックします。
- 3 1 つ以上のマシンを選択し、[メッセージを送信] をクリックします。

- 4 メッセージを入力し、メッセージのタイプを選択して、[OK] をクリックします。

メッセージのタイプは、[情報]、[警告]、または [エラー] のいずれかになります。

メッセージは、アクティブなセッションで選択されているすべてのマシンに送信されます。

Horizon Console での資格のないユーザーのマシンおよびポリシーの管理

資格が削除されたユーザーに割り当てられているマシン、および資格のないユーザーに適用されているポリシーを表示できます。

資格のないユーザーが組織を完全に離れたり、長期間にわたってそのユーザーのアカウントをサスペンドしている場合があります。こうしたユーザーにはマシンが割り当てられていますが、マシン プールを使用する資格はありません。

-O または **-P** オプションを指定して **vdadmin** コマンドを使用し、資格のないマシンおよびポリシーを表示することもできます。詳細については、『Horizon 7 管理ガイド』を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。
- 2 [その他のコマンド] - [資格のないマシンの表示] の順に選択します。
- 3 資格のないユーザーに対するマシン割り当てを削除します。
- 4 [その他のコマンド] - [資格のないマシンを表示] の順に選択するか、[その他のコマンド] - [資格のないポリシーを表示] の順に選択します。
- 5 資格のないユーザーに適用されているポリシーを変更または削除します。

Horizon Console での公開デスクトップとアプリケーションの作成

5

Horizon 7 では、Windows リモート デスクトップ サービス (RDS) ホストのグループであるファームに関連付けられる公開デスクトップを作成できます。アプリケーション プールを作成することによって、公開アプリケーションを多くのユーザーに提供することもできます。アプリケーション プール内の公開アプリケーションは、RDS ホストのファームで実行されます。

この章では次のトピックについて説明します。

- [Horizon Console でのファームの作成](#)
- [Horizon Console での公開デスクトップ プールの作成](#)
- [Horizon Console でのアプリケーション プールの作成](#)
- [Horizon Console でのファームの管理](#)
- [Horizon Console でのアプリケーション プールの管理](#)
- [Horizon Console での RDS ホストの管理](#)
- [Horizon Console での公開デスクトップセッションとアプリケーション セッションの管理](#)

Horizon Console でのファームの作成

ファームは、Windows リモート デスクトップ サービス (RDS) ホストのグループです。ファームに関連付けられている公開デスクトップを作成できます。アプリケーション プールを作成することによって、公開アプリケーションを多くのユーザーに提供することもできます。アプリケーション プール内の公開アプリケーションは、RDS ホストのファームで実行されます。

ファームを使用すると、エンタープライズ内の RDS ホスト、公開デスクトップ、アプリケーションを管理するタスクが簡素化されます。手動ファームまたは自動ファームを作成して、異なるサイズ、または異なるデスクトップ要件あるいはアプリケーション要件を持つユーザー グループを処理できます。

手動ファームは、すでに存在する RDS ホストで構成されます。RDS ホストは、物理マシンまたは仮想マシンです。ファームを作成する場合、手動で RDS ホストを追加します。

自動ファームは、vCenter Server のインスタント クローン仮想マシンである RDS ホストで構成されます。

接続サーバは、ファームの作成時に指定したパラメータに基づいてインスタントクローン仮想マシンを作成します。インスタント クローンは、親仮想マシンの仮想ディスクを共有するため、フル仮想マシンよりも使用するストレージは少なくなります。さらに、インスタント クローンは親仮想マシンのメモリを共有し、vmFork テクノロジーを使用して作成されます。

アプリケーション プールまたは公開デスクトップ プールを作成する場合は、ファームを 1 つだけ指定する必要があります。ファーム内の公開ホストは、RDS デスクトップ、アプリケーション、またはその両方をホストできます。ファームでは公開デスクトップ プールを 1 つまでしかサポートできませんが、複数のアプリケーション プールをサポートできます。ファームは、両方のタイプのプールを同時にサポートできます。

ファームの詳細については、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。

Horizon Console でファームを手動で作成するためのワークシート

手動ファームを作成するときに、特定のファーム設定を行うことができます。

表 5-1. ワークシート：手動ファームを作成するための設定

設定	説明	値をここに記入
ID	ファームを識別する一意の名前。	
説明	このファームの説明。	
アクセス グループ	ファームに対するアクセス グループを選択するか、ファームをデフォルトのルート アクセス グループに残します。	
デフォルト表示プロトコル	[VMware Blast]、[PCoIP]、または [Microsoft RDP] を選択します。Microsoft RDP はデスクトップ プールのみに適用されます。アプリケーション プールの表示プロトコルは、必ず [VMware Blast] または [PCoIP] になります。[Microsoft RDP] を選択し、このファームを使用してアプリケーション プールをホストする予定であれば、[ユーザーがプロトコルを選択できるようにする] を [はい] に設定する必要があります。デフォルトは、[PCoIP] です。	
ユーザーがプロトコルを選択できるようにする	[はい] または [いいえ] を選択します。この設定は、公開デスクトップ プールにのみ適用されます。[はい] を選択すると、ユーザーは Horizon Client から公開デスクトップに接続するときに表示プロトコルを選択できます。デフォルトは [はい] です。	
事前起動セッションのタイムアウト (アプリケーションのみ)	事前起動が設定されたアプリケーションが開かれたままにする時間を決定します。デフォルトは [10 分] です。 エンドユーザーが Horizon Client の任意のアプリケーションを起動しない場合、アイドル状態のセッションがタイムアウトになるか、事前起動セッションがタイムアウトになると、アプリケーション セッションが切断されます。 タイムアウト後に事前起動セッションを終了するには、[切断されたセッションからのログオフ] オプションを [直後] に設定する必要があります。	

表 5-1. ワークシート：手動ファームを作成するための設定 (続き)

設定	説明	値をここに記入
空のセッションのタイムアウト (アプリケーションのみ)	<p>空のアプリケーション セッションが開かれたままにする時間を決定します。アプリケーション セッションで実行されているアプリケーションがすべて閉じられた時点で、そのセッションは空の状態です。セッションが開かれている間、ユーザーはアプリケーションを速やかに開くことができます。空のアプリケーション セッションを切断またはログオフすると、システム リソースを節約できます。タイムアウト値として、[なし] または [直後] を選択するか、分単位で数字を設定します。デフォルトは [1 分後] です。[直後] を選択すると、30 秒以内にセッションがログオフまたは切断します。</p> <p>Horizon Agent がインストールされている RDS ホストのレジストリ キーを編集すると、セッションのログオフまたは切断時間をさらに短縮できます。</p> <p>HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\VMware, Inc.\VMware VDM\Plugins\wssm\applaunchmgr\Params に移動し、WindowCheckInterval の値を設定します。デフォルト値は 20000 です。この場合、空のセッションの確認が 20 秒ごとに行われます。最後のアプリケーション セッションが終了してからセッションがログオフするまでの最大時間は 40 秒に設定されます。この値は 2500 に変更できます。この場合、空のセッションの確認が 2.5 秒ごとに行われます。最後のアプリケーションが終了してからセッションがログオフするまでの最大時間は 5 秒に設定されます。</p>	
タイムアウトの発生時	[空のセッションのタイムアウト] 制限に達した時点で空のアプリケーション セッションを切断するか、それともログオフするかを決定します。[切断] または [ログオフ] を選択します。ログオフされたセッションはリソースを解放しますが、アプリケーションを開くのには比較的時間がかかります。デフォルトは [切断] です。	
切断されたセッションからのログオフ	切断されたセッションをログオフするタイミングを決定します。この設定は、デスクトップセッションとアプリケーション セッションの両方に適用されます。[なし]、[直後]、または [...分後] を選択します。[直後] または [... 分後] の選択は慎重に行ってください。切断されたセッションがログオフされる時点でそのセッションは失われます。デフォルトは [なし] です。	
このファームのデスクトップとアプリケーションへの HTML Access を許可	公開デスクトップおよびアプリケーションへの HTML Access を許可するかどうかを決定します。[有効] ボックスをチェックして、公開デスクトップおよびアプリケーションへの HTML Access を許可します。ファーム作成後にこの設定を編集すると、新しいデスクトップとアプリケーションだけでなく既存のデスクトップとアプリケーションにも新しい値が適用されます。	
セッション共同作業を許可	このファームをベースにするデスクトップ プールのユーザーに、リモート デスクトップセッションへの他のユーザーの招待を許可するには、[有効] を選択します。セッション オーナーと共同作業者は、VMware Blast プロトコルを使用する必要があります。	

Horizon Console での手動ファームの作成

公開アプリケーションまたはデスクトップにユーザーがアクセスできるようにするプロセスの一部として、手動ファームを作成します。

開始する前に

- ファームに属する RDS ホストを設定します。『Horizon 7 での公開されたデスクトップとアプリケーションのセットアップ』ドキュメントの「リモート デスクトップ サービス ホストの設定」を参照してください。
- すべての RDS ホストが使用可能ステータスであることを確認します。Horizon Console で、[インベントリ]-[登録済みのマシン] を選択し、[RDS ホスト] タブの各 RDS ホストのステータスを確認します。

- ファームを作成するために指定する必要がある構成情報を収集します。[「Horizon Console でファームを手動で作成するためのワークシート」](#)を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 [手動ファーム] を選択します。
- 4 ウィザードの指示に従って、ファームを作成します。

ワークシートで収集した構成情報を使用します。ナビゲーション ペインのページ名をクリックすると、ウィザード ページに直接戻ることができます。

- 5 ファームに追加する RDS ホストを選択して、[次へ] をクリックします。
- 6 [終了] をクリックします。

次に進む前に

公開アプリケーションまたはデスクトップ プールを作成します。

Horizon Console で自動インスタント クローン ファームを作成するためのワークシート

自動インスタント クローン ファームを作成するときに、特定の設定を行うことができます。

表 5-2. ワークシート：自動インスタントクローン ファームを作成するための設定

設定	説明	値をここに記入
ID	ファームを識別する一意の名前。	
説明	このファームの説明。	
アクセス グループ	ファームに対するアクセス グループを選択するか、ファームをデフォルトのルート アクセス グループに残します。	
デフォルト表示プロトコル	[VMware Blast]、[PCoIP]、または [Microsoft RDP] を選択します。Microsoft RDP はデスクトップ プールのみ適用されます。アプリケーション プールの表示プロトコルは、必ず [VMware Blast] または [PCoIP] になります。[Microsoft RDP] を選択し、このファームを使用してアプリケーション プールをホストする予定であれば、[ユーザーがプロトコルを選択できるようにする] を [はい] に設定する必要があります。デフォルトは、[PCoIP] です。	
ユーザーがプロトコルを選択できるようにする	[はい] または [いいえ] を選択します。この設定は、公開デスクトップ プールにのみ適用されます。[はい] を選択すると、ユーザーは Horizon Client から公開デスクトップに接続するときに表示プロトコルを選択できます。デフォルトは [はい] です。	

表 5-2. ワークシート：自動インスタントクローン ファームを作成するための設定 (続き)

設定	説明	値をここに記入
3D レンダラー	<p>デスクトップに 3D グラフィックス レンダリングを選択します。</p> <p>3D レンダリングは、仮想ハードウェア バージョン 11 以降の仮想マシンを実行する Windows 2008、Windows 2012、Windows 2016 のゲストでサポートされています。ハードウェアベースのレンダリングは、vSphere 6.0 U1 以降の環境の仮想ハードウェア バージョン 11 以降でサポートされています。ソフトウェア レンダリングは、vSphere 6.0 U1 以降の環境の仮想ハードウェア バージョン 11 以降でサポートされています。</p> <p>ESXi 5.0 ホストの場合、レンダリングに最大 128MB の VRAM を使用できます。ESXi 5.1 以降のホストの場合、VRAM の最大サイズは 512MB です。vSphere 6.0 のハードウェア バージョン 11 (HWv11) の仮想マシンでは、VRAM 値 (ビデオ メモリ) が変更されています。vSphere Web Client で [vSphere Client を使用して管理] オプションを選択して、これらのマシンのビデオ メモリを設定します。詳細については、[vSphere 仮想マシン管理] ガイドの「3D グラフィックスの構成」を参照してください。</p> <p>デフォルトの表示プロトコルに Microsoft RDP を選択し、ユーザーに表示プロトコルの選択を許可しない場合、3D レンダリングは無効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [NVIDIA GRID vGPU] : NVIDIA GRID vGPU の 3D レンダリングが有効になります。ESXi ホストは仮想マシンがパワーオンされる順番に従って GPU ハードウェア リソースを予約します。このオプションを選択すると、vSphere Distributed Resource Scheduler (DRS) は使用できません。 <p>インスタント クローン デスクトップ プールに NVIDIA GRID vGPU を使用する場合には、プロトコルとして VMware Blast を選択し、ユーザーに独自の表示プロトコルを選択させないことを推奨します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [vSphere Client を使用して管理]。vSphere Web Client (または vSphere 5.1 以降の vSphere Client) で設定する仮想マシン用の 3D レンダラー オプションによって、使用される 3D グラフィックス レンダリングのタイプが決まります。Horizon 7 は 3D レンダリングを制御しません。vSphere Web Client で、[自動]、[ソフトウェア]、または [ハードウェア] のオプションを構成できます。これらのオプションは、Horizon コンソールで設定した場合と同じ効果を持ちます。vDGA および vDGA を使用する AMD Multiuser GPU を構成する場合、この設定を使用します。この設定は、vSGA のオプションでもあります。[vSphere Client を使用して管理] オプションを選択すると、[3D ゲストの VRAM を構成]、[モニターの最大数]、[特定のモニターの最大解像度] の設定が Horizon コンソールで非アクティブになります。vSphere Web Client でメモリ量を構成できます。 ■ [無効化] : 3D レンダリングが非アクティブです。デフォルトでは無効になっています。 	
事前起動セッションのタイムアウト (アプリケーションのみ)	<p>事前起動が設定されたアプリケーションが開かれたままにする時間を決定します。デフォルトは [10 分] です。</p> <p>エンドユーザーが Horizon Client の任意のアプリケーションを起動しない場合、アイドル状態のセッションがタイムアウトになるか、事前起動セッションがタイムアウトになると、アプリケーション セッションが切断されます。</p> <p>タイムアウト後に事前起動セッションを終了するには、[切断されたセッションからのログオフ] オプションを [直後] に設定する必要があります。</p>	

表 5-2. ワークシート：自動インスタントクローン ファームを作成するための設定 (続き)

設定	説明	値をここに記入
空のセッションのタイムアウト (アプリケーションのみ)	<p>空のアプリケーション セッションが開かれたままにする時間を決定します。アプリケーション セッションで実行されているアプリケーションがすべて閉じられた時点で、そのセッションは空の状態です。セッションが開かれている間、ユーザーはアプリケーションを速やかに開くことができます。空のアプリケーション セッションを切断またはログオフすると、システム リソースを節約できます。タイムアウト値として、[なし] または [直後] を選択するか、分単位で数字を設定します。デフォルトは [1 分後] です。[直後] を選択すると、30 秒以内にセッションがログオフまたは切断します。</p> <p>Horizon Agent がインストールされている RDS ホストのレジストリ キーを編集すると、セッションのログオフまたは切断時間をさらに短縮できます。</p> <p>HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\VMware, Inc.\VMware VDM\Plugins\wssm\applaunchmgr\Params に移動し、WindowCheckInterval の値を設定します。デフォルト値は 20000 です。この場合、空のセッションの確認が 20 秒ごとに行われます。最後のアプリケーション セッションが終了してからセッションがログオフするまでの最大時間は 40 秒に設定されます。この値は 2500 に変更できます。この場合、空のセッションの確認が 2.5 秒ごとに行われます。最後のアプリケーションが終了してからセッションがログオフするまでの最大時間は 5 秒に設定されます。</p>	
タイムアウトの発生時	[空のセッションのタイムアウト] 制限に達した時点で空のアプリケーション セッションを切断するか、それともログオフするかを決定します。[切断] または [ログオフ] を選択します。ログオフされたセッションはリソースを解放しますが、アプリケーションを開くのに比較的時間がかかります。デフォルトは [切断] です。	
切断されたセッションからのログオフ	切断されたセッションをログオフするタイミングを決定します。この設定は、デスクトップセッションとアプリケーション セッションの両方に適用されます。[なし]、[直後]、または [...分後] を選択します。[直後] または [... 分後] の選択は慎重に行ってください。切断されたセッションがログオフされる時点でそのセッションは失われます。デフォルトは [なし] です。	
このファームのデスクトップとアプリケーションへの HTML Access を許可	公開デスクトップおよびアプリケーションへの HTML Access を許可するかどうかを決定します。[有効] ボックスをチェックして、公開デスクトップおよびアプリケーションへの HTML Access を許可します。ファーム作成後にこの設定を編集すると、新しいデスクトップとアプリケーションだけでなく既存のデスクトップとアプリケーションにも新しい値が適用されます。	
セッション共同作業を許可	このファームをベースにするデスクトップ プールのユーザーに、リモート デスクトップセッションへの他のユーザーの招待を許可するには、[有効] を選択します。セッション オーナーとセッション共同作業者は、VMware Blast 表示プロトコルを使用する必要があります。	
RDS サーバあたりの最大セッション数	RDS ホストでサポートできる最大セッション数を指定します。[無制限] または [次の値以下...] を選択します。デフォルトは [無制限] です。	
プロビジョニングを有効にする	このウィザードの完了後にプロビジョニングを有効にするには、このチェックボックスを選択します。デフォルトでは、このボックスは選択されています。	
エラーによりプロビジョニングを停止	プロビジョニング エラーが発生した場合にプロビジョニングを停止するには、このチェックボックスを選択します。デフォルトでは、このボックスは選択されています。	

表 5-2. ワークシート：自動インスタントクローン ファームを作成するための設定 (続き)

設定	説明	値をここに記入
名前付けパターン	<p>プリフィックスまたは名前の形式を指定します。Horizon 7 により、1 から始まる自動生成番号が追加または挿入され、マシン名が形成されます。末尾に番号を追加する場合は、プリフィックスを選択するだけです。それ以外の場合、文字列の任意の場所で [{n}] を指定すると、[{n}] が番号に置き換わります。また、[{n:fixed=<number of digits>}] を指定することもできます。[fixed=<number of digits>] はその番号に使用される桁数を示します。たとえば、[vm-{n:fixed=3}-sales] を指定すると、マシン名は vm-001-sales、vm-002-sales などのようになります。</p> <p>注 各マシン名（自動生成番号を含む）には、15 文字の制限があります。</p>	
マシンの最大数	プロビジョニングするマシンの数。	
インスタント クローンのメンテナンス操作中における（プロビジョニング済み）動作可能マシンの最小数	この設定により、接続サーバがファームの仮想マシンのメンテナンス操作を行っている間、接続要求を受け入れることができる仮想マシンの数を指定の数に維持できます。この設定は、即時メンテナンスをスケジュールする場合には適用されません。	
vSphere Virtual SAN を使用する	可能な場合、VMware Virtual SAN を使用するかどうかを指定します。Virtual SAN はソフトウェア定義のストレージ階層で、ESXi ホストのクラスタで使用可能なローカル物理ストレージ ディスクを仮想化します。	
レプリカおよび OS ディスク用に別のデータストアを選択します	<p>(Virtual SAN を使用しない場合にのみ使用可能) パフォーマンスなどの理由により、レプリカおよび OS ディスクを別のデータストアに配置できます。</p> <p>このオプションを選択すると、1 つ以上のインスタントクローン データストアまたはレプリカ ディスク データストアを選択するオプションを選択できます。</p>	
親仮想マシン	リストから親仮想マシンを選択します。リストには、View Composer Agent がインストールされていない仮想マシンが含まれています。View Composer Agent は必要なので、これらのマシンを選択しないでください。仮想マシンに View Composer Agent がインストールされているかどうかがわかる命名規則を使用することをお勧めします。	
スナップショット	<p>ファームの基本イメージとして使用する親仮想マシンのスナップショットを選択します。vCenter Server からスナップショットと親仮想マシンを削除しないようにしてください。ただし、ファーム内のインスタントクローンがデフォルト イメージを使用せず、このデフォルト イメージから今後インスタントクローンを作成することがない場合は削除しても構いません。システムでは、ファーム ポリシーに従ってファーム内に新しいインスタントクローンをプロビジョニングするために、親仮想マシンおよびスナップショットが必要です。親仮想マシンとスナップショットは、接続サーバのメンテナンス操作も必要です。</p>	
仮想マシンのフォルダの場所	ファームが配置される vCenter Server 内のフォルダを選択します。	
クラスタ	<p>デスクトップ仮想マシンが実行される ESXi ホストまたはクラスタを選択します。</p> <p>Virtual SAN データストア (vSphere 5.5 Update 1 の機能) では、最大 20 個までの ESXi ホストを持つクラスタを選択できます。Virtual Volumes データストア (vSphere 6.0 の機能) では、最大 32 台までの ESXi ホストを持つクラスタを選択できます。</p> <p>vSphere 5.1 以降では、レプリカが VMFS5 以降のデータストアまたは NFS データストアに保存されている場合、最大で 32 台の ESXi ホストでクラスタを選択できます。VMFS5 より前の VMFS バージョンにレプリカを保存する場合、クラスタは最大で 8 ホストを持つことができます。</p> <p>vSphere 5.0 では、レプリカが NFS データストアに保存されている場合、8 を超える ESXi ホストでクラスタを選択できます。レプリカを VMFS データストアに保存する場合、クラスタは最大で 8 つのホストを持つことができます。</p>	

表 5-2. ワークシート：自動インスタントクローン ファームを作成するための設定 (続き)

設定	説明	値をここに記入
リソース プール	ファームが配置される vCenter Server リソース プールを選択します。	
データストア	<p>ファームを格納するデータストアを 1 つ以上選択します。</p> <p>[ファームを追加] ウィザードの 【インスタント クローンのデータストアを選択】 ページにある表は、ファームのストレージ要件を見積もるための大まかなガイドラインを提供します。これらのガイドラインは、インスタントクローンを格納するための十分な大きさがあるデータストアを特定するのに役立ちます。[ストレージ オーバーコミット] の値は常時 [境界なし] に設定され、構成できません。</p> <p>注 Virtual SAN を使用する場合、データストアを 1 つのみ選択します。</p>	
レプリカ ディスク データストア	<p>インスタントクローンを格納するレプリカ ディスク データストアを 1 つ以上選択します。このオプションは、レプリカとオペレーティングシステム ディスクで別々のデータストアを選択する場合に表示されます。</p> <p>[ファームを追加] ウィザードの 【レプリカ ディスクのデータストアを選択します】 ページにある表は、ファームのストレージ要件を見積もるための大まかなガイドラインを提供します。これらのガイドラインは、インスタントクローンを格納するための十分な大きさがあるレプリカ ディスク データストアを特定するのに役立ちます。</p>	
ネットワーク	<p>自動インスタントクローン ファームに使用するネットワークを選択します。複数の vLAN ネットワークを選択して、大規模なインスタントクローン デスクトップ プールを作成できます。デフォルト設定では、現在の親仮想マシンのイメージのネットワークが使用されます。</p> <p>【ネットワークの選択】 ウィザードの表には、使用可能なネットワーク、ポート、およびポート バインドが表示されます。複数のネットワークを使用するには、[現在の親仮想マシン イメージのネットワークを使用します] の選択を解除し、インスタントクローン ファームで使用するネットワークを選択する必要があります。</p>	
ドメイン	<p>Active Directory ドメインおよびユーザー名を選択します。</p> <p>接続サーバには、ファームに対する特定のユーザー権限が必要です。ドメインおよびユーザー アカウントは、インスタントクローン マシンをカスタマイズするために ClonePrep によって使用されます。</p> <p>このユーザーは、vCenter Server のための接続サーバ設定を構成するときに指定します。接続サーバ設定を構成する場合は、複数のドメインとユーザーを指定できます。</p> <p>【ファームを追加】 ウィザードを使用してファームを作成する場合、リストから 1 つのドメインとユーザーを選択する必要があります。</p>	
AD コンテナ	<p>Active Directory コンテナの相対識別名を指定します。</p> <p>例：CN=Computers</p> <p>【ファームを追加】 ウィザードを実行するとき、Active Directory ツリー内のコンテナを参照できます。コンテナ名は、カット、コピー、またはペーストできます。</p>	

表 5-2. ワークシート：自動インスタントクローン ファームを作成するための設定 (続き)

設定	説明	値をここに記入
既存のコンピュータ アカウントの再利用を許可	<p>このオプションは、新しいインスタント クローンの仮想マシン名が既存のコンピュータ アカウント名に一致するときに、Active Directory にある既存のコンピュータ アカウントを使用する場合に選択します。</p> <p>インスタント クローンの作成時に、既存の Active Directory コンピュータ アカウント名がインスタント クローン仮想マシン名に一致すると、Horizon 7 は既存のコンピュータ アカウントを使用します。一致しない場合は、新しいコンピュータ アカウントが作成されます。</p> <p>既存のコンピュータ アカウントが、Active Directory コンテナの設定で指定する Active Directory コンテナに配置されている必要があります。</p> <p>このオプションを無効にした場合、Horizon 7 がインスタント クローンを作成するときに、新しい Active Directory コンピュータ アカウントが作成されます。このオプションは、デフォルトで無効になっています。</p>	
ClonePrep を使用	<p>仮想マシンをカスタマイズするための ClonePrep カスタマイズ仕様を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [パワーオフ スクリプト名]。インスタントクローン マシンがパワーオフになる前に ClonePrep が実行するカスタマイズスクリプトの名前。親仮想マシン上のスクリプトのパスを指定します。 ■ [パワーオフ スクリプト パラメータ]。インスタントクローン マシンをパワーオフする前に、ClonePrep がこれらのマシンでカスタマイズスクリプトを実行するために使用できるパラメータを提供します。たとえば、p1 を使用します。 ■ [同期後スクリプト名]。インスタントクローン マシンが作成された後、またはイメージがこれらのマシンにプッシュされた後に、インスタントクローン マシンで ClonePrep が実行するカスタマイズ スクリプトの名前。親仮想マシン上のスクリプトのパスを指定します。 ■ [同期後スクリプト パラメータ]。インスタントクローン マシンが作成された後、またはイメージがこれらのマシンにプッシュされた後に、インスタントクローン マシンで ClonePrep が実行するスクリプトのパラメータを提供します。たとえば、p2 を使用します。 	
設定内容の確認	自動インスタントクローン ファームの設定を確認します。	

Horizon Console での自動インスタント クローン ファームの作成

公開アプリケーションまたは公開デスクトップにユーザーがアクセスできるようにするプロセスの一部として、自動インスタント クローン ファームを作成します。

開始する前に

- 接続 サーバがインストールされていることを確認します。『Horizon 7 のインストール』ドキュメントを参照してください。
- vCenter Server の接続サーバ設定が Horizon Administrator で構成されていることを確認します。『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。
- リモート デスクトップとして使用している仮想マシンに対して使用されている ESXi 仮想スイッチに十分な数のポートがあることを確認します。大規模なデスクトップ プールを作成する場合、デフォルト値では不十分なことがあります。

- 親仮想マシンを準備したことを確認します。親仮想マシンで Horizon Agent がインストールされている必要があります。『Horizon 7 での公開されたデスクトップとアプリケーションのセットアップ』ドキュメントで「自動ファーム用の親仮想マシンの準備」を参照してください。
- vCenter Server で親仮想マシンのスナップショットを作成します。スナップショットを作成する前に親仮想マシンをシャットダウンする必要があります。接続サーバは、クローンを作成するための基本イメージとしてスナップショットを使用します。
- ファームを作成するために指定する必要がある構成情報を収集します。[「Horizon Console で自動インスタントクローン ファームを作成するためのワークシート」](#)を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 [自動ファーム] を選択します。
- 4 ウィザードの指示に従って、ファームを作成します。

ワークシートで収集した構成情報を使用します。ナビゲーションパネルのページ名をクリックすると、完了したウィザード ページに直接戻ることができます。

次に進む前に

公開アプリケーションまたはデスクトップ プールを作成します。

Horizon Console での公開デスクトップ プールの作成

ユーザーにセッション ベース デスクトップへのリモート アクセスを提供するための作業の 1 つとして、公開デスクトップ プールを作成します。公開デスクトップ プールは、RDS ホストのファームで実行されます。このプロパティを使用すると、リモート デスクトップ環境の特定の要件を満たすことができます。

公開デスクトップ プールのプロパティの詳細については、『Horizon 7 での公開されたデスクトップとアプリケーションのセットアップ』ドキュメントを参照してください。

公開デスクトップ プール作成用のワークシート

RDS ホストのファームで実行される公開デスクトップ プールを作成するときに、特定のプール設定を指定できます。すべてのプール設定がすべての種類のデスクトップ プールに適用されるわけではありません。これらは、公開デスクトップ プールに固有の設定です。

表 5-3. 公開デスクトップ プールの設定

設定	説明	デフォルト値
状態	<ul style="list-style-type: none"> ■ [有効化]: デスクトップ プールは作成後に有効になり、すぐに使用できます。 ■ [無効化]: デスクトップ プールは作成後に無効になり、使用できません。またプールのプロビジョニングも停止します。展開後にテストなどの標準メンテナンスのような作業を行う場合にはこの設定が適しています。 <p>この状態が有効の場合、リモート デスクトップは使用できません。</p>	有効
接続サーバの制限	<p>デスクトップ プールへのアクセスを特定の接続サーバに制限するには、[参照] をクリックして、1 台以上の接続サーバを選択します。</p> <p>VMware Identity Manager からデスクトップへのアクセスを提供することを意図して接続サーバの制限を構成すると、これらのデスクトップが実際には制限されている場合でも VMware Identity Manager アプリケーションでユーザーにデスクトップが表示されることがあります。VMware Identity Manager ユーザーは、これらのデスクトップを起動できません。</p>	なし
カテゴリ フォルダ	Windows クライアント デバイスのデスクトップ プール資格に、スタート メニューのショートカットを含むカテゴリ フォルダの名前を指定します。	無効
クライアントの制限	<p>資格を付与されたデスクトップ プールへの特定のクライアント コンピュータからのアクセスを制限するかどうかを選択します。</p> <p>デスクトップ プールへのアクセスを許可するコンピュータの名前を Active Directory セキュリティ グループに追加する必要があります。デスクトップ プール資格にユーザーまたはグループを追加するときに、このセキュリティ グループを選択できます。</p>	無効

Horizon Console での公開デスクトップ プールの作成

RDS ホストのファームで実行されるデスクトップへのアクセス権を付与するときに、公開デスクトップ プールを作成します。

開始する前に

- RDS ホストをセットアップします。『Horizon 7 での公開されたデスクトップとアプリケーションのセットアップ』ドキュメントの「リモート デスクトップ サービス ホストの設定」を参照してください。
- それらの RDS ホストが含まれるファームを作成します。「[Horizon Console でのファームの作成](#)」を参照してください。
- プール設定の構成方法を決定します。『Horizon 7 での公開されたデスクトップとアプリケーションのセットアップ』ドキュメントで「RDS デスクトップ プールのデスクトップ プールの設定」を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 [RDS デスクトップ プール] を選択して、[次へ] をクリックします。
- 4 プール ID、表示名、および説明を指定します。

プールIDは、Horizon Administratorでプールを識別する一意の名前です。表示名は、ユーザーがHorizon Clientにログインするときに表示される RDS デスクトップ プールの名前です。表示名を指定しない場合は、表示名はプールIDと同じになります。

- 5 プール設定を選択します。
- 6 このプールのファームを選択または作成します。

次に進む前に

プールにアクセスするための資格をユーザーに付与します。

Horizon Console でのアプリケーション プールの作成

ユーザーにアプリケーションへのリモート アクセスを提供するためのタスクの1つとして、アプリケーション プールを作成します。アプリケーション プールに対する資格が付与されているユーザーは、さまざまなクライアント デバイスからアプリケーションにリモート アクセスを行うことができます。

アプリケーション プールを使用すると、1つのアプリケーションを多くのユーザーに配信できます。アプリケーションはRDSホストのファームで実行されます。

アプリケーション プールを作成する場合、ユーザーがネットワーク上のどこからでもアクセスできるデータセンターにアプリケーションを展開します。

アプリケーション プールには1つのアプリケーションがあり、1つのファームと関連付けられています。エラーを避けるため、ファームのすべてのRDSホストにアプリケーションをインストールする必要があります。

Horizon 7 では、アプリケーション プールを作成すると、ファームのすべてのRDSホストの[スタート]メニューから、(個々のユーザーではなく) すべてのユーザーが使用可能なアプリケーションが自動的に表示されます。リストから1つ以上のアプリケーションを選択できます。リストから複数のアプリケーションを選択すると、アプリケーションごとに個別のアプリケーション プールが作成されます。リストにないアプリケーションを手動で指定することもできます。手動で指定するアプリケーションがまだインストールされていない場合、Horizon 7 に警告メッセージが表示されます。

アプリケーション プールを作成する際、プールを配置するアクセス グループは指定できません。公開アプリケーション プールとデスクトップ プールについては、ファームの作成時にアクセス グループを指定します。

アプリケーションはPCoIP および VMware Blast 表示プロトコルをサポートします。HTML Access を有効にする方法については、『VMware Horizon HTML Access のインストールとセットアップガイド』ドキュメントを参照してください。

Horizon Console でアプリケーション プールを手動で作成するためのワークシート

アプリケーション プールを作成してアプリケーションを手動で指定する場合、アプリケーションの情報を追加できます。RDS ホストにアプリケーションをインストールしておく必要はありません。

表 5-4. ワークシート：アプリケーション プールを手動で作成するためのアプリケーションのプロパティ

プロパティ	説明	値をここに記入
ID	Horizon Administrator でプールを識別する一意の名前。 このフィールドは必須です。	
表示名	Horizon Client にログインする際にユーザーに表示されるプール名。表示名を指定しない場合は、[ID] と同じになります。	
バージョン	アプリケーションのバージョン。	
パブリッシャ	アプリケーションのパブリッシャ。	
パス	アプリケーションのフル パス名。例： C:\Program Files\app1.exe 。このフィールドは必須です。	
開始フォルダ	アプリケーションの開始ディレクトリのフル パス名。	
パラメータ	アプリケーションの起動時にアプリケーションに渡すパラメータ。たとえば、 -username user1 -loglevel 3 を指定できます。	
説明	このアプリケーション プールの説明。	
事前起動	<p>このオプションは、ユーザーが Horizon Client でアプリケーションを開く前にアプリケーション セッションを開始するように公開アプリケーションを設定する場合に選択します。公開アプリケーションを起動するときに、Horizon Client でより速くアプリケーションを開始できます。</p> <p>このオプションを有効にすると、Horizon Client からサーバへの接続方法に関係なく、ユーザーが Horizon Client でアプリケーションを開く前に、構成済みのアプリケーション セッションが起動されます。</p> <p>注 アプリケーション ファームを追加または編集するときに [事前起動セッションのタイムアウト (アプリケーションのみ)] オプションが設定されていると、アプリケーション セッションが切断されます。</p>	
接続サーバの制限	<p>アプリケーション プールへのアクセスを特定の接続サーバに制限するには、[参照] をクリックして、1 台以上の接続サーバを選択します。</p> <p>VMware Identity Manager からデスクトップへのアクセスを提供することを意図して接続サーバの制限を構成すると、これらのデスクトップが実際には制限されている場合でも VMware Identity Manager アプリケーションでユーザーにデスクトップが表示されることがあります。VMware Identity Manager ユーザーは、これらのデスクトップを起動できません。</p>	

表 5-4. ワークシート：アプリケーション プールを手動で作成するためのアプリケーションのプロパティ（続き）

プロパティ	説明	値をここに記入
カテゴリ フォルダ	Windows クライアント デバイスのアプリケーション プール資格に、スタート メニューのショートカットを含むカテゴリ フォルダの名前を指定します。	
クライアントの制限	資格を付与されたアプリケーション プールへの特定のクライアント コンピュータからのアクセスを制限するかどうかを選択します。 アプリケーション プールへのアクセスを許可するコンピュータの名前を Active Directory セキュリティ グループに追加する必要があります。アプリケーション プール資格にユーザーまたはグループを追加するときに、このセキュリティ グループを選択できます。	

Horizon Console でのアプリケーション プールの作成

RDS ホストで動作するアプリケーションにユーザーがアクセスできるようにする処理の一部として、アプリケーション プールを作成します。

開始する前に

- RDS ホストをセットアップします。『Horizon 7 での公開されたデスクトップとアプリケーションのセットアップ』ドキュメントの「リモート デスクトップ サービス ホストの設定」を参照してください。
- それらの RDS ホストが含まれるファームを作成します。[「Horizon Console でのファームの作成」](#)を参照してください。
- アプリケーション プールを手動で追加する場合は、アプリケーションについての情報を収集します。[「Horizon Console でアプリケーション プールを手動で作成するためのワークシート」](#)を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択します。
- 2 [追加] をクリックします。
- 3 ウィザードの指示に従って、プールを作成します。

アプリケーション プールを手動で追加することを選択する場合は、ワークシートで収集した構成情報を使用します。Horizon Console が表示するリストからアプリケーションを選択する場合は、複数のアプリケーションを選択できます。アプリケーションごとに個別のプールが作成されます。

次に進む前に

プールにアクセスするための資格をユーザーに付与します。

公開アプリケーションのサポートに必要な Horizon Client 3.0 以降のソフトウェアにエンド ユーザーがアクセスできることを確認します。

アプリケーションを実行できる十分なリソースがある RDS ホストでのみ接続サーバがアプリケーションを起動するように限定するには、アプリケーション プールに非アフィニティ ルールを構成します。[「Horizon Console でのアプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成」](#)を参照してください。

Horizon Console でのアプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成

アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールを構成すると、Horizon 接続サーバはアプリケーションを実行するのに十分なリソースを持つ RDS ホストのみでアプリケーションを起動するように試みます。この機能は、大量の CPU またはメモリ リソースを消費するアプリケーションを制御するのに役立ちます。

アンチアフィニティ ルールは、アプリケーション一致パターンと最大数で構成されます。たとえば、アプリケーション一致パターンは **autocad.exe** で最大数は 2 の可能性があります。

接続サーバは、RDS ホスト上の Horizon Agent にアンチアフィニティ ルールを送信します。プロセス名がアプリケーション一致パターンと同じであるアプリケーションが RDS ホストで実行されている場合、Horizon Agent はこれらのアプリケーションのインスタンスの現在数を数え、その数を最大数と比較します。最大数を超えた場合、接続サーバは RDS ホストの選択時にその RDS ホストをスキップしてアプリケーションの新規セッションを実行します。

開始する前に

- アプリケーション プールを作成します。[「Horizon Console でのアプリケーション プールの作成」](#) を参照してください。
- アンチアフィニティ機能の制約についてよく理解します。[「アンチアフィニティ機能の制約」](#) を参照してください。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択します。
- 2 変更するプールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [アンチアフィニティ パターン] テキスト ボックスに、RDS ホストで実行されている他のアプリケーションのプロセス名に一致するパターンのカンマ区切りリストを入力します。

パターン文字列には、アスタリスク (*) と疑問符 (?) をワイルドカード文字として含むことができます。アスタリスクは 0 文字以上に一致し、疑問符は任意の 1 文字に一致します。

たとえば、***pad.exe, *notepad.???** は **wordpad.exe**、**notepad.exe**、および **notepad.bat** に一致しますが、**wordpad.bat** または **notepad.script** には一致しません。

注 Horizon 7 は、1 つのセッションのアプリケーションについて一致する複数のパターンを 1 つの一致としてカウントします。

- 4 [アンチアフィニティの数] テキスト ボックスに、RDS ホストが新しいアプリケーション セッションについて拒否されるまでに RDS ホストで実行できる他のアプリケーションの最大数を入力します。

最大数は 1 から 20 までの整数です。

- 5 [送信] をクリックして、変更を保存します。

アンチアフィニティ機能の制約

アンチアフィニティ機能には一定の制約があります。

- アンチアフィニティ ルールは、新規のアプリケーション セッションにのみ影響を及ぼします。ユーザーが以前にアプリケーションを実行したセッションが含まれる RDS ホストは、必ず同じアプリケーションで再利用されます。この動作は、レポートされるロード設定およびアンチアフィニティ ルールに優先します。
- アンチアフィニティ ルールは、RDS デスクトップ セッション内からのアプリケーションの起動には影響を及ぼしません。
- RDS セッションの制限により、アンチアフィニティ ルールに関係なく、アプリケーション セッションを作成できなくなります。
- 特定の状況では、RDS ホストにおけるアプリケーションのインスタンスが指定した最大数に制約されない場合があります。たとえば、他の保留中のセッションの他のアプリケーションが起動中の場合、View は正確なインスタンス数を判断できません。
- アプリケーション間のアンチアフィニティ ルールはサポートされません。たとえば、Autocad や Visual Studio インスタンスなどの大規模なアプリケーション クラスは 1 つのルールではカウントできません。
- エンドユーザーがモバイル クライアントで Horizon Client を使用する環境では、アンチアフィニティ ルールを使用しないでください。アンチアフィニティ ルールにより、エンドユーザーの同一ファーム内で複数のセッションが開始されることがあります。モバイル クライアントで複数のセッションに再接続すると、動作が不安定になる場合があります。

Horizon Console でのファームの管理

Horizon Console で、ファームを追加、編集、削除、有効、無効にできます。

ファームの作成後、RDS ホストを追加または削除して、サポートするユーザーを増やしたり減らしたりできます。

Horizon Console でのファームの編集

既存のファームの設定を変更できます。

開始する前に

ファームの設定を理解します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 ファームを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 ファームの設定を変更します。
- 4 [OK] をクリックします。

Horizon Console でのファームの削除

ファームが必要なくなった場合、または別の RDS ホストで新しいファームを作成する場合、ファームを削除できます。削除できるのは、公開デスクトップ プールまたはアプリケーション プールに関連付けられていないファームのみです。

開始する前に

ファームが公開デスクトップ プールまたはアプリケーション プールに関連付けられていないことを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 1 つ以上のファームを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックして確定します。

Horizon Console でのファームの無効化または有効化

ファームを無効化すると、ファームに関連付けられている公開デスクトップ プールやアプリケーション プールから公開デスクトップまたはアプリケーションを起動できなくなります。ユーザーは現在開いているアプリケーションと公開デスクトップを引き続き使用できます。

ファーム内の RDS ホストまたはファームに関連付けられている公開デスクトップ プールやアプリケーション プールでメンテナンスを行う計画がある場合は、ファームを無効化できます。ファームを無効化した後、一部のユーザーが、ファームを無効化する前に開いた公開デスクトップ プールまたはアプリケーションをまだ使用していることがあります。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 1 つ以上のファームを選択して [その他のコマンド] をクリックします。
- 3 [有効化] または [無効化] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックして確定します。

プールのステータスを表示するには、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択するか、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択します。

Horizon Console での自動インスタント クローン ファームのメンテナンス スケジュール

メンテナンス操作で、自動インスタントクローン ファームのすべての RDS ホストに定期的または即時メンテナンスをスケジュールリングできます。各メンテナンス サイクル中に、すべての RDS ホストが親仮想マシンから更新されます。

メンテナンスでは現在の親仮想マシンのスナップショットが使用されるため、RDS ホストのインスタント クローンに影響を及ぼさずに親仮想マシンに変更を行うことができます。自動ファームに作成されたインスタント クローンは、システム構成に親仮想マシンの情報を使用します。

自動ファームのメンテナンスをスケジューリングすることはできますが、ファーム内の RDS ホストに個別にスケジューリングすることはできません。

可能であれば、オフピーク時にメンテナンス操作を実行し、ピーク時にすべての RDS ホストが使用可能な状態になっているようにスケジューリングしてください。

開始する前に

- メンテナンス操作のスケジュールを決定します。デフォルトでは、接続サーバはすぐに操作を開始します。

ファームには、即時メンテナンス、定期的なメンテナンスまたはその両方のスケジュールを設定できます。メンテナンス操作のスケジュールは、複数のファームに同時に設定できます。

- メンテナンス操作の開始後すぐにすべてのユーザーを強制的にログオフさせるか、各ユーザーがログオフしてからそのユーザーのマシンを更新するのかを決定します。

ユーザーを強制的にログオフさせる場合、Horizon 7 は切断する前にユーザーに通知するため、ユーザーはアプリケーションを閉じてログオフすることができます。

- ファームの最小サイズを決定します。ファームの最小サイズは、ユーザーがファームの使用を継続できるように常に使用可能にしておく RDS ホスト数です。たとえば、ファーム サイズが 10 で、最小サイズが 2 の場合、メンテナンスは 8 個の RDS ホストに実行されます。各 RDS ホストが再度使用可能になると、別のホストでメンテナンスが実行されます。すべての RDS ホストは個別に管理されます。1 台のホストが使用可能になると、残りのホストの 1 つでメンテナンスが実行されます。

ただし、即時メンテナンスをスケジューリングした場合には、ファームのすべての RDS ホストでメンテナンスが実行されます。

すべての RDS ホストにポリシーが適用されます。設定したポリシーに応じて、ユーザーのログオフを待機するか、ユーザーを強制的にログオフします。

- 最初のエラーでプロビジョニングを停止するかどうかを決定します。このオプションを選択した場合、接続サーバがインスタント クローンをプロビジョニング中にエラーが発生すると、プロビジョニングが停止します。このオプションを選択することにより、ストレージなどのリソースが不必要に消費されるのを防ぐことができます。

[最初のエラーで停止] オプションを選択しても、カスタマイズには影響を与えません。インスタント クローン上でカスタマイズ エラーが発生しても、他のクローンのプロビジョニングとカスタマイズは続行されます。

- そのプロビジョニングが有効になっていることを確認します。プロビジョニングが無効の場合、Horizon 7 は、マシンが更新後にカスタマイズされないようにします。
- レプリケートされた接続サーバ インスタンスが展開環境内に含まれる場合は、すべてのインスタンスが同一バージョンであることを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 メンテナンスをスケジューリングするファームのプール ID をクリックします。
- 3 [メンテナンス] - [スケジュール] の順にクリックします。

4 [定期的なメンテナンスのスケジュール] ウィザードで、メンテナンス モードを選択します。

◆ オプション	アクション
[定期的]	<p>ファーム内にあるすべての RDS ホスト サーバに定期的メンテナンスをスケジュールリングします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メンテナンスが有効になる日付と時刻を選択します。 ■ メンテナンス期間を選択します。メンテナンス期間には、毎日、毎月または毎週を選択できます。 ■ メンテナンス操作の繰り返し期間を日数で選択します。 <p>ファームで即時メンテナンスがスケジュールリングされている場合、即時メンテナンスの日付が定期的メンテナンスの有効日になります。即時メンテナンスをキャンセルすると、現在の日付が定期的メンテナンスの有効日になります。</p>
[直後]	<p>ファーム内にあるすべての RDS ホスト サーバに即時メンテナンスをスケジュールリングします。即時メンテナンスの場合、即時または近い将来実施する 1 回のメンテナンスをスケジュールリングできます。即時メンテナンスは、緊急のセキュリティ パッチを適用するために、新しい親仮想マシン イメージまたはスナップショットを使用してファームを更新する場合に実施します。</p> <p>即時メンテナンスの構成を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メンテナンス操作をすぐに開始するには、[今すぐ開始] を選択します。 ■ メンテナンス操作を近い将来に実施するには、[開始日時] を選択します。日付と Web ブラウザのローカル時刻を入力します。 <p>注 即時メンテナンスが完了するまで、定期的メンテナンスは延期されます。</p>

5 [次へ] をクリックします。

6 (オプション) [変更] をクリックし、親仮想マシンを変更します。

7 スナップショットを選択します。

[現在の親仮想マシン イメージを使用] チェックボックスをオフにするまで、別のスナップショットは選択できません。

8 (オプション) [スナップショットの詳細] をクリックすると、スナップショットに関する詳細が表示されます。

9 [次へ] をクリックします。

10 (オプション) ユーザーを強制的にログオフさせるのか、ユーザーがログオフするのを待つのかを指定します。

デフォルトでは、ユーザーを強制的にログオフさせるオプションが選択されています。

11 (オプション) 最初にエラーが発生したときにプロビジョニングを停止するかどうかを指定します。

このオプションはデフォルトで選択されています。

12 [次へ] をクリックします。

[設定内容の確認] ページが表示されます。

13 [終了] をクリックします。

Horizon Console でのアプリケーション プールの管理

Horizon Console でアプリケーション プールの追加、編集、削除、またはアプリケーション プールへの資格付与を行うことができます。

Horizon Console でのアプリケーション プールの編集

既存のアプリケーション プールを編集して、表示名、バージョン、パブリッシャ、パス、開始フォルダ、パラメータ、説明などの設定を構成できます。アプリケーション プールの ID やアクセス グループは変更できません。

開始する前に

- アプリケーション プールの設定について理解しておきます。
- 接続サーバがアプリケーションの実行に必要なリソースを持つ RDS ホストでのみアプリケーションを起動するため、アンチアフィニティ ルールの構成が必要になる場合があります。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択します。
- 2 プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 プールの設定を変更します。
- 4 [OK] をクリックします。

Horizon Console でのアプリケーション プールの削除

アプリケーション プールを削除すると、ユーザーはプール内のアプリケーションを起動できなくなります。

ユーザーが現在アプリケーションにアクセスしていても、アプリケーション プールを削除できます。ユーザーがアプリケーションを終了した後は、アプリケーションにアクセスできなくなります。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択します。
- 2 1 つ以上のアプリケーション プールを選択して [削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックして確定します。

Horizon Console での RDS ホストの管理

手動で設定した RDS ホストと、自動ファームの追加時に自動的に作成された RDS ホストを管理できます。

RDS ホストを手動で設定すると、設定した RDS ホストは自動的に Horizon 接続サーバに登録されます。RDS ホストを接続サーバに手動で登録することはできません。手動で設定した RDS ホストに対しては、以下の管理タスクを実行できます。

- RDS ホストを編集する。
- 手動ファームに RDS ホストを追加する。

- ファームから RDS ホストを削除する。
- RDS ホストを有効にする。
- RDS ホストを無効にする。

自動ファームの追加時に自動的に作成された RDS ホストに対しては、以下の管理タスクを実行できます。

- ファームから RDS ホストを削除する。
- RDS ホストを有効にする。
- RDS ホストを無効にする。

Horizon Console での RDS ホストの編集

RDS ホストでサポートできる接続数を変更できます。この設定は、変更可能な唯一の設定です。デフォルト値は 150 で、任意の正の数値または無制限に設定できます。

編集できる RDS ホストは、手動で設定したものに限られます。自動ファーム内の RDS ホストは編集できません。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [登録済みのマシン] の順に選択します。
- 2 RDS ホストを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [接続数] 設定の値を指定します。
- 4 [OK] をクリックします。

Horizon Console で手動ファームに RDS ホストを追加する

ファームの規模を拡大するなどの理由で、手動で設定した RDS ホストを手動ファームに追加することができます。RDS ホストは手動ファームにしか追加できません。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 ファーム ID をクリックします
- 3 [RDS ホスト] タブを選択します。
- 4 [追加] をクリックします。
- 5 1 つ以上の RDS ホストを選択します。
- 6 [OK] をクリックします。

Horizon Console でのファームからの RDS ホストの削除

手動ファームの規模の縮小、RDS ホストのメンテナンスの実行などの理由で、手動ファームから RDS ホストを削除できます。ベスト プラクティスとして、ホストをファームから削除する前に、RDS ホストを無効にしてユーザーがアクティブなセッションからログオフしていることを確認します。

削除するホスト上にユーザーのアプリケーション セッションやデスクトップ セッションがある場合、セッションはアクティブなままですが、Horizon 7 はセッションをトラッキングしません。セッションから切断されたユーザーは再度接続することができず、未保存のデータが失われることがあります。

自動ファームから RDS ホストを削除することもできます。考えられる理由の 1 つは、RDS ホストが回復不能なエラー状態にあることです。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 ファーム ID をクリックします。
- 3 [RDS ホスト] タブを選択します。
- 4 1 つ以上の RDS ホストを選択します。
- 5 [ファームから削除] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックします。

Horizon 7 からの RDS ホストの削除

手動で設定し、使用する予定がなくなった RDS ホストは、Horizon 7 から削除できます。現在、手動ファームには、このような RDS ホストは存在してはなりません。

開始する前に

RDS ホストがファームに属していないことを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [登録済みのマシン] の順に選択します。
- 2 RDS ホストを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックします。

RDS ホストを削除した後、その RDS ホストを再び使用するには、Horizon Agent を再インストールする必要があります。

Horizon Console での RDS ホストの無効化または有効化

RDS ホストを無効化すると、Horizon 7 により新しい公開デスクトップまたはアプリケーションをホストするのに使用されなくなります。ユーザーは現在開いているアプリケーションと公開デスクトップを引き続き使用できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[インベントリ] - [ファーム] の順に選択します。
- 2 ファーム ID をクリックします。
- 3 [RDS ホスト] タブを選択します。
- 4 RDS ホストを選択し、[その他のコマンド] をクリックします。

5 [有効化] または [無効化] をクリックします。

6 [OK] をクリックします。

RDS ホストを有効化すると、[有効] 列にチェックマークが表示され、[ステータス] 列に [使用可能] が表示されます。RDS ホストを無効化すると、[有効] 列は空白で、[ステータス] 列に [無効] が表示されます。

Horizon Console での RDS ホストのモニタリング

Horizon Console で RDS ホストのステータスをモニタリングし、プロパティを表示できます。

手順

- ◆ Horizon Console で、必要なプロパティが表示されるページへ移動します。

プロパティ	アクション
RDS ホスト、ファーム、デスクトップ プール、エージェント バージョン、セッション、ステータス	<ul style="list-style-type: none"> ■ Horizon Console で、[インベントリ] - [マシン] の順に選択します。 ■ [RDS ホスト] タブをクリックします。手動で設定した RDS ホストが表示されます。
DNS 名、タイプ、RDS ファーム、接続の最大数、エージェント バージョン、有効、ステータス	<ul style="list-style-type: none"> ■ Horizon Console で、[インベントリ] - [登録済みのマシン] の順に選択します。 ■ [RDS ホスト] タブをクリックします。手動で設定した RDS ホストのみが表示されます。

表示されるプロパティには、次の意味があります。

プロパティ	説明
RDS ホスト	RDS ホスト名。
ファーム	RDS ホストが属しているファーム。
デスクトップ プール	ファームに関連付けられている公開デスクトップ プール。
エージェント バージョン	RDS ホストで実行される Horizon Agent のバージョン。
セッション	クライアント セッション数。
DNS 名	RDS ホストの DNS 名。
Type	RDS ホストで実行される Windows Server のバージョン。
RDS ファーム	RDS ホストが属しているファーム。
接続の最大数	RDS ホストでサポートされる接続の最大数。
有効	RDS ホストが有効になっているか。
ステータス	RDS ホストの状態。取りうる状態の説明は、 「Horizon Console での RDS ホストのステータス」 を参照してください。

Horizon Console での RDS ホストのステータス

RDS ホストは、初期化された時点からその状態がさまざまに変化します。ベスト プラクティスとして、RDS ホストに対してタスクの実行や操作を行う前と後に、それらのホストが予期される状態にあるかをチェックします。

表 5-5. RDS ホストのステータス

ステータス	説明
スタートアップ	Horizon Agent は RDS ホスト上で起動されましたが、表示プロトコルなどの他の必要なサービスがまだ起動中です。エージェントの起動期間に、プロトコル サービスなどの他のプロセスも起動できます。
無効化が進行中	ホストでセッションがまだ実行されているときに RDS ホストの無効化が進行しています。セッションが終了する時点でステータスは無効に変わります。
無効	RDS ホストの無効化プロセスが完了しています。
検証しています	接続サーバが初めて RDS ホストを認識した後（一般に接続サーバが起動または再起動した後）と、RDS ホスト上の Horizon Agent との初めての正常な通信の前に発生します。通常、この状態は一時的なものです。この状態は、通信の問題を示すエージェントに到達できない状態と同じではありません。
エージェントが無効です	接続サーバが Horizon Agent を無効にすると発生します。この状態では、新しいデスクトップまたはアプリケーション セッションが RDS ホストで起動できません。
エージェントに到達できません	接続サーバは、RDS ホスト上の Horizon Agent と通信を確立できません。
無効な IP	サブネット マスク レジストリ設定は RDS ホストで構成され、構成された範囲内に IP アドレスを持つアクティブ ネットワーク アダプタは存在しません。
エージェントを再起動する必要があります	Horizon 7 コンポーネントがアップグレードされました。RDS ホストを再起動して、アップグレードされたコンポーネントで操作することを Horizon Agent に許可する必要があります。
プロトコル障害	RDP 表示プロトコルが正常に動作していません。RDP が動作しておらず、PCoIP が動作している場合、クライアントは RDP または PCoIP を使用して接続できません。ただし、RDP が動作し、PCoIP が動作していない場合、クライアントは RDP を使用して接続できます。
ドメイン障害	RDS ホストでドメインへの到達の問題が発生しました。ドメイン サーバがアクセス可能でないか、ドメイン認証が失敗しました。
構成エラー	サーバで RDS ロールが有効になっていません。
不明	RDS ホストは不明な状態にあります。
使用可能	RDS ホストは使用可能な状態です。ホストがファーム内に存在し、そのファームが公開デスクトップまたはアプリケーション プールと関連付けられている場合、ホストは公開デスクトップまたはアプリケーションをユーザーに配布するために使用されます。

Horizon Console での公開デスクトップ セッションとアプリケーション セッションの管理

ユーザーが公開デスクトップまたはアプリケーションを起動すると、セッションが作成されます。管理者は、セッションの切断とログオフ、クライアントへのメッセージの送信、仮想マシンのリセットと再起動などを行うことができます。

手順

- 1 Horizon Console で、セッション情報が表示される場所に移動します。

セッションのタイプ	ナビゲーション
リモート デスクトップ セッション	[インベントリ]-[デスクトップ] の順に選択し、プール ID をクリックして [セッション] タブをクリックします。
ユーザーまたはユーザー グループに関連付けられたセッション	<ul style="list-style-type: none"> ■ [ユーザーとグループ] を選択します。 ■ ユーザーの名前またはユーザー グループの名前をクリックします。 ■ [セッション] タブをクリックします。

2 セッションを選択します。

ユーザーにメッセージを送信する場合、複数のセッションを選択できます。その他の操作は、一度に 1 つのセッションでのみ実行できます。

3 切断、ログオフ、メッセージの送信、デスクトップの再起動、仮想マシンのリセットのうち、いずれかの操作を選択します。

オプション	説明
セッションを切断	ユーザーをセッションから切断します。
Logoff Session (セッションのログオフ)	ユーザーをセッションからログオフさせます。保存されていないデータは失われます。
メッセージを送信	Horizon Client にメッセージを送信します。メッセージに、[情報]、[警告]、または [エラー] のラベルを付けることができます。
デスクトップの再起動	仮想デスクトップで再起動操作を実行すると、仮想マシンのオペレーティングシステムのグレースフル再起動が実行されます。
仮想マシンをリセット	仮想マシンでリセット操作を実行すると、オペレーティングシステムのグレースフル再起動は実行されず、仮想マシンのパワーオフとパワーオンが即時実行されます。

4 [OK] をクリックします。

Horizon Console でユーザーとグループに資格を付与する

6

資格を構成して、ユーザーがアクセス可能なリモート デスクトップとアプリケーションを制御することができます。制限付き資格の機能を構成して、ユーザーがリモート デスクトップを選択する際に、接続先の Horizon 接続サーバー インスタンスに基づいてデスクトップ アクセスを制御することもできます。ネットワークの外部にいるユーザー セットがネットワーク内のリモート デスクトップやアプリケーションに接続することを制限することもできます。

注 手動プールまたはリンク クローン デスクトップ プールに資格の追加、削除、確認を行うことはできません。

この章では次のトピックについて説明します。

- [Horizon Console でのデスクトップまたはアプリケーション プールへの資格の追加](#)
- [Horizon Console でのデスクトップまたはアプリケーション プールからの資格の削除](#)
- [デスクトップまたはアプリケーション プールの資格の確認](#)

Horizon Console でのデスクトップまたはアプリケーション プールへの資格の追加

ユーザーがリモート デスクトップまたはアプリケーションにアクセスするには、デスクトップまたはアプリケーション プールを使用するための資格を付与されている必要があります。

開始する前に

デスクトップまたはアプリケーション プールを作成します。

手順

- 1 デスクトップまたはアプリケーション プールを選択します。

オプション	アクション
デスクトップ プールに対する資格の追加	Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択し、デスクトップ プールの名前をクリックします。
アプリケーション プールに対する資格の追加	Horizon Console で、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択し、アプリケーション プールの名前をクリックします。

- 2 [資格] ドロップダウン メニューから [資格を追加] を選択します。

- 3 [追加] をクリックして、1 つ以上の検索基準を選択し、[検索] をクリックして検索基準に基づいてユーザーまたはグループを検索します。

注 混在モードのドメインでは、ドメイン ローカル グループは検索結果から除外されます。ドメインが混在モードで構成されている場合は、ドメイン ローカル グループ内のユーザーに資格を付与することはできません。

- 4 プール内のデスクトップまたはアプリケーションに対する資格を付与するユーザーまたはグループを選択して、[OK] をクリックします。
- 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

Horizon Console でのデスクトップまたはアプリケーション プールからの資格の削除

デスクトップまたはアプリケーション プールから資格を削除して、特定のユーザーまたはグループがデスクトップまたはアプリケーションにアクセスできないようにすることができます。

手順

- 1 デスクトップまたはアプリケーション プールを選択します。

オプション	アクション
デスクトップ プールに対する資格の追加	Horizon Console で、[インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択し、デスクトップ プールの名前をクリックします。
アプリケーション プールに対する資格の追加	Horizon Console で、[インベントリ] - [アプリケーション] の順に選択し、アプリケーション プールの名前をクリックします。

- 2 [資格] ドロップダウン メニューから [資格を削除] を選択します。
- 3 資格を削除するユーザーまたはグループを選択し、[削除] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックして変更を保存します。

デスクトップまたはアプリケーション プールの資格の確認

ユーザーまたはグループが資格を付与されているデスクトップまたはアプリケーション プールを確認できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[ユーザーとグループ] を選択し、ユーザーまたはグループの名前をクリックします。
- 2 [資格] タブをクリックして、ユーザーまたはグループが資格を付与されているデスクトップまたはアプリケーション プールを確認します。

オプション	アクション
ユーザーまたはグループが資格を付与されているデスクトップ プールを一覧表示する	[デスクトップに対する資格] をクリックします。
ユーザーまたはグループが資格を付与されているアプリケーション プールを一覧表示する	[アプリケーションに対する資格] をクリックします。

JMP Integrated Workflow スタート ガイド

7

JMP Integrated Workflow 概念の概要を理解し、JMP Integrated Workflow 機能を使用するために必要な作業をよく理解してください。

この章では次のトピックについて説明します。

- [JMP Integrated Workflow のバージョン情報](#)
- [JMP 統合ワークフローの開始](#)

JMP Integrated Workflow のバージョン情報

VMware Horizon JMP (Just-in-Time Management Platform) の統合ワークフロー機能を使用すると、ユーザーまたはユーザー グループのデスクトップ ワークスペースを 1 つのコンソールで定義し、管理することができます。

デスクトップ ワークスペースを作成するには、VMware Horizon デスクトップ プール、VMware App Volumes AppStacks、VMware User Environment Manager の設定などを含む JMP の割り当てを定義します。JMP 割り当てを送信すると、JMP 自動化エンジンが Horizon 7、App Volumes、User Environment Manager システムと通信を行い、デスクトップの使用資格をユーザーに付与します。

既存の JMP 割り当ては、Horizon Console の [割り当て (JMP)] タブで管理できます。各コンポーネントの割り当ては、それぞれの JMP コンポーネントのコンソールで変更できます。たとえば、JMP 割り当てで定義されたデスクトップ プールを変更するには、Horizon Console で [インベントリ] - [デスクトップ] の順に選択します。

Horizon Console で JMP 割り当てを開くと、JMP 割り当ての各コンポーネントが予測される状態であることが確認されます。違いがあると、影響を受ける領域がコンソールで強調表示されます。現在の状態を受け入れることも、割り当てを変更して必要な状態にし、ユーザーの資格を再度付与することもできます。

VMware Horizon JMP Server をインストールして構成すると、Horizon Console で JMP Integrated Workflow 機能が使用可能になります。詳細については、[「JMP 統合ワークフローの開始」](#)と『VMware Horizon JMP Server のインストールとセットアップ ガイド』を参照してください。

注 App Volumes が VMware Cloud をサポートしていないため、JMP Integrated Workflow 機能は AWS の VMware Cloud[®] をサポートしていません。

JMP 統合ワークフローの開始

JMP Integrated Workflow 機能を使用するには、JMP Server をインストールして設定し、JMP を構成する必要があります。

開始する前に

インストールするすべてのテクノロジー コンポーネントの前提条件とシステム要件を確認します。

手順

- 1 必要であれば、管理者ユーザーおよびグループを Active Directory で設定します。
『Horizon 7 のインストール』ドキュメントの「Active Directory の準備」を参照してください。JMP を構成するには、Active Directory の情報が必要です。
- 2 Microsoft SQL Server を設定し、JMP Server のインストールで使用するログイン認証情報が作成されていることを確認します。詳細については、『VMware Horizon JMP Server のインストールとセットアップ ガイド』ドキュメントの「JMP Server のデータベース要件」を参照してください。
- 3 VMware Horizon 7 バージョン 7.5 をインストールして設定します。
『Horizon 7 のインストール』ドキュメントを参照してください。
- 4 (オプション) VMware App Volumes をインストールして設定します。これにより、アプリケーションをリアルタイムで配信できます。
詳細については、『VMware App Volumes インストール ガイド』ドキュメントを参照してください。
- 5 (オプション) コンテキスト ポリシーを管理するには、VMware User Environment Manager をインストールして設定します。
『VMware User Environment Manager のインストールと設定』ドキュメントを参照してください。
- 6 JMP Server が組織のネットワーク内にある他のサーバと安全に通信できるように、CA 署名付きの SSL 証明書を取得します。
- 7 JMP Integrated Workflow 機能に必要な他のサーバと通信できるように、JMP Server をインストールして JMP Server に SSL 証明書を設定します。
詳細については、『VMware Horizon JMP Server のインストールとセットアップ ガイド』を参照してください。
- 8 初めての場合は、JMP を構成します。詳細については、[「JMP の初期構成」](#)を参照してください。

次に進む前に

前のタスクが正常に終了すると、JMP 割り当ての作成をすぐに始めることができます。詳細については、[「JMP 割り当ての作成」](#)を参照してください。

JMP 設定の管理

JMP Server をインストールしたら、JMP 割り当てを作成したり、JMP Integrated Workflow の機能を使用する前に、JMP の設定で必要な資格情報を設定する必要があります。必要であれば、JMP 設定を編集し、新しい設定情報を追加できます。

この章では次のトピックについて説明します。

- JMP の初期構成
- JMP 設定の管理

JMP の初期構成

JMP 割り当てを作成する前に、Horizon Console を使用して JMP を構成する必要があります。ユーザーまたはグループへのデスクトップワークスペースの割り当てで使用する Active Directory ドメインの認証情報を入力する必要があります。JMP 割り当ての作成で App Volumes Appstack と User Environment Manager 構成共有を使用するときに、認証情報を含めることもできます。

開始する前に

- VMware Horizon JMP Server が正常にインストールされ、その URL があることを確認します。詳細については、『VMware Horizon JMP Server のインストールとセットアップガイド』を参照してください。
- JMP Server で使用する Horizon 7 バージョン 7.5 以降の認証情報を取得します。
- JMP Server で使用する Active Directory 認証情報を取得します。
- JMP 割り当てにアプリケーションを割り当てる場合は、使用する VMware App Volumes Manager インスタンスの URL とアカウントの認証情報があることを確認します。ロード バランサで App Volumes Manager インスタンスを管理する場合は、ロード バランサの URL を取得し、App Volumes Manager 情報を設定するときに使用します。
- VMware User Environment Manager 構成共有を使用する場合は、その UNC パスとアクセスに必要なアカウントの認証情報を取得します。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。

2 JMP Server の情報を入力します。

- a [JMP Server] タブで、[JMP Server の追加] をクリックします。
- b **https://jmp.yourcompany.com** の形式で JMP Server の URL を入力します。
- c [保存] をクリックします。

JMP Server URL が検証されます。**JMP Server が到達不能**というメッセージを受信した場合は、正しい URL を入力していることを確認します。また、JMP Server が正しく構成され、JMP Server が到達可能であることを確認します。

3 JMP Server で使用する Horizon 7 接続サーババージョン 7.5 以降のアカウント情報を入力します。

- a [Horizon 7] タブをクリックします。
- b 自動入力されていない場合は、[接続サーバ URL] の値を入力します。この URL は、Horizon Console が接続している Horizon 7 接続サーバの URL と同じです。
- c Horizon 7 サービス アカウントのユーザー名とパスワードを入力します。
- d [サービス アカウント ドメイン] テキスト ボックスに、作成中の JMP 割り当てで使用する有効な名前を入力して、[Enter] を押します。
- e [保存] をクリックします。

4 JMP 割り当てで使用する Active Directory の情報を入力します。

- a [Active Directory] タブをクリックします。
- b [新規] をクリックします。
- c [NETBIOS 名] テキスト ボックスで、使用可能な NetBIOS ドメイン名のリストから選択します。
[DNS ドメイン名] テキスト ボックスと [コンテキスト] テキスト ボックスにデフォルト値が表示されます。
- d [DNS ドメイン名] テキスト ボックスに追加されたデフォルト値が正しい値かどうか確認します。必要であれば、別の Active Directory の完全修飾ドメイン名を入力します。例：**mycompany.com**
- e [プロトコル] セクションで、Active Directory のプロトコルを選択します。
- f [バインド ユーザー名] と [バインド パスワード] テキスト ボックスに、バインド識別名 (DN) のユーザー アカウントの認証情報を入力します。例：**administrator**
- g デフォルトとは異なる値を使用する場合は、[コンテキスト] テキスト ボックスの値を変更します。
この値は、Active Directory データ検索のルートとして使用されます。
- h (オプション) [詳細プロパティ] をクリックして、ポート番号のデフォルト値を変更します。

デフォルトのポート値は、以前に選択したプロトコルに基づいて設定されます。ポート値を変更することも、テキスト ボックスを空白にすることもできます。

- i [ドメイン コントローラ] テキスト ボックスに、Active Directory トラフィックの処理に使用する 1 つ以上のホスト名または IP アドレスを入力できます。

例: **adserver.mycompany.com**, **10.111.XXX.XXX** テキスト ボックスを空白にすると、[DNS ドメイン名] テキスト ボックスに値が使用されます。

- j [保存] をクリックします。

5 JMP 割り当ての作成で App Volumes Appstack を使用する場合は、使用する App Volumes Manager を構成します。

- a [App Volumes] タブをクリックします。
- b [新規] をクリックします。
- c App Volumes インスタンスに割り当てる名前を [名前] テキスト ボックスに入力します。テキスト ボックスを空白にすると、[App Volumes サーバ URL] テキスト ボックスに入力した値が使用されます。
- d JMP Server ポッドを関連付ける App Volumes Manager に有効な URL を入力します。

重要 使用する App Volumes Manager をロード バランサが管理する場合は、そのロード バランサの URL を入力します。

- e App Volumes Manager またはロード バランサの管理者アカウントの認証情報を入力します。この認証情報は、JMP Server が App Volumes Manager にアクセスするときに使用します。
- f JMP 割り当てに使用される App Volumes Manager サービス アカウントのドメイン名を入力します。
- g (オプション) 1 つ以上の App Volumes Manager を登録する場合は、切り替えボタンを使用して、追加する App Volumes Manager が JMP 割り当ての作成で使用するデフォルトのサーバかどうかを示します。JMP 割り当ての作成時に使用するインスタンスは変更できます。
- h [保存] をクリックします。

6 JMP 割り当てを作成するときに User Environment Manager 構成共有を使用する場合は、JMP 設定にその情報を追加します。

- a [UEM] タブをクリックします。
- b [新規] をクリックします。
- c [ファイル共有の UNC パス] テキスト ボックスに、**\\server-name\UEM-configuration-share-pathname** という形式で値を入力します。例: **\\server\UEMConfig**
- d User Environment Manager 構成共有への接続に使用する User Environment Manager 管理者アカウントの認証情報を入力します。
- e [Active Directory] リストから、User Environment Manager 構成共有で使用するドメイン名を選択します。

注 Active Directory に 1 つの User Environment Manager 構成共有を関連付けることができます。

- f [保存] をクリックします。

次に進む前に

JMP の初期設定が完了すると、JMP 割り当てを作成できます。詳細については、[「JMP 割り当ての作成」](#)を参照してください。

JMP 設定の管理

Horizon Console では、JMP 設定の情報を変更、追加、削除できます。

- 特定の JMP 設定を変更するために、必要な情報を準備する必要があります。
- JMP 設定を変更するには、適切な管理者権限が必要です。

JMP Server の設定の編集

既存の JMP Server 設定を変更するには、Horizon Console を使用します。

開始する前に

- 特定の JMP Server 設定を変更するために、必要な情報を準備する必要があります。
- Horizon Console にログインして JMP Server の設定を変更するには、適切な管理者権限が必要です。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] を選択します。
- 2 [JMP 設定] ペインで、[JMP Server] タブをクリックします。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [JMP Server の URL] に新しい URL を入力します。
- 5 [保存] をクリックします。

新しい JMP Server URL が検証されます。無効な場合、エラー メッセージが表示されます。

Horizon 7 認証情報の編集

既存の Horizon 7 接続サーバの資格情報を変更するには、Horizon Console を使用します。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [Horizon 7] タブをクリックします。
- 3 [認証情報の編集] をクリックします。
- 4 必要であれば、[サービス アカウント ユーザー名] に新しいユーザー名を入力します。
- 5 必要であれば、[サービス アカウント パスワード] に新しいパスワードを入力します。
- 6 必要であれば、[サービス アカウント ドメイン] の値を変更します。
- 7 [保存] をクリックします。

Horizon 接続サーバ URL の編集

既存の JMP 割り当てに別の Horizon Connection Server に関連付けるには、JMP 割り当てに関連付けられている JMP Server の設定で登録済みの Horizon Connection Server URL を変更する必要があります。

Horizon Console には、Horizon Connection Server の情報を変更できるユーザー インターフェイスがありません。JMP の設定で既存の Horizon Connection Server ホスト URL を変更するには、SQL Server Management Studio を使用する必要があります。

開始する前に

- SQL Server Management Studio セッションにログインし、JMP Server に作成した SQL Server データベースにアクセスするには、適切なシステム管理者権限が必要です。
- データベースの変更を行う前に、SQL Server データベースをバックアップします。

手順

- 1 現在、Horizon Console セッションにログインしている場合は、ログアウトします。
- 2 sysadmin (SA) として SQL Server Management Studio セッションにログインするか、SA 権限を持つユーザーアカウントにログインします。
- 3 置換する Horizon Connection Server ホスト URL が別の JMP Server インスタンスに登録されていないことを確認します。

たとえば、置換する Horizon Connection Server ホスト URL が **new-horizon-host.com** の場合、次の SQL ステートメントを使用して、登録されていないことを確認します。

```
SELECT * from xms_services
WHERE xms_services.host = "new-horizon-host.com"
```

- 4 前の SQL ステートメントが結果を返さない場合は、次の手順に進みます。それ以外の場合は、次のステートメントを使用して、既存の Horizon Connection Server ホストの情報を削除します。

```
DELETE from xms_services
WHERE xms_services.host = "new-horizon-host.com"
```

- 5 次のステートメントを使用して、既存の JMP Server の設定を更新します。**new-horizon-server-host.com** は、置換する Horizon Connection Server ホストの URL です。**old-horizon-host.com** は、現在登録されている Horizon Connection Server ホストの URL です。

```
UPDATE xms_service_endpoints
SET host = 'new-horizon-host.com', is_available = 1
WHERE service_id = (SELECT id FROM xms_services WHERE service_type = 'horizon'
AND host = 'old-horizon-host.com')
AND host = 'old-horizon-host.com'
```

```
UPDATE xms_services
SET [name] = 'horizon-https://new-horizon-host.com', host = 'new-horizon-host.com'
WHERE service_type = 'horizon'
AND host = 'old-horizon-host.com'
```

- 新しい Horizon Connection Server URL を使用して Horizon Console にログインして、新しい Horizon Connection Server ホストが古い Horizon Connection Server ホストの JMP 割り当てに関連付けられたことを確認します。

Active Directory ドメインの追加

最初の Active Directory ドメインを設定した後、別のドメインを追加する場合は、Horizon Console を使用します。

手順

- Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- [Active Directory] タブをクリックし、[追加] をクリックします。
- [NETBIOS 名] テキスト ボックスで、使用可能な NetBIOS ドメイン名のリストから選択します。
[DNS ドメイン名] テキスト ボックスと [コンテキスト] テキスト ボックスにデフォルト値が表示されます。
- NETBIOS 名の更新後に、[DNS ドメイン名] テキスト フィールドにデフォルト値が追加されていることを確認します。必要であれば、別の Active Directory の完全修飾ドメイン名を入力します。例：**mycompany.com**
- [プロトコル] セクションで、Active Directory のプロトコルを選択します。
- [バインド ユーザー名] と [バインド パスワード] テキスト フィールドに、バインド識別名 (DN) のユーザー アカウント (Administrator など) の認証情報を入力します。
- デフォルトとは異なる値を使用する場合は、[コンテキスト] テキスト フィールドの値を変更します。
- (オプション) [詳細プロパティ] をクリックして、ポート番号のデフォルト値を変更します。
デフォルトのポート値は、以前に選択したプロトコルに基づいて設定されます。ポート値を変更することも、テキスト フィールドを空白にすることもできます。
- [ドメイン コントローラ] テキスト フィールドに、Active Directory トラフィックの処理に使用する 1 つ以上のホスト名または IP アドレスを入力できます。
- [保存] をクリックします。

Active Directory のテーブルに、新しく追加された Active Directory ドメインの情報が表示されます。

Active Directory ドメイン情報の編集

JMP の設定を最初に構成した後特定の情報が変更されている場合は、Horizon Console を使用して Active Directory ドメインの設定情報を変更します。

手順

- Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- [Active Directory] タブをクリックします。

- 3 Active Directory ドメインのテーブルで 1 つの行を選択し、[編集] をクリックします。
- 4 更新する必要がある Active Directory 情報を変更します。
- 5 [保存] をクリックします。

Active Directory ドメイン情報の削除

既存の Active Directory (AD) ドメインの設定情報を削除するには、Horizon Console を使用します。

登録済みの Active Directory ドメインが既存の JMP 割り当てで使用されていない場合、このドメインの情報を JMP の設定から削除できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [Active Directory] タブをクリックします。
- 3 テーブルで、JMP 設定から削除する Active Directory ドメインの行を選択します。
- 4 削除確認のダイアログが表示されたらメッセージを確認し、[削除] をクリックして、この Active Directory ドメイン情報の削除を確認します。

Active Directory ドメインを使用する JMP 割り当てがない場合、ドメインが削除されます。

Active Directory ドメインが JMP 割り当てで使用されている場合、警告のダイアログ ボックスが表示されます。警告メッセージに、Active Directory ドメインを使用している JMP 割り当てのリストが表示されます。ドメインを JMP 割り当てから削除するか、ドメインを使用している JMP 割り当てを削除した場合にのみ、ドメイン情報を削除できます。

App Volumes 情報の追加

Horizon Console で App Volumes Manager の情報を追加し、JMP 割り当ての作成時に使用できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [App Volumes] タブをクリックし、[追加] をクリックします。
[App Volumes インスタンスの追加] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 App Volumes インスタンスに割り当てる一意の名前を [名前] テキスト ボックスに入力します。テキスト ボックスを空白にすると、[App Volumes サーバ URL] テキスト ボックスに入力した値が使用されます。
- 4 [App Volumes サーバ URL] テキスト ボックスに、JMP Server に関連付ける App Volumes Manager に有効な URL を入力します。追加する App Volumes Manager をロード バランサが管理する場合は、そのロード バランサの URL を入力します。

注 追加した App Volumes Manager が別の SQL データベースに接続している場合、追加した App Volumes Manager の情報が App Volumes タブに表示されます。App Volumes Manager が同じ SQL データベースに接続している場合は、以前に登録した App Volumes Manager の情報のみが App Volumes タブに表示されます。

- 5 JMP Server が App Volumes Manager へのアクセスで使用する App Volumes 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。
- 6 JMP 割り当てに使用される App Volumes サービス アカウントのドメイン名を入力します。
- 7 追加する App Volumes Manager を JMP 割り当ての作成時にデフォルトで使用する App Volumes Manager サーバにするには、切り替えボタンをクリックします。JMP 割り当ての作成時に使用するサーバは変更できます。
切り替えボタンが青色に変わり、[はい] というラベルが表示されます。
- 8 [保存] をクリックします。

App Volumes インスタンス情報の編集

JMP 割り当てで使用される App Volumes インスタンスの情報を変更する場合は、Horizon Console で 情報を変更します。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [App Volumes] タブをクリックして、変更する App Volumes のインスタンスのテーブル行を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
[App Volumes インスタンスの追加] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 4 更新する必要がある App Volumes インスタンス情報を変更します。
- 5 [保存] をクリックします。

App Volumes インスタンス情報の削除

App Volumes インスタンスの既存の設定を削除する場合は、Horizon Console を使用します。

登録済みの App Volumes インスタンスが JMP 割り当てで使用されていない場合、このインスタンスの情報を JMP の設定から削除できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [App Volumes] タブをクリックします。
- 3 JMP の設定から削除する App Volumes インスタンス情報の行を選択します。
- 4 [削除] をクリックして、この App Volumes インスタンス情報の削除を確認します。

App Volumes インスタンスを使用する JMP 割り当てがない場合、インスタンスが削除されます。

App Volumes インスタンスが JMP 割り当てで使用されている場合は、警告のダイアログ ボックスが表示されます。警告メッセージに、App Volumes インスタンスを使用している JMP 割り当てのリストが表示されます。App Volumes インスタンスを JMP 割り当てから削除するか、インスタンスを使用している JMP 割り当てを削除した場合にのみ、インスタンス情報を削除できます。

User Environment Manager 構成共有情報の追加

最初の User Environment Manager 構成共有情報を設定した後に別の共有情報を追加する場合は、Horizon Console を使用します。

Active Directory ドメインごとに 1 つの User Environment Manager 構成共有を追加できます。追加する構成共有に、JMP Server 設定の構成共有と同じ IP アドレスまたは DNS アドレスを設定することはできません。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [UEM] タブをクリックして、[追加] をクリックします。
[UEM ファイル共有の追加] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 [ファイル共有の UNC パス] テキスト ボックスに、`\\server-name\UEM-configuration-share-pathname` という形式で値を入力します。
たとえば、構成共有の場所が `\\<IP-address>\uemshare\config\general\FlexRepository\..` の場合、[ファイル共有の UNC パス] テキスト ボックスに `\\<IP-address>\uemshare\config` を入力する必要があります。
- 4 User Environment Manager 構成ファイル共有への接続で使用する User Environment Manager のユーザー名とパスワードを入力します。
- 5 [Active Directory] リストから、User Environment Manager 構成ファイル共有を使用するドメイン名を選択します。

注 Active Directory に 1 つの User Environment Manager 構成ファイル共有を関連付けることができます。

- 6 [保存] をクリックします。

User Environment Manager 構成ファイル共有の情報が JMP 設定に追加され、[UEM] タブのテーブルに新しい行が追加されます。

User Environment Manager 構成ファイルの共有情報の編集

JMP 割り当てで使用されている User Environment Manager 構成ファイル共有の情報を変更するには、Horizon Console を使用します。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [UEM] タブをクリックして、既存の情報が保存されているテーブルで、変更する User Environment Manager 構成ファイル共有の行を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
[UEM ファイル共有の編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

- 4 更新する必要がある User Environment Manager 構成ファイル共有の情報を変更します。
- 5 [保存] をクリックします。

User Environment Manager 構成共有情報の削除

User Environment Manager 構成共有の既存の設定を削除する場合は、Horizon Console を使用します。

登録済みの User Environment Manager 構成共有が JMP 割り当てで使用されていない場合、この構成共有を JMP 設定から削除できます。

手順

- 1 Horizon Console で、[設定 (JMP)] をクリックします。
- 2 [UEM] タブをクリックします。
- 3 JMP の設定から削除する User Environment Manager 構成共有情報の行を選択します。
- 4 [削除] をクリックして、この User Environment Manager 構成共有情報の削除を確認します。

User Environment Manager 構成共有を使用する JMP 割り当てがない場合、構成共有が削除されます。

User Environment Manager 構成共有が JMP 割り当てで使用されている場合は、警告のダイアログ ボックスが表示されます。警告メッセージに、User Environment Manager 構成共有を使用している JMP 割り当てのリストが表示されます。User Environment Manager 構成共有を JMP 割り当てから削除するか、構成共有を使用している JMP 割り当てを削除した場合にのみ、その構成共有情報を削除できます。

JMP 割り当ての管理

JMP Server をインストールして JMP の構成を行うと、JMP Integrated Workflow 機能を使用して JMP 割り当ての作成、変更、複製、削除を行うことができます。

まず、JMP 割り当ての作成を開始する前に、JMP Server をインストールして JMP の構成を行う必要があります。詳細については、『VMware Horizon JMP Server のインストールとセットアップ ガイド』および「[JMP の初期構成](#)」を参照してください。

JMP 割り当てを作成、編集、複製または削除する前に、次の前提条件が満たされていることを確認します。

- JMP の設定で登録されている Horizon 7 インスタンスが起動し、実行されていることを確認します。
- 1 つ以上の Active Directory ドメインが JMP の設定で登録されていることを確認します。
- JMP の設定で登録されている App Volumes インスタンスが起動し、実行されていることを確認します。
- JMP 設定で定義されている User Environment Manager 構成共有が起動し、実行されていることを確認します。

JMP 割り当ての作成、編集、複製または削除を行っているときに、「アクションが正常に完了しませんでした」というメッセージが表示される場合があります。たとえば、基盤となる JMP テクノロジー コンポーネントの 1 つに接続を試みたときに問題が発生し、割り当ての検証に失敗する場合があります。JMP 割り当てのサマリ画面で、次のオプションのいずれかを選択し、問題を修正を行います。

- 問題を手動で修正するには、[編集] をクリックします。
- 現在の JMP 割り当てで見つかった問題を JMP Server が修正するように設定するには、[修復] をクリックします。
- JMP 割り当てを完全に削除するには、[強制的に削除] をクリックします。

この章では次のトピックについて説明します。

- [JMP 割り当ての作成](#)
- [JMP 割り当ての編集](#)
- [JMP 割り当ての複製](#)
- [JMP 割り当ての削除](#)

JMP 割り当ての作成

Horizon Console では、ユーザーまたはユーザー グループのデスクトップワークスペースの作成で使用する JMP 割り当てを作成できます。

JMP 割り当てを定義するには、Horizon デスクトップ プール、App Volumes Appstack、User Environment Manager の設定を選択します。

開始する前に

第 9 章「JMP 割り当ての管理」に記載されている前提条件を満たしていることを確認します。

手順

- 1 Horizon Console で、[割り当て (JMP)] をクリックします。
- 2 [新しい割り当て] ウィザードの [ユーザー] タブで、[Active Directory] ドロップダウン リストの横に 2、3 文字入力し、新しい JMP 割り当てに追加するユーザーまたはユーザー グループを選択します。
選択した項目が [選択したユーザー/グループ] セクションに追加されます。
- 3 [次へ] をクリックします。
- 4 [デスクトップ] タブで、JMP 割り当てに追加するデスクトップ プールを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 [アプリケーション] タブで、JMP 割り当てに追加するアプリケーション名の横にあるチェック ボックスをクリックします。選択が終了したら、[次へ] をクリックします。
- 6 [ユーザー環境] タブで、使用可能なユーザー環境設定で JMP 割り当てを設定するかどうかを決めます。
 - [UEM の設定を無効にしますか?] を [いいえ] に設定して [スキップ] をクリックすると、User Environment Manager の割り当てファイルが User Environment Manager の構成共有に保存されません。User Environment Manager のすべての設定が、現在作成している JMP 割り当てを使用するユーザーの仮想デスクトップワークスペースに適用されます。
 - [UEM の設定を無効にしますか?] を [いいえ] に設定した場合は、作成している JMP 割り当てに適用するユーザー環境設定を選択します。[次へ] をクリックすると、選択したユーザー環境設定で User Environment Manager の割り当てファイルが作成されます。選択した設定が、現在作成している JMP 割り当てを使用するユーザーの仮想デスクトップワークスペースに適用されます。
 - [UEM の設定を無効にしますか?] を [はい] に設定すると、使用可能なユーザー環境設定のリストがビューから消えます。[次へ] をクリックすると、空の割り当てファイルが、User Environment Manager の構成共有に書き込まれます。User Environment Manager の設定を無効にすると、現在作成している JMP 割り当てを使用するユーザーの仮想デスクトップワークスペースにユーザー環境設定が適用されません。
- 7 [定義] タブで、JMP 割り当てのデフォルト名をそのまま使用するか、別の名前置き換えます。また、必要に応じて説明を追加します。
- 8 [AppStack の接続] ドロップダウン リストで、AppStack が JMP 割り当てに接続するタイミングを選択し、[次へ] をクリックします。
- 9 [サマリ] タブで、新しい割り当ての詳細を確認します。問題がなければ、[送信] をクリックします。変更を行う必要がある場合は、[戻る] をクリックして調整します。

新しい JMP 割り当てがキューに入り、JMP データベースへの保存待ち状態になります。また、[JMP 割り当て] ペインの割り当てリストに追加されます。JMP データベースに正常に追加されると、ステータスが保留状態から変わります。JMP 割り当ては、JMP 割り当てリストで選択可能になり、編集、複製、削除を行うことができます。

JMP 割り当ての編集

JMP 割り当ての定義に使用されたコンポーネントが変更されると、その割り当ての変更が必要になる場合があります。JMP 割り当てを変更するには、Horizon Console を使用します。

開始する前に

- 第 9 章「JMP 割り当ての管理」に記載されている前提条件を満たしていることを確認します。
- 保留状態の JMP 割り当ては編集できません。

手順

- 1 Horizon Console で、[割り当て (JMP)] をクリックします。
- 2 チェック ボックスをクリックするか、リストで JMP 割り当ての名前をクリックして、編集する JMP 割り当てを選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [割り当ての編集] ウィザードで、現在の設定を変更します。

編集を中止するには、[キャンセル] をクリックします。

- a 現在選択されているユーザーまたはグループを削除するには、削除アイコン ([X]) をクリックします。
- b [次へ] をクリックします。
- c [デスクトップ] タブで、JMP 割り当てに追加するデスクトップ プールを選択します。[次へ] をクリックします。
- d [アプリケーション] タブで、JMP 割り当てに追加するアプリケーションを選択するか、すでに選択されているアプリケーションの選択を解除します。[次へ] をクリックします。
- e [ユーザー環境] タブで、使用可能なユーザー環境設定で JMP 割り当てを設定するかどうかを決めます。
 - [UEM の設定を無効にしますか?] を [いいえ] に設定して [スキップ] をクリックすると、User Environment Manager の割り当てファイルが User Environment Manager の構成共有に保存されません。User Environment Manager のすべての設定が、現在編集している JMP 割り当てを使用するユーザーの仮想デスクトップワークスペースに適用されます。
 - [UEM の設定を無効にしますか?] を [いいえ] に設定した場合は、作成している JMP 割り当てに適用するユーザー環境設定を選択します。[次へ] をクリックすると、選択したユーザー環境設定で User Environment Manager の割り当てファイルが作成されます。選択した設定が、現在編集している JMP 割り当てを使用するユーザーの仮想デスクトップワークスペースに適用されます。
 - [UEM の設定を無効にしますか?] を [はい] に設定すると、使用可能なユーザー環境設定のリストがビューから消えます。[次へ] をクリックすると、空の割り当てファイルが、User Environment Manager の構成共有に書き込まれます。User Environment Manager の設定を無効にすると、現在編集している JMP 割り当てを使用するユーザーの仮想デスクトップワークスペースにユーザー環境設定が適用されません。

- f 必要であれば、[定義] タブで、[名前]、[説明]、JMP 割り当てに AppStack を接続するタイミングを変更します。
- g [次へ] をクリックします。
- h 変更内容を確認して [送信] をクリックし、変更を保存します。

成功すると、変更が保存されます。問題が検出されると、追加情報と実行可能なアクションが表示されます。

JMP 割り当ての複製

作成する JMP 割り当てに類似した割り当てを複製すると、JMP 割り当てをより簡単に作成できます。

開始する前に

- [第 9 章「JMP 割り当ての管理」](#)に記載されている前提条件を満たしていることを確認します。
- 保留またはエラー状態の JMP 割り当ては複製できません。

手順

- 1 Horizon Console で、[割り当て (JMP)] を選択します。
- 2 複製する JMP 割り当てを選択して、[複製] をクリックします。
- 3 [新しい割り当て] ウィザードを使用して、複製された JMP 割り当てを必要に応じて変更します。
 - a 新しいユーザーまたはグループを選択するか、現在選択されているユーザーまたはグループを削除します。
[次へ] をクリックします。
 - b [デスクトップ] ペインで、新しいデスクトップ プールを選択します。あるいは、複製された JMP 割り当てに含まれているデスクトップ プールを削除します。
[次へ] をクリックします。
 - c すでに選択されているアプリケーションの選択を解除し、新しい JMP 割り当てに追加するアプリケーションを選択します。
[次へ] をクリックします。
 - d [ユーザー環境] ペインで、新しい JMP 割り当てに適用する User Environment Manager の設定を選択します。
[次へ] をクリックします。
 - e 必要であれば、[定義名] でデフォルトの名前を置き換えます。説明を追加し、AppStack に新しい JMP 割り当てを関連付けるタイミングを指定します。
 - f [次へ] をクリックして、新しい JMP 割り当てのサマリを確認します。
 - g 問題がなければ、[送信] をクリックします。それ以外の場合は、[戻る] をクリックして、修正を行います。

新しい JMP 割り当てが検証されます。検証に時間がかかる場合があります。検証に成功すると、新しく作成した JMP 割り当てが [JMP 割り当て] ペインのリストに追加されます。名前の上にマウス ポイントを置くと、保留状態であることが通知されます。この状態は、JMP データベースに正常に保存するまで続きます。JMP 割り当てが保留状態でなくなると、割り当てに別のアクションを実行できます。

JMP 割り当ての削除

Horizon Console を使用して、JMP 割り当てを削除します。

JMP 割り当てを削除すると、Horizon プールの資格、AppStack の割り当て、JMP 割り当てに関連付けられている UEM 資格が削除されます。ただし、Horizon プールの資格や JMP 割り当てで使用されている AppStack 割り当てが JMP 割り当ての作成前から存在していた場合、これらの資格や割り当ては削除されません。JMP 割り当てを削除すると、この割り当てはユーザーまたはデスクトップに適用されなくなります。

開始する前に

- [第 9 章「JMP 割り当ての管理」](#)に記載されている前提条件を満たしていることを確認します。
- 保留状態の JMP 割り当ては削除できません。

手順

- 1 Horizon Console で、[割り当て (JMP)] をクリックします。
- 2 [JMP 割り当て] ペインで、1 つ以上の JMP 割り当てを選択して [削除] をクリックします。
- 3 確認のダイアログ ボックスで、[削除] をクリックし、割り当てを完全に削除することを確認します。

成功すると、Horizon プールの資格が JMP データベースと [JMP 割り当て] ペインのリストから削除されます。

削除操作の一部が失敗すると、JMP 割り当ては削除されません。ステータス インジケータをクリックすると、削除操作が失敗した原因の詳細が表示されます。

Horizon Console での Horizon Help Desk Tool の使用

10

Horizon Help Desk Tool は、Horizon 7 ユーザー セッションのステータスを取得し、トラブルシューティングとメンテナンス操作を行う Web アプリケーションです。

Horizon Help Desk Tool では、トラブルシューティングを行うためにユーザー セッションを確認し、デスクトップの再起動やリセットなどのデスクトップ メンテナンス操作を実行できます。

Horizon Help Desk Tool を設定するには、次の要件を満たす必要があります。

- Horizon 7 の Horizon Enterprise Edition ライセンスまたは Horizon Apps Advanced Edition ライセンス正しいライセンスがあることを確認するには、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。
- Horizon 7 コンポーネントの情報を保存するイベント データベースイベント データベースの設定の詳細については、『Horizon 7 のインストール』ドキュメントを参照してください。
- Horizon Help Desk Tool にログインするヘルプデスク管理者ロールまたはヘルプデスク管理者（読み取り専用）ロールこれらのロールの詳細については、『Horizon 7 の管理』ドキュメントを参照してください。
- ログイン セグメントを表示するには、各接続サーバインスタンスでタイミング プロファイラを有効にします。
各接続サーバインスタンスでタイミング プロファイラを有効にするには、次の **vdmadmin** コマンドを使用します。

```
vdmadmin -I -timingProfiler -enable
```

管理ポートを使用している接続サーバインスタンスでタイミング プロファイラを有効にするには、次の **vdmadmin** コマンドを使用します。

```
vdmadmin -I -timingProfiler -enable -server {ip/server}
```

この章では次のトピックについて説明します。

- [Horizon Console で Horizon Help Desk Tool を開始します。](#)
- [Horizon Help Desk Tool でのユーザーのトラブルシューティング](#)
- [Horizon Help Desk Tool のセッションの詳細](#)
- [Horizon Help Desk Tool のセッション プロセス](#)
- [Horizon Help Desk Tool のアプリケーション ステータス](#)
- [Horizon Help Desk Tool でのデスクトップまたはアプリケーション セッションのトラブルシューティング](#)

Horizon Console で Horizon Help Desk Tool を開始します。

Horizon Help Desk Tool は、Horizon Console に統合されています。Horizon Help Desk Tool のトラブルシューティングを行うユーザーを検索できます。

手順

- 1 Horizon Console で、ユーザーの検索フィールドにユーザー名を入力します。

Horizon Console では、検索結果にユーザーのリストが表示されます。最大で 100 個までの検索結果が返されます。

- 2 ユーザー名を選択します。

ユーザー カードにユーザー情報が表示されます。

次に進む前に

問題のトラブルシューティングを行うには、ユーザー カードで関連するタブをクリックします。

Horizon Help Desk Tool でのユーザーのトラブルシューティング

Horizon Help Desk Tool のユーザー カードを使用すると、ユーザーの基本情報を確認できます。ユーザー カードのタブをクリックすると、特定のコンポーネントの詳細が表示されます。

ユーザーの詳細が表に表示されることがあります。これらのユーザーの詳細は、表の列を使って並べ替えることができます。

- 列を昇順で並べ替えるには、列を 1 回クリックします。
- 列を降順で並べ替えるには、列を 2 回クリックします。
- 列を並べ替えない場合は、列を 3 回クリックします。

ユーザーの基本情報

ユーザーのユーザー名、電話番号、メールアドレス、ユーザーの接続状態などのユーザーの基本情報が表示されます。ユーザーにデスクトップまたはアプリケーション セッションがある場合、ユーザーは接続状態になります。ユーザーにデスクトップまたはアプリケーション セッションがない場合、ユーザーは切断状態になります。

メールアドレスをクリックすると、ユーザーにメッセージを送信できます。

また、電話番号をクリックすると、Skype for Business セッションが開きます。ユーザーとともにトラブルシューティングを行うことができます。

注 Linux デスクトップ ユーザーには、Skype for Business の情報は表示されません。

セッション

[セッション] タブには、ユーザーが接続しているデスクトップまたはアプリケーションの情報が表示されます。

[フィルタ] テキスト ボックスを使用すると、デスクトップまたはアプリケーション セッションをフィルタリングできます。

注 [セッション] タブには、Microsoft RDP 表示プロトコルを使用するセッションや、vSphere Client または ESXi からの仮想マシンにアクセスするセッションの情報は表示されません。

[セッション] タブには、次の情報が表示されます。

表 10-1. [セッション] タブ

オプション	説明
状態	<p>デスクトップまたはアプリケーション セッションの状態が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ セッションが接続されている場合、緑色が表示されます。 ■ セッションがローカル セッションか、ローカルのポッドで実行されているセッションの場合、L が表示されます。
コンピュータ名	<p>デスクトップまたはアプリケーション セッションの名前。名前をクリックすると、カードにセッション情報が表示されます。</p> <p>セッションカードでタブをクリックすると、次の追加情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [詳細] タブには、仮想マシン、CPU またはメモリ使用量などのユーザー情報が表示されます。 ■ [プロセス] タブには、CPU およびメモリ関連のプロセスに関する情報が表示されます。 ■ [アプリケーション] タブには、実行中のアプリケーションの詳細が表示されます。 <p>注 Linux デスクトップセッションでは、[アプリケーション] タブにアクセスできません。</p>
プロトコル	デスクトップまたはアプリケーション セッションの表示プロトコル。
Type	デスクトップの種類（公開デスクトップ、仮想マシン デスクトップまたはアプリケーション）が表示されます。
接続時間	セッションが接続サーバに接続した時間。
セッションの期間	セッションが接続サーバに接続していた期間。

デスクトップ

[デスクトップ] タブには、ユーザーに使用資格が付与されている公開デスクトップまたは仮想デスクトップの情報が表示されます。

表 10-2. デスクトップ

オプション	説明
状態	<p>デスクトップ セッションの状態が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ セッションが接続されている場合、緑色が表示されます。
デスクトップ プール名	セッションのデスクトップ プールの名前。Linux デスクトップセッションのデスクトップ プールとして Linux が表示されます。

表 10-2. デスクトップ (続き)

オプション	説明
デスクトップ タイプ	<p>デスクトップの種類 (公開デスクトップまたは仮想マシン デスクトップ) が表示されます。</p> <p>注 セッションでポッド フェデレーションの別のポッド実行されている場合、情報は表示されません。</p>
Type	<p>デスクトップの資格のタイプが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカル資格の場合には、Local が表示されます。
vCenter	<p>vCenter Server の仮想マシンの名前が表示されます。</p> <p>注 セッションでポッド フェデレーションの別のポッド実行されている場合、情報は表示されません。</p>
デフォルトのプロトコル	<p>デスクトップまたはアプリケーション セッションのデフォルトの表示プロトコル。</p>

アプリケーション

[アプリケーション] タブには、ユーザーに使用資格が付与されている公開アプリケーションの情報が表示されます。

注 Linux デスクトップ セッションでは、[アプリケーション] タブにアクセスできません。

表 10-3. アプリケーション

オプション	説明
状態	<p>アプリケーション セッションの状態が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> セッションが接続されている場合、緑色が表示されます。
アプリケーション	<p>アプリケーション プールの公開アプリケーションの名前が表示されます。</p>
ファーム	<p>セッションが接続している RDS ホストを含むファームの名前。</p> <p>注 グローバル アプリケーション資格の場合、この列にはグローバル アプリケーション資格のファーム数が表示されます。</p>
Type	<p>アプリケーションに対する資格のタイプが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカル資格の場合には、Local が表示されます。
パブリッシャ	<p>公開アプリケーションのソフトウェア メーカー名。</p>

アクティビティ

[アクティビティ] タブには、ユーザーのアクティビティに関するイベント ログ情報が表示されます。過去 12 時間、過去 30 日間などの期間や管理者の名前でアクティビティをフィルタリングできます。[ヘルプデスク イベントのみ] をクリックすると、Horizon Help Desk Tool アクティビティでのみフィルタリングできます。[更新] アイコンをクリックして、イベント ログを更新します。[エクスポート] アイコンをクリックして、イベント ログをファイルにエクスポートします。

注 クラウド ポッド アーキテクチャ環境のユーザーのイベント ログ情報は表示されません。

表 10-4. アクティビティ

オプション	説明
[時間]	時間範囲を選択します。デフォルトは、過去 12 時間です。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [過去 12 時間] ■ [過去 24 時間] ■ [過去 7 日間] ■ [過去 30 日間] ■ [すべて]
[管理者]	管理者ユーザーの名前。
[メッセージ]	ユーザーまたは管理者が実行したアクティビティに固有のユーザーまたは管理者のメッセージが表示されます。
[リソース名]	アクティビティの実行対象のデスクトップ プールまたは仮想マシン名に関する情報が表示されます。

Horizon Help Desk Tool のセッションの詳細

[セッション] タブで [コンピュータ名] オプションのユーザー名をクリックすると、セッションの詳細が [詳細] タブに表示されます。Horizon Client、仮想または公開デスクトップ、CPU とメモリの詳細を確認できます。

Horizon Client

Horizon Client のタイプに応じて情報が表示されます。ユーザー名、Horizon Client のバージョン、クライアントマシンの IP アドレス、クライアント マシンのオペレーティングシステムなどの詳細が表示されます。

注 Horizon Agent をアップグレードした場合、Horizon Client も最新バージョンにアップグレードする必要があります。それ以外の場合、Horizon Client のバージョンは表示されません。Horizon Client のアップグレードの詳細については、『Horizon 7 のアップグレード』ドキュメントを参照してください。

仮想マシン

仮想デスクトップまたは公開デスクトップに関する情報が表示されます。

表 10-5. 仮想マシンの詳細

オプション	説明
[コンピュータ名]	デスクトップまたはアプリケーション セッションの名前。
[エージェント バージョン]	Horizon Agent のバージョン。
[OS バージョン]	オペレーティングシステムのバージョン。
[接続サーバ]	セッションが接続している接続サーバ。
[プール]	デスクトップまたはアプリケーション プールの名前。Linux デスクトップ プールの Linux を表示します。
[vCenter Server]	vCenter Server の IP アドレス。

表 10-5. 仮想マシンの詳細 (続き)

オプション	説明
[セッション状態]	<p>デスクトップまたはアプリケーション セッションの状態。セッションの状態は、アイドル、アクティブまたは切断です。ユーザーが 1 分間非アクティブ状態になると、セッションのステータスがアイドル状態になります。アイドル状態の場合、ステータス アイコンは緑の輪郭で表示されます。アクティブ状態の場合は緑色、切断状態は灰色で表示されます。</p> <p>注 Linux デスクトップセッションの場合、アイドル状態のステータスは表示されません。</p>
[セッションの期間]	セッションが接続サーバと接続していた期間。
[状態の継続期間]	セッションが同じ状態を継続した時間。
[ログイン時間]	セッションにログインしたユーザーのログイン時間。
[ログインの継続期間]	ユーザーがセッションにログインしていた期間。
[ゲートウェイ/プロキシ名]	セキュリティ サーバ、Unified Access Gateway アプライアンスまたはロード バランサの名前。この情報の表示には、セッション接続後、30 ～ 60 秒ほどかかる場合があります。
[ゲートウェイ/プロキシ IP アドレス]	セキュリティ サーバ、Unified Access Gateway アプライアンスまたはロード バランサの IP アドレス。この情報の表示には、セッション接続後、30 ～ 60 秒ほどかかる場合があります。
[ファーム]	公開デスクトップまたはアプリケーション セッションの RDS ホストのファーム。

ユーザー操作性の評価基準

PCoIP または VMware Blast 表示プロトコルを使用する仮想または公開デスクトップ セッションのパフォーマンスの詳細が表示されます。これらのパフォーマンスの詳細を表示するには、[詳細] をクリックします。これらの詳細を更新するには、更新アイコンをクリックします。

表 10-6. PCoIP 表示プロトコルの詳細

オプション	説明
[Tx バンド幅]	PCoIP セッションの転送バンド幅 (キロビット/秒単位)
[フレーム レート]	PCoIP セッションのフレーム率 (1 秒あたりのフレーム数)
[パケット ロス]	PCoIP セッションのパケット ロス率。
[Skype の状態]	<p>PCoIP セッションでの Skype for Business のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 最適化済み ■ フォールバック ■ 最適化済み (バージョン不一致) ■ フォールバック (バージョン不一致) ■ 接続中 ■ 切断されました ■ 未定義 <p>Linux デスクトップセッションの場合、このオプションは N/A と表示されます。</p>

表 10-7. Blast 表示プロトコルの詳細

オプション	説明
[フレーム レート]	Blast セッションのフレーム率 (1 秒あたりのフレーム数)。
[Skype の状態]	<p>Blast セッションでの Skype for Business のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 最適化済み ■ フォールバック ■ 最適化済み (バージョン不一致) ■ フォールバック (バージョン不一致) ■ 接続中 ■ 切断されました ■ 未定義 <p>Linux デスクトップセッションの場合、このオプションは N/A と表示されます。</p>
[Blast セッション カウンタ]	<ul style="list-style-type: none"> ■ [推定バンド幅 (アップリンク)]。アップリンク シグナルの推定バンド幅。 ■ [パケット損失 (アップリンク)]。アップリンク シグナルのパケット損失率。
[Blast イメージング カウンタ]	<ul style="list-style-type: none"> ■ [送信バイト]。Blast セッションで転送されたイメージング データの合計バイト数。 ■ [受信バイト]。Blast セッションで受信したイメージング データの合計バイト数。
[Blast オーディオ カウンタ]	<ul style="list-style-type: none"> ■ [送信バイト]。Blast セッションで転送されたオーディオ データの合計バイト数。 ■ [受信バイト]。Blast セッションで受信したオーディオ データの合計バイト数。
[Blast CDR カウンタ]	<ul style="list-style-type: none"> ■ [送信バイト]。Blast セッションで転送されたクライアント ドライブ リダイレクトの合計バイト数。 ■ [受信バイト]。Blast セッションで受信したクライアント ドライブ リダイレクトの合計バイト数。

CPU とメモリ使用量、ネットワークとディスクのパフォーマンス

仮想/公開デスクトップまたはアプリケーションの CPU とメモリの使用量や、PCoIP または Blast 表示プロトコルのネットワークまたはディスク パフォーマンスがグラフで表示されます。

注 Horizon Agent デスクトップの起動または再起動後すぐに、パフォーマンス グラフにタイムラインが表示されない場合があります。数分後にタイムラインが表示されます。

表 10-8. CPU 使用率

オプション	説明
[セッションの CPU]	現在のセッションの CPU 使用率。
[ホストの CPU]	セッションが割り当てられている仮想マシンの CPU 使用率。

表 10-9. メモリ使用率

オプション	説明
[セッションのメモリ]	現在のセッションのメモリ使用量。
[ホストのメモリ]	セッションが割り当てられている仮想マシンのメモリ使用量。

表 10-10. ネットワークのパフォーマンス

オプション	説明
[遅延]	<p>PCoIP または Blast セッションの遅延がグラフで表示されます。</p> <p>Blast 表示プロトコルの場合、遅延時間はラウンドトリップ時間（ミリ秒単位）です。この遅延時間を追跡するパフォーマンス カウンタは、[VMware Blast セッション カウンタ] - [RTT] です。</p> <p>PCoIP 表示プロトコルの場合、遅延時間はラウンドトリップ遅延時間（ミリ秒単位）です。この遅延時間を追跡するパフォーマンス カウンタは、[PCoIP セッション ネットワーク統計情報] - [ラウンドトリップ遅延時間] です。</p>

表 10-11. ディスクのパフォーマンス

オプション	説明
[読み取り]	1 秒あたりの読み取りの入出力 (I/O) 操作の数。
[書き込み]	1 秒あたりの書き込み I/O 操作の数。
[ディスクの遅延時間]	ディスク遅延のグラフが表示されます。ディスク遅延は、Windows パフォーマンス カウンタから取得した入出力操作/秒 (IOPS) データの時間（ミリ秒）時間です。
[平均読み取り]	1 秒あたりのランダム読み取り I/O 操作の平均数。
[平均書き込み]	1 秒あたりのランダム書き込み I/O 操作の平均数。
[平均の遅延時間]	Windows パフォーマンス カウンタから取得した IOPS データの平均遅延時間（ミリ秒）。

セッション ログイン セグメント

ログインの継続時間とログイン時に作成されたセグメントが表示されます。

表 10-12. セッション ログイン セグメント

オプション	説明
[ログインの継続期間]	ユーザーがデスクトップまたはアプリケーション プールをクリックしてから Windows エクスプローラが起動するまでの時間。
[セッション ログイン時間]	ユーザーがセッションにログインしていた期間。
[ログイン セグメント]	<p>ログイン時に作成されたセグメントが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [仲介]。接続サーバがセッションの接続または再接続を処理する時間の合計。ユーザーがデスクトップ プールをクリックしてからトンネル接続が確立するまでの時間で計算されます。ユーザー認証、マシンの選択、トンネル接続を確立に必要なマシンの準備など、接続サーバのタスクの所要時間が含まれます。 ■ [GPO のロード]Windows グループ ポリシーの処理時間の合計。グローバル ポリシーが設定されていない場合、0 が表示されます。 ■ [プロファイルのロード]Windows ユーザー プロファイルの処理時間の合計。 ■ [インタラクティブ]。Horizon Agent がセッションの接続または再接続を処理する時間の合計。PCoIP または Blast Extreme がトンネル接続を使用してから Windows エクスプローラが起動するまでの時間で計算されます。 ■ [プロトコルの接続]。ログインで PCoIP または Blast プロトコル接続の完了にかかった合計時間。 ■ [ログイン スクリプト]。ログイン スクリプトが開始してから完了するまでの合計時間。 ■ [認証]。接続サーバがセッションの認証にかかった合計時間。 ■ [仮想マシンの開始]。仮想マシンの起動にかかった合計時間。この時間には、オペレーティングシステムの起動、サスペンド状態のマシンの再開、Horizon Agent が接続準備完了通知の送信にかかる時間が含まれます。

トラブルシューティングでログイン セグメントの情報を使用する場合には、次のガイドラインに従ってください。

- セッションが新しい仮想デスクトップセッションの場合、すべてのログイン セグメントが表示されます。グローバル ポリシーが設定されていない場合、[GPO のロード] のログイン セグメントの時間は 0 になります。
- 切断されたセッションから仮想デスクトップセッションが再接続された場合には、[ログインの継続期間]、[インタラクティブ]、[仲介] のログイン セグメントが表示されます。
- セッションが公開デスクトップセッションの場合には、[ログインの継続期間]、[GPO ロード]、[プロファイルのロード] のログイン セグメントが表示されます。新しいセッションの場合には、[GPO ロード] と [プロファイルのロード] のログイン セグメントが表示されます。これらのログイン セグメントが新しいセッションで表示されない場合には、RDS ホストを再起動する必要があります。
- セッションが Linux デスクトップセッションの場合、[GPO のロード] と [プロファイルのロード] のセグメントは表示されません。
- デスクトップセッションに接続した直後は、ログイン データが使用できない場合があります。数分後にログイン データが表示されます。

Horizon Help Desk Tool のセッション プロセス

[セッション] タブで [コンピュータ名] オプションのユーザー名をクリックすると、セッション プロセスが [プロセス] タブに表示されます。

プロセス

セッションごとに、CPU やメモリ関連プロセスの詳細情報を表示できます。たとえば、セッションの CPU やメモリ使用率が異常に高い場合、[プロセス] タブでプロセスの詳細を確認できます。

表 10-13. セッション プロセスの詳細

オプション	説明
プロセス名	セッション プロセスの名前。たとえば、chrome.exe。
CPU	プロセスの CPU 使用率 (%)。
メモリ	プロセスのメモリ使用量 (KB)。
ディスク	メモリのディスク IOPS。次の式で計算されます。 (現在の時刻の I/O バイト数の合計) - (現在時刻より 1 秒前の I/O バイト数の合計)。 タスク マネージャに正の値が表示されている場合、この計算結果は 1 秒あたり 0 KB と表示されます。
ユーザー名	プロセスを所有するユーザーの名前。
ホストの CPU	セッションが割り当てられている仮想マシンの CPU 使用率。
ホストのメモリ	セッションが割り当てられている仮想マシンのメモリ使用量。
プロセス	仮想マシン内のプロセス数
更新	更新アイコンをクリックすると、プロセスのリストが更新されます。
プロセスの終了	実行中のプロセスを終了します。 <u>注</u> プロセスを終了するには、ヘルプデスク管理者ロールが必要です。 プロセスを終了するには、プロセスを選択して [プロセスの終了] ボタンをクリックします。

Horizon Help Desk Tool のアプリケーション ステータス

[セッション] タブの [コンピュータ名] オプションでユーザー名をクリックすると、[アプリケーション] タブでアプリケーションのステータスと詳細を確認できます。Linux デスクトップセッションでは、[アプリケーション] タブにアクセスできません。

アプリケーション

アプリケーションごとに、現在のステータスとその他の詳細を表示できます。

表 10-14. アプリケーションの詳細

オプション	説明
アプリケーション	アプリケーションの名前。
説明	アプリケーションの説明。
ステータス	アプリケーションのステータス。アプリケーションが実行中かどうかが表示されます。
ホストの CPU	セッションが割り当てられている仮想マシンの CPU 使用率。
ホストのメモリ	セッションが割り当てられている仮想マシンのメモリ使用量。
アプリケーション	実行されているアプリケーションのリスト。
更新	更新アイコンをクリックすると、アプリケーションのリストが更新されます。

Horizon Help Desk Tool でのデスクトップまたはアプリケーションセッションのトラブルシューティング

Horizon Help Desk Tool では、ユーザーの接続状態に基づいて、デスクトップまたはアプリケーション セッションのトラブルシューティングを行うことができます。

開始する前に

- Horizon Help Desk Tool を開始します。

手順

- 1 ユーザー カードで、[セッション] タブをクリックします。

パフォーマンス カードに CPU とメモリの使用量と、Horizon Client、仮想デスクトップ、公開デスクトップに関する情報が表示されます。

2 トラブルシューティングのオプションを選択します。

オプション	アクション
[メッセージを送信]	<p>公開デスクトップまたは仮想デスクトップのユーザーにメッセージを送信します。警告、情報、エラーなどのメッセージの重要度を選択します。</p> <p>[メッセージの送信] をクリックし、重要度とメッセージの詳細を入力して、[送信] をクリックします。</p>
[リモート アシスタンス]	<p>接続されているデスクトップまたはアプリケーション セッションのリモート アシスタント チケットを生成できます。管理者は、リモート アシスタンス チケットを使用してユーザーのデスクトップを操作し、トラブルシューティングを行うことができます。</p> <p>注 Linux デスクトップユーザーは、この機能を使用できません。</p> <p>[リモート アシスタンス] をクリックして、ヘルプ デスク チケット ファイルをダウンロードします。チケットを開きます。リモート デスクトップでユーザーがチケットを承認するまで待機します。チケットは、Windows デスクトップでのみ開くことができます。ユーザーがチケットを承認すると、ユーザーとチャットを行い、ユーザーのデスクトップの操作を要求できます。</p> <p>注 ヘルプ デスクのリモート アシスタンス機能は Microsoft Remote Assistance をベースにしています。公開デスクトップに Microsoft Remote Assistance をインストールし、リモート アシスタンス機能を有効にする必要があります。Microsoft Remote Assistance で接続またはアップグレードの問題が発生すると、ヘルプ デスクのリモート アシスタンスが開始しない場合があります。詳細については、Microsoft の Web サイトで Microsoft Remote Assistance のドキュメントを参照してください。</p>
[再起動]	<p>仮想デスクトップで Windows の再起動プロセスを開始します。この機能は、公開デスクトップまたはアプリケーション セッションで使用できません。</p> <p>[VDI の再起動] をクリックします。</p>
[切断]	<p>デスクトップまたはアプリケーション セッションを切断します。</p> <p>[詳細] - [切断] の順にクリックします。</p>
[ログオフ]	<p>公開デスクトップまたは仮想デスクトップでログオフ プロセスを開始します。あるいは、アプリケーション セッションでログオフ プロセスを開始します。</p> <p>[詳細] - [ログオフ] の順にクリックします。</p>
[リセット]	<p>仮想マシンのリセットを開始します。この機能は、公開デスクトップまたはアプリケーション セッションで使用できません。</p> <p>[詳細] - [仮想マシンのリセット] の順にクリックします。</p> <p>注 保存していない作業は失われます。</p>